

光を掴まえた肖像たち

目次

- 一 chapter 1 パリ郊外の小さな街で……………(三二)
- 二 chapter 2 自由の国……………(一九)
- 三 chapter 3 告知天使……………(三六)
- 四 chapter 4 追跡……………(四六)
- 五 chapter 5 ドナウの流れで……………(六二)
- 六 chapter 6 パリへ……………(八六)
- 七 chapter 7 第二の秘密……………(一一一)
- 八 chapter 8 炎の中で……………(一三七)
- 九 epilogue 光を掴まえた肖像たち……………(一七五)

chapter 1 パリの郊外の小さな街で

1

それは、一枚の肖像画だった。何の変哲もない、誰が描いたのかも判らない、ありふれた肖像画。今すぐここで燃やしてしまっても、誰が悲しむとも思えない——

——何故私はここにいるのか？——

少なからぬ疑問の念が、カミュの動きを一瞬止める。黒一色に身を固めた自分と、一枚の肖像画がじつと向き合ったまま黙っている。

——何を今更。もう、あとには退けないと言うのに——
カミュは肖像画に右手を掛けた。非常ベルの甲高い音が、夜の闇を裂いた。

『お前に、頼みがある』

病と闘う床の中で、喘ぐようにして彼の父はそう言った。

『頼み？』

『ああ』

頼む、という言葉が父の口から漏れるのを、カミュは今まで聞いたことがなかった。

彼は、どんな時でもそこにあるもので満足できる能力を備えていたから。それ以上を望んで頼んだことなど、それまで一度もなかった。

『何ですか？ 父さん。』

これが、最初で最後の頼み事になるだろう。カミュは、承知の微笑みを浮かべて、そう訊ねた。

『…ブロワイエ伯爵家に渡った、モーツァルトの肖像画。あれを…何としてでも、取り戻し…！』

『…父さん！』

弱々しい咳が、横たわる人の喉を突いた。癌も、食道に現れる頃には全身に転移している。助かる見込みは、もうない。

『私の罪だ……頼む、あの絵は返さなければならんのだ。あるべき場所に……』

『一体、どういうことですか？あるべき場所とは？』

『スイスに、アンドリュウ・ニールセンという画家がいる……彼に渡せば、全て手配してくれる……』

カミュには、さっぱり意味が判らなかつた。けれど、あまりに父の眼差しが必死だったから、それ以上を問うことは出来なかつた。

『早く……伯爵は莫大な額であの絵を売り渡そうとしている。手遅れになる前に……』

『分かりました。買い戻せばいいんですね？』

『違う。奪うのだ。伯爵は、我々と取引する気は全くない……もう、奪い取るしか道がないのだ』

『……何ですって?!』

奇妙な沈黙が、白い病室に満ちた。喉でせき止められた言葉が、頭の奥で反響した。

——奪い取る、だつて……?——

何と言うことか。この穏和な父が、ここまで言うとは。

カミュは、数あるモーツアルトの肖像の中に、そのような荒行に見合う逸品があつたかどうかを思いめぐらしてみた。だが、それらしい絵に記憶はなかつた。

『そんな……無茶です。盗むなんて——』

『分かっている……しかし、私は騙されたのだ。私は……いつかあの絵を返す気でいた。相手が伯爵だろうが何だろうが、売ろうと思つたことなど一度も……』

『父さん……しかし……』

『三十年間……ずっと罪の意識に悩まされ……て……』
語尾が、だんだんと弱くなつていく。カミュは、はつとして父の口元を見つめた。

『……父さん?』

返ってきたのは、聴こえないほど幽かな寝息だけ。

カミュは身じろぎひとつせず、瘦せた父の寝顔を見つめていた。弱々しい、けれどどこかほつとしたような寝顔だつた。それから何度か医者がやつてきて、複雑な器具をとりつけたり外したりしていたが、結局、それも

父の意識を呼び戻すことは出来なかった。

そして、一週間前、カミュの父はただ一人の肉親に看取られて死んだのだ。

激しい呼吸に、肺が悲鳴をあげる。

冷たく大気が凍る夜の町の闇を、カミュは必死で走り続けていた。一度表通りから外れれば、街の小道は入り組んでいて、既にどちらの方向へ走っているのかもわからなかった。確かなのは、しっかりと腕の中に抱え込まれたカンヴァスの重みだけ。いつのまにか傷ついた頬を伝う血にさえ、気づくゆとりはなかった。

突然、何かが疲れ切った足を捕らえた。バランスを取り戻そうと弧を描いた腕は空しく宙を泳ぎ、彼はそのまま前のめりになって石畳の上に転がった。悲鳴を囁み殺して振り返った足下に、ぼつかりと穴があいている。少

し湿ったかび臭い匂いととも、幽かなテレピン油の匂いが鼻をかすめた。

——・・・地下室？——

ふと、小さな記憶が、脳裏を掠めた。
画家の街だ。

そう、父から聞いたことがある。

昔、この小さな街で、若い画家達が一つの流派を作り上げたのだ、と。

今は、美術書の片隅に名前をとどめるのみの、小さな

田舎町——

——そうだ・・・絵を・・・——

その時、何故、この小さな地下室が腕の中のモーツァルトにとつて安全だと思つたのか・・・

月は、なかった。暗闇に、通りを歩く人影もない。

考える、というよりも本能に近い直感に促されて、カミュは吸い込まれるように地下室へ降りていった。

神は、罪を犯した自分を見捨てたもうたのではなかったのか。

カミュはしばし追われる身の上も忘れて、その光景に見入っていた。小さな地下室を埋め尽くす、カンヴァスの山。湖の風景、壊れそうな家々、まだ早い朝の市場の雑踏……。様々な色調で描かれた、様々な大きさの絵画たち。数え上げれば軽く百枚に届きそうな、カンヴァスのオブジェ。

この中に、たった一枚が紛れ込んだとて、一体誰が気付くだろうか？

ほんの数日誤魔化せればよいのだ、と、カミュは思った。度重なる意外な出来事に衝撃を受けてはいても、頭脳の片隅で、彼本来の判断力はまだ健在だった。十中八九、伯爵は盗まれた絵のことを公にはすまい。このモーツァルトは、どう見ても伯爵の他のコレクションとは不釣り合いに劣るものであるし、派手好きの伯爵がこの絵だけは人目に触れない個人の書斎においていた事実を考へ合わせても、即警察沙汰にするとは思えなかった。

とすれば、とにかく今夜を逃げ切り、明日銀行が開く前に何食わぬ顔で訊ねてくるであろう伯爵にしらを切り通さねばならない。

むしろ、手元になれば、気の済むまで家捜しをさせ、引き取って貰うことが出来る……

カミュは、そろりとカンヴァスの山に近づき、音をたてないようにゆっくりとそのオブジェを解体し始めた。抱えたモーツァルトの重みが急に現実味をましたように感じられて、彼はただ黙々と作業を進めた。一刻も早く、この絵を隠してしまいたい。ほつとして、崩れてしまいたい。そんな神経を何とか保ちながら。

ゆえに、古びた裸電球をつり下げたコードが、まとりついた蜘蛛の巣を漂わせて風にゆられていることに気付かなかつたのも、無理からぬことであつたかも知れない。

「……あんた、一体何してるんだ？」

呟くようなそんな問いが自分に対してかけられたのだと気付いたのは、言葉が耳を打ってしばらく経つた後のことだ。あまりに静かな口調で、怒りも驚きも感じられ

ず、何ら警戒心を刺激するものがなかった。はつとして後ろを振り向くと、狭い階段の壁に寄りかかる人影が見えた。

「あ……」

年は、自分と同じくらいか。ふてぶてしいほど落ち着き払って、長い黄金の髪を無造作に束ねた青年がを組んで目の前に立っている。

「俺の絵を盗もうって輩には見えないな……さしずめ、趣味はルノワールかマネかつてところだろう」

人影はにこりともせずになんか言うのと、腕を組んだまま、階段から些か風変わりな侵入者の前へと降り立った。

「……見たところ、まともな家業で食つてるとは思えないでただが……」

硬直している侵入者を、頭のとっぺんから足の先まで一瞥する。

「素性は訊いたつて答えないだろうな。何をしに来た？」

「……すまない。君の絵に手を出すつもりはなかった」
 やつとそれだけ答えたカミュに、青年は皮肉な笑いを口元に浮かべて、ふん、と小さく鼻をならした。

「だろうな……残念だが」

つまらなそうに付け加えたのは、自分の絵が盗まれるほどのものではないということを自覚しているからか。

不思議に落ち着いている自分を、カミュは発見した。目の前の青年は、自分の絵が荒らされているというのに怒っている気配もなかった。どちらかといえば、見るからに怪しい自分を訴え出る以前に、どこか事態を面白

がつているように見える。

事情を話せば協力してくれるかも知れない。

利用されて伯爵に売り渡されるかも知れない、とまぎ疑えないのは、カミュの人柄であり、育ちの良い家柄のせいでもあった。

実はそれ以上に、この青年の醸し出す飄々とした雰囲気

「それは……?」

ふと、青年の視線がカミュの腕の中にしつかりと抱え込まれた絵に移された。その、純粹に興味をひかれたらしい瞳の色を見た瞬間に、カミュの中で小さな鍵がひとつ外された。彼は画家だ。画家の目には、この絵はどう映

るのだろうか？

父から美術商の店舗をひきついで、既に三年になる。

そこそこ鑑定眼には自負のある自分が、どうしても納得できないこのモーツアルトの価値が、画家の目ならば分かるだろうか・・・

言葉が自然と溢れていたのは、そんな不安のせいでもあったかも知れない。

「この絵を・・・ここに隠させて欲しい。二、三日でいいから。これを抱えたままでは、逃げ切れない」

言った自分が一番びつくりするような言葉を紡いで、カミュは真剣に青年を見つめた。

ここで説得出来なければ、自分は終わりだ。

「・・・どこから盗んできた？相手が美術館やら博物館ならごめんだな」

にこりともせず、青年が睨み帰す。

「この町の郊外にある・・・プロワイエの伯爵家。」

「・・・あのインテリ野郎か」

吐き捨てるように言つて、青年は顔をしかめた。本心では絵画など金儲けの材料としか思っていないくせに、

人前では分かつたような口をきくこの伯爵が彼は大嫌いだったのだ。

「——そういうことなら、協力する。だがここはまずいな。

俺は肖像画は絶対に描かない主義なんだ」

あつけないほどきつぱりとそう言い切つて、彼はなにやら「そごそと木箱の中を探り始めた。

「あ・・・」

「ミロ。」

カミュの方を振り向きもせず、青年が返す。

「え？」

「俺の名前だよ・・・あんたは？」

「——カミュ。」

引きずられるように答えてしまつてから、カミュは思はず赤面した。・・・どこの世界に、名を訊かれて素直に答える泥棒がいるものか。

「安心しな。俺は一度協力した相手を売るようなせこい真似はしない」

カミュの動揺を見ていたかのように、青年が続ける。

「失礼。ちよつと人様より勘が良くてね」

ふいと振り向いて、青年は袖をまくり上げた右手を差し伸べた。反対の手には、釘抜きが握られている。道具箱を捜していたのはこのためであつたらしい。

「ほら、貸しな。」

この時のカミュの表情は、まさに鳩が豆鉄砲を食らつたような、という表現に値するものであつたに違いない。とんとん拍子に話が進んでしまったことへの驚き以上に、目の前の人物こそが不可解だつた。

一体、彼は、真夜中に進入してきたはた迷惑な泥棒の話を本気で信じるつもりなのか。

それとも、よほど伯爵への個人的怨恨が強いのか……

いや、それ以前に、彼はやはり芸術家なのだ。

「……それじゃ、ミロ……一体、何をするんだ？」

些か、警戒した声音になつてしまつたのはこの際無理もないというべきであろう。青年は、ふと笑つた。

「このままじゃかさばるからな。カンヴァスをばらして絵だけにした方がいい。そう古い絵でもなさそうだし……大丈夫だろ」

時間は、殆ど必要なかつた。その言葉が終わるか終わ

らないかのうちに、ミロはカンヴァスの止め釘をきれいに外してしまつていた。言葉もないカミュの前に、木の枠組みがころんと音をたてて転がる。

「さて。急がないとな。そろそろ、奴らが来る」

「……それも、勘？」

「半分はね。残り半分は、あんたよりも奴の手下を知つてるから、かな」

一人切れる奴がいるんだ、と呟いて、ミロは階段へちらりと視線を投げた。当然、今はまだ誰の来る気配もなかつたが。

「奴らに面は割れていないな？」

「大丈夫だ……伯爵本人には、随分前に会つたことが

あるが……」

「ふうん……ま、本人が乗り込んでくることはないだろう」

ミロは傷つけないようにそつと肖像画を巻くと、今度は愉しそうに笑つていった。

「さあ、後はカミュ、あんたの演技次第だ」

カミュが連れて行かれたのは、二階の寝室だった。ベッドと衣装ケース、小さな鏡台以外には何も無い部屋だったが、きれいに整頓されていた。どう見ても、そこは女性の部屋だった。『演技』と言うからには、女装でもさせるつもりなのかも知れない。カミュは、そう思った。「その束ねた髪の毛、解いた方がいいな。それから声を出すとばれるから、何も喋るなよ」

「・・・わかった」

急場をしのぐためだ。・・・贅沢は言っていられない。

ミロは、窓辺に寄って外に目をこらしていた。遠くの方に、ちらちらといくつもの明かりが動いているのが見える。愚かな、とミロは内心で嘲った。こんな夜中に大勢で徘徊するなど、追手の存在を誇示するようなものではないか。

「来たな・・・時間がない。すぐに服を脱いで、ベッドに入れ」

「・・・何だって」

流星に髪を梳く手を止めて、カミュはミロを凝視し

た。・・・一体、何を考えているんだ？

「服を脱げと言っているんだ。奴等を追い返すには、それが一番手っ取り早い」

「なっ・・・いくら何でも——！」

「奴等、しつこいんだよ。隠れたって、こんなボロい家じゃすぐにみつかつちまう。あんた、奴等にしょつびかれたいのか？」

頬に、血が登っていくのが分かる。とはいえ、ミロの言葉は確かに正しかった。

——・・・演技だ。たかが、女のふりをするくらい——
返事の代わりに、革の手袋を脱ぎ捨てる。

「服は丸めて、ベッドの下に放り込んでおけばいい。それから、絵は布で包んでマットレスの下に敷くんだ」

女物の服を床に無造作にばらまきながら、ミロが言う。

・・・ひよつとして、彼はそういう趣味の持ち主なのだろうか？

うら寒い悪寒が背筋を走ったが、そのことを追求している暇はなかった。

・・・あり得るかも知れない。何と言っても芸術家だ

から。

『演技』以上のことをしたら、叩きのめしてやる。そう胸に誓いながら、カミュは黒いタートルのシャツに手をかけた。

2

時刻は、既に午前二時を廻っていた。まばらに点在する家々の灯も消えて久しい。

「メームリンク、この町はどうだ？」

「一軒一軒足を運ぶには及びません。敵も、愚かではありますまい・・・このまま絵を抱えて逃げようとは思っていないでしょう」

メームリンクと呼ばれた男は、ちらと背の高い主を見やった。

「では、どうする？」

「この町は、画家の町。部下を少人数のグループに分け、画家の家を一度に攻めさせるのがよろしいかと。たとえ犯人は捕まらなくとも、必ずや肖像画は見つかると思われます。ターナー殿。」

「ふむ・・・。」

ターナーは腕を組み直して沈思した。メームリンクは、不思議な能力を持っている。俗に言う、ESP能力者なのだ。

「このメームリンクの言うことであれば・・・」

「わかった。お前の言うとおりにしてみよう」

「口紅くらいは、ひいた方が良さそうだ」

ほの暗い灯りの灯された部屋で、ミロは、備え付けの小さな鏡台から口紅をとってカミュの方に投げた。

「・・・いいのか？勝手に使って・・・」

小さな木のベッドの上から、鏡台の横の青年を振り返

る。着痩せする質なのか、衣服を取ると意外に骨太でしっかりした体躯に見える。

その奥の鏡の中に、タオルケットで腰から下を隠した自分が映っていた。

それほど華奢なつもりはなかったのだが——ミロと並ぶと、確かに線が細く見えるかも知れない。

それにしても、身体の線が見えてしまえば、女だと偽るのは少々苦しい、といったところだろう。

「構うもんか。それよりもあんた、もう少し嬉しそうな顔しないと、それらしく見えないぞ」

「わかつている」

カミュは手元に投げ出された口紅を取ると、鏡も見ずにいきなりひいた。淡い、ワインレッドの口紅。

「お・・おい、鏡も見ないで——」

「失敗したか？」

「．．．いや——」

ミロは、言葉も忘れてカミュに見入った。明るい髪的女には少々派手なそのワインレッドは、カミュの希有な赤毛には不思議なほどよく調和していた。三つ編みでつ

いた緩やかなカーブを描く一筋が、白い頬から首筋にかけて淡い影を落としている。長い睫の奥からこちらを見つめる瞳の色がその髪と同じ紅であることに気付いたとき、不意に、ミロの背を奇妙な悪寒が走り抜けた。

「．．．ぞっとするような美貌、というのは、こう言うのを言うんだろうか。」

男だとは思えない。だが、女でもない。情熱を示すはずの紅は、あまりにも清冽すぎて——まるで、性を持たない生き物であるかのようなのだ。

「．．．慣れてるんだな」

やつと絞り出した一言に、カミュはやや無然として答えた。

「好きで慣れた訳じゃない。父の友人の画家のモデルをよくやった。．．．もつともあの時は、天使の役だったから口紅をしまつてミロに投げ返す。こういうところは、確

かに男であろう。」

「天使は両性具有だから、女を使うより男を女装させた方が都合がいいのだそうだ」

「両性具有、ね．．．」

そうとは思えないが、とは言わなかった。この紅に、扇情的な色を見る者もあるだろう。特に、このすつきりと整った顔立ち以外目に入らないほんくらどもは。

——これは、さつさと役になり切った方が勝ちだな——
ミロはふいとそっぽを向くと、最後に身につけていた下着をこれみよがしに床に脱ぎ散らかして、カミュの隣に潜り込んだ。

「悪いな。一緒させてもらうぞ」

「尋ねたいことがある！扉を開けろ！」

けたたましい怒鳴り声が窓の下から聞こえてきたのは、それから数分後のことだった。

ミロは、暗がりにカミュを隠すように覆い被さると、その罵声にじつと耳をすませた。

「開けなければ扉を壊して入るぞ！それでもいいのか！」
「行儀の悪い奴等だな。他人の家の扉を壊すのは犯罪だつ

てことが、分かってないらしい」

「ここではこんな仕業が許されるのか？」

「ああ。伯爵の一言で、無罪放免だ」

むっとした表情が見えるような、ミロの呟きである。途端に、扉を打ち壊す音。

「ミロ……！」

「お出しました。」

ミロはカミュの顔を両手で挟み込むと、いきなり唇を塞いだ。

『……ミロ！』

「しっ……」

階段を駆け上がってくる複数の足音が聞こえる。ミロは唇を合わさる角度を変えて執拗なキスを繰り返しながら、カミュの身体に腕を回した。仕方なく、カミュもミロの背に腕を絡ませる。同時に、扉を開け放つ音が派手に鳴り響いた。

「誰もいないのか！」

なだれ込んでくる、四つの人影。

「……いる……ようだな」

「・・・何か用か。」

やつとカミュの唇を解放して、ミロが侵入者を睨み付ける。カミュはびつくりして風変わりな画家を見上げた。・・・どうやら、完全に情事を邪魔された男の役になりきっているらしい。この殺気はどうみても本物である。

——それなら、私も怯える女になりきらなければ・・・

カミュは咄嗟に薄いタオルケットで身体を隠し、ミロの体躯にすぎたふりをしてその影に隠れた。

「いや・・・少々尋ねたいことがあるのだ。ここに、モーツァルトの肖像画を抱えた男が逃げ込んでこなかったか？」

「モーツァルト？知らんな」

「ブロワイエ伯爵の大切な絵なのだ。匿うと、後で酷い目に遭うぞ」

「知らんと言ってるだろうが。探すならどこでも勝手に捜せ。ただし——」

ミロの瞳が、一層深い青に輝く。

「俺達の邪魔したら、その場で本物のモーツァルトの顔

を拜ませてやるがな！」

「わ、わかった！そう怒鳴るな。何、ちよつと調べさせてもらうだけだ」

先ほどの命令口調はどこへやら、男たちは後ずさりながら言った。怒気迫るミロの形相もさることながら、その後ろに目も醒めるような美人が全裸のまま頬を赤らめて控えているのでは、さしもの彼らも仕事やりにくい。「さ、こんな奴らほつといて、続きをやろう。時間ももつたいないよ」

男達が動揺したと見るや、一転して、ミロが甘えた声音をカミュに向ける。敵の目前でやにさがった男の役を演じようというあたり、カミュにはおよそ理解できない神経だが、敵の緊張感を殺ぐには確かにこれが一番手っ取り早い方法であろう。

「でも、ミロ・・・」

不自然に黙り込まないように、カミュは声を殺して囁いた。声色を悟られないための小細工が、かえって色香を増している。

「いいから。」

ミロが、毛布がずり落ちないように気を配りながら、カミュを再びベッドの上に押し倒す。

「ミロ……」

——なかなか似合ってるじゃないか。ずっと、そのまま
でいりゃいいのに。——

——うるさい！今だけだ。二度と女の真似なんかするものか！——

声にならない言葉が、激しい視線となつて真正面から火花を散らす。うまい具合に、ミロの金髪が二人の横顔を隠した。

「……いいよなあ……」

カンヴァスを探す手を休めて、ぼそつと追手の一人が呟いた。彼らだつて、好きでこんな真夜中に家捜しをしているわけではないのだ。

ぴくりとミロの頭が動く。

「……貴様……人の楽しみを只で見物しようとは、いい度胸だな……」

「いや、その……」

「うるさい！用がすんだんならとつと出ていけ！さも

ないと……」

「ま、待て！怒るな、もうすぐに——」

「おい！地下室があるぞ！カンヴァスが山のように積んである！」

そのとき突然、階下から声が飛んできた。助け船とばかりに、侵入者達は互いに顔を見合わせた。

可能ならもう少し眺めていたい気もするが、その前に凶暴な青年に頭をかち割られるのがおちであろう。

いくら伯爵の後ろ盾があるとはいえ、一般市民の家に押し入り法を犯しているのは事実である。

給料分の義理を果たしたらさつさと切り上げてしまいたいというのが、彼らの本音であった。

「よし、わかつた！すぐにいく！」

これ幸いと、侵入者達は開けつ放しの戸口に駆け寄つた。慌ただしく階段を駆け下りる。いっそ、つまづかないのが不思議な程の慌てぶりである。

そして、寝室から全ての音が消えた。

「……うまくいきそうだな」

低い声で、ミロが呟いた。カミュも身体を起こして、

階下の物音に耳を澄ませてみた。何やら地下室の方から、物をひっくり返す音が聞こえてくる。

だが、やがて数分でそれもおさまり、男達は来たときと同じようにばたばたと夜の町を駆けていった。

「・・・取りあえずは、助かったようだな・・・」

溜息と共に吐き出されたミロの呟きに、カミュも小さく頷いた。信じられない話だが、追っ手は去ったのである。

それも、こんな冗談のような喜劇に騙されて！

どつとカミュの緊張が解けたのも、無理からぬことであつた。

「有り難う。感謝する。お陰で——」

ともかくにも礼を述べようとして、彼は不意によからぬ気配を察した。はつと顔を上げる間もなく、ミロがカミュの身体を押し倒す。反射的にカミュは身をよじつた。

「何をする！」

「さっきの続き。」

「貴様——っ！」

咄嗟に、握りしめた右手が振り上げられた。したたかに

頬を殴りつける筈であつたその手は、しかしそのまま勢いよく空を切つた。拳が頬に届く前に、ミロが身体を退いたのである。

「冗談だよ。あんたつて、からかうとほんと面白いな」

「・・・何だつて?!」

「さっきからにこりともしないからな。ちよつとからかつてみたくなつた」

「随分と、品のない冗談だ」

「手厳しいね。」

ミロはくすくすと笑いながら、未だ自分を睨んでいるカミュを見つめた。ほんのりと、白い頬に赤みがさしている。この容貌ではその手の男達には垂涎の的であろうに、まったく健全な反応である。よほど育ちがよいのだろう。襲われたことを心底驚いたような素直な反応に、ミロは好感を持った。

大体、容貌に恵まれている者は、男女に限らずそのことを意識しているものである。

「悪かつた。だが俺は、嫌がつてる相手に手を出すほど悪覚じゃないんだがね」

ミロは勢いよく起きあがると、今し方の出来事を忘れてたかのようにてきぱぎと服をつけ始めた。急がなくてはならなかった。いつ、追っ手が戻つてくるとも知れないからだ。

カミュも我に返り、ベッドの下から服を引きずり出して、身につけ始めた。

「送つてやるよ。あんたの家まで。絵を隠すところはあ
るのか？」

「地下に隠し部屋がある。とりあえずそこへおいて、隙
を見て貸金庫に預けるつもりだ」

「貸金庫？盗品なんか持ち込んで大丈夫なのか？」

「スイス銀行の支店で、昔から取り引きしているところ
がある」

あそこなら何を持ち込んでも大丈夫だ。そう返すカミュ
を、ミロは思わずボタンをはめる手を止めて見つめ直し
た。

スイス銀行に、そんな信用をおかれている身分を想像
したのである。

「・・・あなたの親父さん、ひよつとして政治家か大会

社の社長なのか？」

些か揶揄するような口調になってしまったのは、パン
を買う金で絵の具を買わざるを得ない貧乏画家の僻みで
もあるう。

カミュは、その口調の変化に気付かなかったかのよう
に、さらりと返した。

「ただの画商だ・・・それに、あの家の主はこの私だ。
丁度一週間前から。」

今度は、ミロがどぎりとする番であった・・・成程、
あり得ないことではあるまい。現にミロも、こうして一
人で生きているのだから。

「・・・余計なこと言っちゃまったみたいだな・・・ごめん。
」
「気にしなくていい」

「・・・それじゃ、行こうか」

ミロはマットレスの下に隠してあった肖像画を取り上げ
ると、持ちやすいように巻いてカミュを促した。こくり
と、カミュが頷く。

やがて人騒がせな追跡人達の後を追うように、二つの
黒い影が闇にとけ込んでいった。

二人は、唾然として立ち尽くしていた。目の前に拡がるのは、天を焦がさんばかりの炎。集まった消防員も燃え盛る炎の前になす術を知らず、ただ右往左往するばかりだった。

カミュがきつく両手を握りしめる。

「どういふことだ・・・これは——」

ミロが途切れ途切れに呟いた。

「伯爵の意志だろう。彼は私が犯人であることを確信している、逃げ場を潰しにかかったんだ・・・」

「だからって、家ごと燃やしちまうなんて——！」

ミロは真っ直ぐにカミュの方に向き直った。疑いの暗雲が、ひたひたと胸に拡がっていく。やがて、ミロは鋭い青の瞳をじつとカミュの瞳に向けて言った。

「あんた・・・一体、何を盗んできたんだ？あの絵は——」

ただの絵ではない。何か重要な機密が絡んでいるのではないのか。

「どういふことなんだ？あんたまさか・・・！」

「・・・知らない。私はただ——」

カミュの瞳はミロを見てはいなかった。ゆつくりと、意識が薄れていく。

——父さん・・・貴方は私に、何をさせようと言うのです？

——
「カミュ！」

カミュが音もなく崩れ落ちる。ミロは意識のないカミュの身体を抱えたまま、きつい目で遠くの炎を睨み付けた。

chapter 2 自由の国

1

カミュは、梢の鳴る音に誘われてゆつくりと目を開けた。薄い、クリーム色の天井。遅い午後の柔らかい光が、その天井に木々の影を映し出していた。それは、カミュの知らない風景だった。

「ミロ……?」

ふと、そんな言葉が口から漏れる。どうして彼の名を呼

んだのか、カミュ自身にも分からなかった。

ゆつくりと、ドアのノブを回す音が聞こえた。中の人を気遣うような、遠慮がちな動作。身体を起こして戸口を見やると、扉の隙間から長いフランスパンの先が覗いた。

「カミュ……何だ、起きてたのか。」

「ああ……。丁度、今。」

ミロは、張りつめていた緊張を解くと、パンの入った袋をどざりとテーブルの上に置いた。

「びつくりしたよ。いきなり倒れるんだもんな」

「……済まない。このところ睡眠不足が続いていたものだから……。また君に迷惑をかけてしまったな」

「迷惑だ、とは思わないがね。幸い寝泊まりする場所もあるし」

「ここは……?」

カミュは思いだしたようにそう尋ねた。あれから。家の近くで自分が倒れてから、ミロはどうやってここへたどり着いたのだろう。

「ローザンナが探してくれたんだ。昨日の部屋の主だ

よ。……あのベッドに、三人は寝られないからな」

カミュは呆気にとられてミロの顔を見た。ではあは、彼女の部屋だったのか！

「自分がいない間に他の女を泊めたと思つたらしくて……ふくれつつらしてたけどな。あんたを見たら、すぐに機嫌を直して部屋を探してくれたよ」

ミロは袋からじゃがいもを取り出しながら言つた。隣には、人參が無造作に転がっている。

「ミロ……親切は有り難いが……帰らなくていいのか？ 彼女のところに。」

「逢いたきやあいつの方からくるさ。大体、追われているのにおつ倒れちまうようなひ弱な泥棒さんを放つとくわけにはいかないだろ？ あんた、あれじゃ命幾つあつても足りないぜ」

「そうだな……」

カミュは苦笑して目を閉じた。脳裏に、赤い炎の色が映つた。屋敷を燃やしてまで取り戻そうとする程の肖像画。あのモーツアルトのどこに、それほどの価値が潜んでいるというのだろうか。

——やはり、何か重要な機密が絡んでいるのだろうか。

考えたくはなかつた。だが、それ以外には考えられないような気もした。ミロもおそらく、そう思っているのだろう。

「どうして——」

カミュはミロの方を見つめて言つた。

「何も訊かない？ 尋常じゃないと、君だつて思つたはずだ。」

「思つたさ。俺はとんでもない奴に手を貸してしまつたのかも知れない、とね。でもあの時あんたは、その俺と同じ目をしていた」

ミロはじゃがいもの皮を剥く手を止めて、カミュの方を振り返つた。

「あんただつて被害者なんだ。そうだろ？ よくあることさ。綺麗なお姫さまは、悪い男に騙されて悪事の片棒を担いでしまう——」

「ミロー！」

カミュはミロを思いきり睨み付けた。全く、この男は真

面目かと思えばすぐふざけたことを言う。

「はは、そう怒るなつて。ま、そういうわけだから、あんたを責める気はないよ。体調が戻ったら、好きなようにすればいい。美人の手助けは嫌いじゃないからな」

「・・・有り難く、好意だけ受け取ることしよう。まだ仕事が残っているので。」

「いい返事だな。」

ミロはくすぐすと笑いながら、再びじゃがいもを剥ぎ始めた。

「・・・何か、手伝おう」

「いいよ。眠れるときにゆつくり休んどけよ。また、眠れない日が続くかも知れないぜ？泥棒さんには。」

「しかし・・・」

「第一、ナイフが一本しかない」

につと笑つて、ミロはナイフをかざして見せた。成程小さなキッチンには、スープ鍋とフライパンの他には何も見当たらない。

「・・・分かった。今日は世話になることにするよ」

カミュは諦めて、ベッドに横になった。途端に眠気が

襲つてきた。ここ一ヶ月余り、カミュは父の看病のために殆ど眠れなかったのだ。

久々に緊張が解けていくのを感じながら、カミュは再び心地よいまどろみに落ちていった。

「有り難う。本当に世話になった。・・・恩は一生忘れない」
「気をつけろよ。伯爵は諦めの悪いのでも有名だから・・・
健闘を祈るよ」

カミュはストールの中に肖像画を包んで背中のナツプサックに突っ込んだ。来ているのはミロの服である。

「うん。それなら旅行中の学生にしか見えない」

ミロが満足そうに頷いた。

「ミロ・・・」

「ん？」

「あまり考えたくないが——」

カミュは少し言いくさそうに口ごもった。

「もし伯爵や警察が君を検挙しようとしたら、無理に隠したりしないでありのままを話して欲しい。君は通りすがりの人間を助けただけなんだ。何の罪もない。」

「気遣いは有り難いがね。俺は誰かに監禁されたり尋問されたりつて言うのは、とことん嫌いなんだ。精々、捕まらないようにするよ」

ミロは悪戯つぼく笑つて、片目をつぶつた。カミュも口元が綻ぶ。

「それは確かに、その方がいいな。牢獄の中では炊事は出来ないし」

「炊事？」

「ああ。」

少しからかうように微笑んでいる、赤い瞳。

「——昨日のスープ、美味しかった。人にスープを作つて貰つたのなんて、久しぶりだ」

光が差したのかと、ミロは思った。それくらい、初めて見るカミュの笑顔は華やいで見えた。

「うん……まあ、口に合つたんならよかつたけど」

妙に照れくさくなつて、あらぬ方を見上げる。……こ

の俺が、負けるなんて。

「……それじゃ、行くから。」

「ああ……気をつけてな」

ミロはカミュを見送つて、それから窓の側へ寄つた。やがて見事な緋色の髪が、風に煽られながら窓の下を通り過ぎていった。

2

『スイスに、アンドリュウ・ニールセンという画家がいる。彼に……』

カミュは、蒼穹にそびえるマッターホルンを見上げた。観光客に紛れて入国したため、まず山登りとなつてしまったのだつた。

——アンドリュウ・ニールセンか……スイスに何人い

るか分らないな——

彼に渡せば、と言ったところで、分かっているのはその名前と彼が画家であるという事実だけなのだ。かといって、追われている身ではそのんびりと構えているわけにもいかない。

とりあえず、新聞に広告でも出してみるか。彼に任せろと言うのなら、彼も報告を待つているはずだ。

上機嫌なガイドのアナウンスを聞きながら、カミュは白い便せんを取り出した。

軽やかなノックの音に、カミュは顔を上げた。

「ムッシュー、お手紙がとどいておりますが」

「ああ・・・有り難う」

カミュはボーイにチップを渡すと、青い封筒を受け取った。宛名はカミュの名になっている。ルツェルンの消印だった。差出人は——アンドリユー・ニールセン。

『初めまして。新聞広告には父君のお名前がありました

が、父君は一週間ほど前に逝去されたとのこと、おそらく息子さんからの連絡であろうと思ひ、ホテルに問い合わせさせて確かめさせていただきました・・・』
彼は、父の死を知っていたのか。驚きながらも、カミュは丁寧な英語で書かれた手紙の字面を追った。

『父君には、あまりに早い神のお召し、心からお悔やみ申し上げます。葬儀には是非とも参上したい心づもりでしたが、父君によくよく頼まれたことがあります。その準備のためにここを動くことが出来ませんでした。おそらく貴方のお話にも関連があることと思ひます・・・』
その後には、一度ゆつくりと逢つて話をしたいということ、もし構わなければルツェルンで逢いたいと思つてゐること等が続き——

『・・・ですから、よろしければ観光がてらにカペル橋の水の塔でお会いしませんか。今なら観光客もそれほど多くはありませんし、近くに魚料理が美味しい店も知つておりますので・・・』

返事を待つている、と終わりにしたためて、手紙は鄭重に締めくくられていた。万が一を警戒してか、その文面

には肖像画もモーツァルトの文字もなかった。

——・・・とすると、とりあえず今回はこの絵は必要ないということか。——

何があるか分からない。下手に持ち歩くより、銀行を介して渡した方がいいかも知れない。

カミュは手紙をしまい込むと、ストールに巻かれたままの肖像画を持って外に出た。

「〈運命の輪〉、正位置。〈吊られた男〉、正位置。〈死神〉、正位置……」

「どうしたの？依頼？」

「いいや」

ミロは、ローザンナの方を見向きもしないまま散らばったカードを睨み付けていた。

「珍しいわね・・・仕事でもないのにカードを繰るなんてびつくりしたように、ローザンナが呟く。

「堂々めぐり、報われない努力、一切の活動停止……」

ローザンナはキッチンに入ると、コーヒーに砂糖と生クリームをたつぷり入れてカードが散らばったテーブルへと運んできた。タロットカードを扱った後は、必ずコーヒーと決まっているのだ。

「〈戦車〉、正位置。〈太陽〉、正位置。〈節制〉、逆位置……強気で行けば、悪くはないな」

「誰の運勢を占つてるの？」

「俺。」

「えっ？」

思わず、ローザンナは口に運びかけた自分用のマグカップを降ろした。ミロは画家としての収入を補うため——というより、画材を手に入れるためにしばしば占いの依頼を引き受けているのだが、占いを職とするのは彼の画家としての矜持が許さないうらしく、必要に迫られたとき以外はカードには手を出さないのだ。本人に言わせれば『占いなんてものは気休めにすぎない』らしく、自分の運勢を占うなどと言うことは今まで一度もなかったのだが……

「どうしたの？何か不安なことでも——」

「ちよつとな。そろそろ、心機一転を計ろうかと思つて。」

「・・・どこかへ、行くの?」

「多分そうなるだろうな。・・・ほら、〈愚者〉の正位置がきた」

大アルカナ第0番〈愚者〉は、文字どおりゼロからの出発を意味する。自分自身の発見、旅立ち・・・そんな意味を表す札だ。

「悔しいけど、貴方の占いは当たるものね。・・・一人で行くの?」

「ああ。長い間世話になつたな。お前には。」

「別に・・・」

ローザンナはふいと横を向いて、独り言のように言つた。

「そうよね。私達、ただの同居人だもの。こうなつて当然よね」

「ローザンナ?」

「でも私・・・貴方のためなら今すぐ大学やめても——」

ミロは、初めてローザンナの顔を見上げた。灰緑色の瞳が、いつになく真剣な色を帯びてミロを見つめている。

「だめだよ。」

視線をかわすように軽く笑つて、ミロは言つた。

「いくらお前がいつて言つてもな。そんなことしたらお前の親父さんが怒髪もんだぜ。俺も、学のある女性を人生の裏街道に引きずり込む気はしないしな・・・」

「でも・・・」

「ちゃんと、大学出ろよ。行かせてもらえるんだから。機会は、大切にしなきゃな」

「ミロ・・・」

ローザンナは、言葉の続きを飲み込んだ。ミロが独学で絵を学んだときの苦労の数々を、さんざん聞かされてきたからだ。

それに、勝手にミロに熱を上げたのは私の方なんだから。

自分の誘いに乗ってはきても、ミロにとってはコミュニケーションの範囲を越えていない。それは初めから、判つていたことだった。

「いつ出発するの・・・?」

「明日にでも。」

「・・・じゃあ、今晚抱いて。いいでしょ?お別れの前

に……」

「ああ……」

ローザンナは迷いを振り払うように笑うと、お先に、と残してシャワールームに下りていった。ミロはその後ろ姿を見送つてから、テーブルの上に伏せられた最後の一枚を返してみた。

〈星〉、正位置。

「スター……水瓶座のカードか。」

制約のない自由と解放。そして水。

「行き先は、自由の国スイスだな……」

ミロは冷めかけたコーヒーを口に運んで、愉しそうにひとりごちた。

カベル橋の水の塔とえば、ルツェルン観光の目玉だ。

自分が場所を間違えたとは思えないし、ましてや相手が間違える筈もない。

——あと十分待つて来なかつたら、一度電話連絡を——
カミュがそう思ったときだった。

「た……大変！人が——！」

女性の叫び声とともに派手な水音が上がる。どうやら、誰かが橋から飛び降りたらしい。橋の上からの湖の景観を楽しんでいた観光客達は、一斉に声の上がつた方へと集まつていった。

スイスの水は冷たい。濡れなくても、心臓麻痺でやられることがあるかも知れない。

カミュは人々が固まつているあたりの水面に目を凝らしてみた。何も、浮かんでくる形跡はなかった。

「早く、警察に連絡を！」

慌ただしく、二、三人の男が駆けていく。程なくして、数人の警察官が駆けつける足音。

——じきにここは閉鎖になるな……——
——どうやら、ニールセンが来るまで待つていられそうにも

カミュは腕時計にちらりと目を遣つた。午後一時二十分。約束の時間を、二十分回つていた。

——日時を間違えたんだろうか。——

ない。

——仕方ない。一度下りるか。——

カミュは喧噪の下の水面を気にしながら、川沿いのカフェへと足を運んだ。

「投身自殺だったみたいですね」

「ええ・・・そのようですね」

注文したコーヒーを待ちながらカペル橋に視線を投げていると、長い金髪を後ろで束ねた男が話しかけてきた。

「お隣、よろしいですか？」

「どうぞ。」

失礼にならない程度にあつかりとそう答え、再び橋に視線を戻す。しばらくの沈黙。

「興味がおありですか？事件に。」

「いえ。そういうわけではないのですが」

カミュはちらつと男に目を遣つて言った。何故この男は、自分に話しかけてくるのだろうか・・・いや、普通、一

人旅の者同士が同席したら、これくらいの会話はするの
かも知れない。

「・・・ただ、人を待つていたものですかから。」

男は、それで納得したようだった。カミュは何となくもう一度橋に目を遣る気になれなくて、昼間の賑わいを見せているカフェの中を見渡した。もしかしたら、彼もこんなカフェでカペルの様子を窺っているのかも知れない。

「この分ですと、今日一日搜索活動になるでしょうね・・・」

「どうやら、橋をみられそうにもないな」

「観光でいらしたんですか？」

「ええ。絵が好きで・・・カペルに架かっているという百枚の板絵を是非とも拝みたいと思ひましてね。貴方は？この方ですか？」

「いいえ。ジュネーヴのホテルから来たんです。私も観光客ですよ」

どうも絵についているな。カミュは少し興味を誘われて男を見た。青とも紫ともつかない、不思議な色の瞳。途端に、何かが脳髓を駆け抜けたような気がした。

——何だ・・・？これは・・・——

「そうですか。ジュネーヴには素晴らしい絵があるんですよ。折角ここまで来たのだから、きつと拝見して帰ろうと思っているんですがね・・・」

男が楽しそうにカミュの赤い瞳を覗き込む。紳士然とした姿からは想像もつかない威圧感が、カミュの四肢の動きを封じた。

——しまった・・・これは・・・——

催眠術だ。カミュは必死で男から目を逸らそうとした。けれど紫の瞳はカミュの瞳を捕らえたまま、決して放そうとはしなかった。脳の動きが急速に弛緩していくのが判る。真剣にまずいと、カミュは思った。

——この男も伯爵の一味か・・・？——
不覚だ。催眠を使う者が追手の中にいたとは。絵を持ってきていなかったのは、不幸中の幸いだったかも知れない。あの絵を引き出すには、カミュのサインが必要なのだ。

——とにかく、ここで操られるわけには・・・！——
蝕まれていく神経の働きを何とか取り戻そうと、きつく

唇を噛みしめる。

「絵はお嫌いですか？お嫌でなければ、ジュネーヴの名画をご一緒に見に行きませんか？」

男がまた楽しそうに、低く呟いた。

3

カペルは騒然とした空気に包まれていた。橋の麓に集まった人々は思い思いに勝手な想像を膨らませ——あるいはやり場のない苛立ちをぶつけ合っていた。

——ついてねえな・・・——

ミロは豪華な黄金の髪に手を突っ込んで、大きく溜息をついた。折角やってきたのに、閉鎖中とはいだけない。何が不満だったのか知らないが、こんな観光地で飛び込み自殺とはよほどパフォーマンス好きのご老人だっ

たのだろう。全く、迷惑も甚だしい。

隣では、日本人のツアー観光客とおぼしき中年の女性が数人がかりでガイドに詰め寄っていた。ミロには東の言葉は判らなかつたが、流石に青い顔で対応に追われているガイドが気の毒になった。あんなすさまじい勢いで迫られたら、誰だつて口ごもるだろう。

「俺よりついてない奴もいるつて訳だな……可哀想に……あれ？」

何気なく目を遣つた方向に見覚えのある人影をみとめて、ミロは首を傾げた。長くのぼした緋色の髪。赤毛は記憶に新しいから目についたのだろうが——あんな見事な赤毛には、そうそう出会えるとも思えない。

「あいつ……？」
行く先は聞かなかつたから、今どこにいるかは知らない。でも、だからこそスイスに来ている可能性だつてないとは言えない。

ミロは何となく気になって、人影の方へと歩いていった。隣に、長い金髪の男がぴつたりと付き添っている。あの絵の取引の相手なのだろうか。コンタクトを入れて

くるのを忘れてしまったため、彼が本当にカミュなのかどうかは判らなかつた。

「しまったな……せめて眼鏡をもつてくるんだつた」
よく見ようと瞳を細めながら、ぼやく。

どんな話をしているのだろうか。まさかルツェルン観光と言うわけでもあるまいし、こちらから声をかけるのはまずそうだ。相手が気付いてくれるのを待つしかない。

——カミュ……

そのとき、五、六人の女学生がミロの前を遮つた。時間にしてほんの数秒。しかし、二人がミロの横を通り過ぎるのには十分だった。ミロは呆気にとられて立ち止まり、しばらく呆然とその後ろ姿を見送っていた。自分の目が、信じられない。

「……他人のそら似……か……？」

あろうことか。彼はミロを見もしなかつたのだ。いや、正しく言うならば、何の反応も示さなかつた。確かにミロの姿は彼の視界に入っていたはずなのだが、彼の目には特別の存在として映らなかつたのだ。わざと無視したのではない。

「へんなの……」

何とも妙な気分になって、ミロはそうひとりごちた。やっぱり他人だったのかも知れない、と思う。結局近くで確かめられなかったから、あまり自信もない。

——でも……——

それでは、あの魂の抜けたような表情は一体何だったのだろうか？

ミロは何度も後ろを振り返りつつ、その場を離れた。

何故か、胸の芯を小さな痛みが走った。

おかしい。何かを忘れている。

カミュは長い髪を弄びながら、遙か遠くに視線を投げていた。折角ジュネーヴの名画を見に行くというのに。

これではなかなか気も晴れない。

——それに……——

先ほど路上で見かけた、見事な金髪の青年。時間が経つにつれ、記憶が鮮明になっていくというのは一体どうし

たことだろう。

カミュは目の前に座っている男の淡い金の髪に目を止めた。その金色は、優しげはラベンダーの瞳にはよく似合っていた。

「……どうしましたか？何か、飲み物でもとりまじょうか？」

カミュの視線に気付いて、男が不思議そうに尋ねる。

「いえ……済みません。ムッシュ・メームリンク。

貴方の髪がとても綺麗な金色だと思つたものですから——

」

「私より綺麗な金髪なんて幾らでもありますよ。むしろ貴方の赤毛の方が珍しいでしょう？ルビーにも例えられる。そのようなほめ言葉は聞いたことはありませんか？」
メームリンクは嫌味のない口調でそう言った。言葉自体は、カミュには珍しくもない。しかし、こんなにざらりと言つてのけた人物には今まで出会つたことがなかった。

「……どちらかと言えば、女性に対する褒め言葉ですね」「それを言うなら、貴方の言葉もそうでしょう。しかし、

綺麗なものを綺麗というのに何の罪もない。とかく芸術家というのはそうしたものですよ。それを見ることを職業としている人間も……」

カミュは言葉の代わりに微笑みを返した。もつともだと思つた。発車を待つ列車のコンパートメント。少しづつ、人が集まり始めていた。

「あつ……」

不意に、カミュは小さな声を上げた。ストールがないのだ。おそらく、先ほどのカフェに忘れたのに違いない。

「なにか……?」

「忘れ物をしたようです。ストールを……」

「どこに?」

「多分……あのカフェに。」

「……変ですね?私があのお店を出る前に見渡したときには、何もありませんでしたか?」

カミュは眉をひそめて黙りこくつた。だとしたら、一体どこに忘れたと言うのだろう。

メームリンクはじつとそんなカミュを見つめていた。僅かに、瞳の紫が色濃くなっている。ストールをカミュ

から奪つたのは、メームリンクだった。一見して、カミュがあのお店に強い思い入れを持っていると知つたからだ。そう言つたものの存在は、後々折角の催眠を妨害することになる。だから、あのお店でカミュにストールの存在を忘れさせたのだ。

「じきに発車になります。……大切なものなんですか?」

「それは——」

言葉が喉の奥で止まる。……大切……? 確かに、大切なものだと思う。何をおいても、なくしてはならないものだ。では、何故……

「別に……いいんです。寒くもないから——」

カミュは窓の外に視線を向けた。珍しく、その深い葡萄酒色の瞳には、不安の影が浮かんでいた。

「これは……!」

カペル橋のふもとで、暇つぶしに立ち寄つたカフェで、ミロは思わず息を呑んだ。カウンターに忘れ去られてい

る、一枚のストール。間違いない。カミュに持たせてやつたものだ。

「やつぱりあいつ……」

無意識のうちに、ミロは唇を噛んでいた。腑に落ちないことが、多すぎる。第一に自分の姿がカミュの意識に全く働きかけなかったこと。第二に、ただでさえ目立つカミュが、それに負けず劣らず目立つ金髪の男と歩いていったということだ。追われている身であることを考えれば、あまりにも不用心すぎる。そして、このカフェに忘れられたストール……

「そうか……あの男……!」

答えは一つしかない。つまりあの金髪の男は、カミュの協力者ではなかったということだ。

「……あの馬鹿っ!」

こんな簡単に捕まりやがって!母国語でそう吐き捨ててから、ミロはカフェを飛び出した。残念ながら、タロットを繰っている暇はない。あの様子から見て、カミュは相当重度の放心状態に陥っているに違いないからだ。ことは一刻を争う。

気がつくつと、ミロはルツェルンの駅前に来ていた。特に根拠はなかった。勘がそう伝えたのだ。ミロは改札口のバーを軽く飛び越えようと、駅員の制止を振り切つてプラットホームにかけ込んだ。発車を告げるベルが、甲高い音をたてて鳴る。

「カミュ!どこにいる!」

待機する列車は五本。ジュネーヴ行き列車が、ゆつくりと動き出した。

「カミュ!」

「……?……」

窓際で頬杖をついていたカミュがふと顔を上げる。誰かが、自分の名前を呼んでいる。

「こちら!居るんなら返事くらいしろ!」

「え……?」

カミュは立ち上がつて声のする方に顔を向けた。視界に飛び込んできたのは、ストールをまとつた黄金の髪の青年の姿。さつき、カペル橋の側で見たあの――

「……あつ……!」

頭の奥で、何かが弾ける。見えないボールが取り払われ

たかのように、記憶が次々と甦ってくる。

「……ミ……ロ……?」

「カミュ!」

背後から呼び止める厳しい声に、カミュは後ろを振り返った。燃えるような、紫の瞳。途端に視界が暗転するような衝撃に襲われた。

「……そうはいくか!」

カミュはメームリンクの視線を振り切り、窓ガラスを全開に開放した。列車が、また速度を上げる。

「飛び降りる気ですか!」

咄めるような、威圧するような声が後を追う。それには答えずに、カミュはホームの上の青年を見つめた。心配そうな表情をした、口は悪いくせにお人好しな――

「ミロ!」

その言葉とともに、カミュは列車の窓からひらりと飛び降りていた。

「全く……あんた、絶対に泥棒には向いてないよ」

ミロは呆れたように呟きながら、カミュの左足に包帯を巻いていた。湖畔に建つ五つ星ホテル、シユバイツァーホーフのスイートルーム。別に選んだ訳ではない。そこしか、空いていなかったのだ。

湿布の匂いが、部屋に充満している。上品な泥棒は、列車から飛び降りた拍子に足をくじいてしまったのだ。

「私だつて向いているとは思っていないが……あれは、不可抗力だったんだ」

包帯を巻き終わったミロに軽くメルシー、と返して、カミュは言った。

「不可抗力?」

「……そう。君は、あの男の顔を思い出せるか?」

言われてミロは、昼間の出来事を思い返してみた。そういえば――記憶にない。

「……金髪だつたつてことぐらいなら……」

「つまりそういうことさ。」

カミュは面白くなさそうにつけ加えた。

「ミロ、君も彼の術にはまったんだ。私も、顔はおろか、

名前すら思い出せない。覚えているのは、彼の目を見た途端に金縛りに遭ったように思考力を失ってしまったということだけで――」

「・・・ちよつと待てよ、それじゃあいつは催眠術を使うつてことか？」

「そんな生半可なものじゃない。・・・彼なら、洗脳も可能だろう」

ミロは思わず黙りこくつた。厄介な男を敵に廻したものだ。

「随分と・・・分が悪いな。あいつは俺達の顔覚えてんのに、俺達は何も覚えてないなんてさ」

「それもそうだが・・・それよりもミロ、君の身が危ない。君は催眠状態にあつた私の目を醒ましてしまったのだから。今度は君も狙つてくるかも知れない。そんなことになつたら――」

ふと悲しそうな表情になつたカミュを見て、ミロは慌てた。・・・随分と、表情が豊かになつたような気がする。「・・・気にするなよ、俺なんかのこと。あんたは仕事のことだけ考えてな」

「なんか、という言い方はないだろう！誰にも君の代わりは出来ないのに・・・私はあの絵を引き出さない限り殺されることもないだろうが、君は命を狙われるかも知れないんだぞ？」

予想外に深刻なカミュの反応にびっくりして、ミロは口を噤んだ。どうも、カミュが相手だと調子が狂う。

「もう・・・人が死ぬのは嫌だ。」

何だか、胸をきりきりと締め付けられるような気がした。それは、ミロが今までローザンナやその他多くの女性達に感じたものに似て、それでいて明らかに違う感情だった。

人が死ぬのが嫌だつて・・・？

では、自分がへまをして死ぬのはどうでもいい、というこたか。

一体こいつは、本当に自分一人で、こんな大仕事をやり遂げられると思つているのだろうか？

「・・・同じ言葉、あんたに返してやる」

低い、押し殺したような声で、ミロは呟いた。

「あんたには近づかないよ。俺だつて、死ぬのはごめんだ。」

だが……その代わりあんたも約束しろ。良家のご子息が、このこと虎の穴に入り込んで、喰い殺されるような真似だけはするなよな！」

堪えようにも、堪えきれなかった。ミロは理由の判らない苛立ちとともに吐き捨てる、そのまま後も見ずに部屋を飛び出した。……ばかばかしい。そもそも、こいつがこんな間抜けでなければ、自分は余計な世話を焼かず済んだのだ。

——それなのにどうして……！——
 こんなに、気になるのか。

誰も居なくなつた部屋の中央で、カミュは深い溜息をついた。テレビのスイッチを入れ、ニュースにチャンネルを合わせる。今日幾度か耳にしたニュースが流れていた。

『……本日午後一時頃、カペル橋から投身自殺を図つて水死した男性は、持ち物の手帳などからルツェルン在住の画家アンドリュー・ニールセン氏と判明しました。ニールセン氏は単身で暮らしており、落ちついた物静かな人物だったとのこと、自殺の動機は不明です。な

お……』

カミュの脳裏に、紫の闇が拡がる。

「自殺……ね……」

カミュは小さくそう呟いて、僅かに青ざめた唇を噛みしめた。

chapter 3 告知天使

「また捕らえ損ねたそうだな」

「申し訳ありません・・・」

メームリンクは大人しく頭を垂れた。金銀で飾り立てられた伯爵の書斎。計画失敗の報告に向向いたのだが、その姿から恐縮の体は感じられなかった。

「ふん。お前などに任せた儂が愚かだったわ。あんな小僧一人もの出来ぬとは・・・下がれ。二度と儂の前に姿を見せるな」

プロワイエ伯爵が、金にブラックオパールをはめ込んだ指輪をまさぐりながら言い捨てる。

「は・・・失礼します」

小気味よいほどあつさりとそう言つてのけると、メー

ムリンクはさつきと書斎を後にした。ああして権力を振りかざせば、泣いて許しを乞うとも思つたか。おそらく伯爵は怒り狂っているだろうが、そんなことはもはや彼の知つたことではなかった。

——自らは何の知恵も持たず、金にものを言わせるだけの伯爵か。もはや、用はないな——

メームリンクは一度だけ紫の瞳を館に向けると、幽かに口元に嘲笑を浮かべ、後はもう振り返ることなく伯爵邸を後にした。

「・・・それで、大人しく解雇されて来たというのか？ お前らしくない所行だな」

ターナーはびつくりしたように、部下を見やつて言つた。

「確かに伯爵にはついていけないと感ずることもあるが・・・報酬の点からすれば全く不満のない額が保証されているというのに」

「ええ。ですが、私はもううんざりしてしまつたのです」
薄い笑いが、メームリンクの唇にさした。その楽しげな
微笑は、それが本当の理由ではないことを語っているか
のようだった。

「彼は、私の力を魔術か何かと勘違いしている。あの老
画家から全てを聞き出し、自殺に見せかけて始末しただ
けでも催眠術師としては上出来だと思えますよ。それを
敵を隔れるのに催眠術だけに頼つて、失敗するなどは。
彼が私の申し出を受けて一部隊貸してくれていたなら、
確実に手に入っていたものを」

「だが、黄金の髪のパainterに催眠を破られたんだろうか？」

ターナーにとっては、伯爵はまだ主である。彼は咎める
ような口調で言つた。

「そう・・・あれは、予想外でした。カミュが思い入れ
を抱いているものは全て排除したつもりだったので
すが・・・本人が向こうからやってきたのではね」

「確か、ミロ・サヴォナローラと言つたな。あれから町
をでた画家は彼一人・・・カミュの共犯者と見て間違
いようだ。全く、いろいろとやつてくれる」

ターナーはふと苦笑した。あの晩、ミロの家に押し
掛けた彼の部下達は、ベッドルームで抱き合うミロと、
美しい赤毛の女性にびつくりして逃げ帰つてきてしまつ
たのだ。

「彼は曲者ですよ。あの瞳は・・・私達のような種
の力を宿す瞳です。私の持つ力とは別種ですが・・・と
にかく、まずミロとカミュを引き離すことです。それが
私が貴方に残せる最後の忠告。」

「最後？」

ターナーは訝しげにメームリンクを見た。紫の瞳が、笑つ
ている。

「私はこれからあるお方の元で働こうと思つています。
おそらく、伯爵とは肖像画を奪い合うことになるでしょ
う。あまりライバルに情報を与えるわけにはいかないの
でね」

「誰なんだ・・・？あの絵を狙う人物がまだいるのか？」
「まだまだいますよ。しかしあのお方にかなう人物はい
ないでしょうね」

ターナーの動揺を楽しむように、メームリンクは微笑ん

だ。彼にとってターナーは上司だった筈なのだが、そのような上下関係はこの不思議な青年には通用しないものようであった。

「失礼ですが、ターナー殿。私は特殊な力を持つが故に、おそらく貴方よりもあの絵のことについてよく知っているでしょう。伯爵は、貴方に何一つ真実を話してはいない。それは、もし貴方があの絵の秘密を知れば、自分を裏切るかも知れないと危惧しているからですよ」

「だが俺は、絵の善し悪しなんて判らない。あれがどんな著名な画家の手になるものだったとしても、別に欲しくもないが……」

「では貴方は、伯爵が絵画を解する人物だと思おうのですか？」

「言いたい放題である。だが、即座に反論できないターナーとしては、責めることもできない。」

「ことは既に、美術の範囲を越えているのです。だからこそ伯爵は、長年自分に仕えてきた貴方をさえ信用しようとしなさいのですよ」

紫の瞳が、じつと考え込んでいるターナーを射抜くよう

に見つめる。催眠ではない。そんなことをせずとも、彼にはこの有能な上司を口説き落とす自信があった。

「……どうですか？ターナー殿。貴方はもう十分に伯爵に仕えてきた。その働きの見合う評価を受けていないにも関わらず。このあたりで、見切りをつけては？」

「お前……」

ひよつとして、スパイか。ターナーは初めてその事に思いついて、まじまじと部下を見つめた。……どうりで、伯爵に靡かないわけだ。

「そうだな……俺だって、現状で満足しているわけではないが。だが今の所、他に例を見ない高収入を約束されている。果たして、それを捨てるだけの価値があるかな？」

メームリンクは、また唇だけで笑った。それは、会心の笑みだった。

「それを選ぶのは貴方です。一度だけ、機会を作りましょう。貴方があの方の会ってみて、仕えるに値しない人物だと思えば、また戻って来ればよいことです」

「戻ったようだね・・・(ヘアリエス)。」

その部屋は、薄い午後の光を受けて落ちついた雰囲気包まれていた。装飾を抑えた紫檀の調度品やアンティークの鏡などが、一見シンブルに見えて最高級品であることは、あまりそういつたことに詳しくないターナーにもすぐに判った。伯爵の書斎の豪華絢爛さに比べたら簡素ともいえる部屋だったが、こちらの方がよほど高貴な香を放っているように見えるのは、柔らかいブラウンの髪を束ねたこの部屋の主の放つ気品故なのだろう。

「はい・・・長い間、申し訳ありませんでした」

ターナーは呆れたように隣のメームリンクを見やつた。・・・コードネームとは、恐れ入ったものだ。

「彼は・・・？」

「私の上司だった方です。いきなり私が伯爵の元を去る決意をした理由が納得いかなかったように見受けられましたので、ご同行をお願いしました」

「成程・・・」

新口ココ調の椅子に腰掛けて、その人物は幽かな微笑みを浮かべていた。不用心に外部者を引き込んだ部下を叱るでもなく、突然乱入してきた客に不信の目を向けるようなこともない。

「君には私の部下が大変世話になったそうだね。有り難う。来ていただいたついでで申し訳ないが・・・」

「お気遣いには及びませんよ。メームリンクは優秀でしたから。つい昨日まで、誰にもスパイであることを気付かせなかつたほどにね」

いささか揶揄するような口調になったのは、ターナーのせいと言うより、あまりにも落ち着き払ったこの部屋の主のせいだろう。彼としては、想像よりも若すぎるこの不可解な人物の底の深さを見極めたい心境だったので、半分は演技もあつてそう突つかかつたのだつた。

「それはそうだろう。私は(ヘアリエス)に伯爵の動向を探れなどと命じたことはないし、また戻って来いといったこともないからね」

「は・・・？」

「私が命じたのは、モーツアルトの肖像画の所在を見極めろと言う一点だ」

「何だか、妙な気分だった。彼は、あまりにもこんな会話を相応しくなかった。まるで俗世界のことなど眼中になさそうな容貌をしていながら、何故部下をコードネームで呼ぶような世界に属しているのか。」

「失礼ですが、貴方は何故あの絵を追うのですか？あれに、どんな秘密が隠されているというのです？」

「……秘密、ね……。別に、大したものじゃない。おそらく君にとつてはね。だがある種の間人達にとつては、あれは千金に値するだろう」

「なにかの情報が？」

「さあ……。どうか。しかし、欲しがっている人間に売れば、確実に高く売れるね」

彼は、対して興味もなさそうに言った。

「君はどうなんだ？果たして、あの絵を手に入れる気があるのかどうか。」

「え……？」

あまりに鋭く切り込まれたので、ターナーは一瞬その

言葉の意味するところを理解することが出来なかった。一呼吸おいて真意を悟り、愕然とする。……やはり、並の人物ではない。彼は既に、交渉に入っていたのだ。「……別に、欲しいとは思いません。私にとつて、大したものではないのなら——」

「だが、伯爵のために手に入れるのだろうか？そして君は報酬を受ける。結局は君が手に入れて売ると同じだ」
 鳶色の瞳が、楽しそうにターナーを見つめる。

「君が、手に入れたと言ふのなら、協力するよ」

「協力……？ どういうことですか？」

ターナーは訝しげに眉を顰めた。決して手の内を見せないまま着実に自分へと引き寄せていく巧みさが、嫌が上にも強い警戒心を呼び起こす。

「言葉通りだ。君なら、手に入れられるかも知れない。だから、協力する。手に入ったら、伯爵に渡すなり別の人間に売りつけるなり、好きにするがいい」

「何故ですか?! わざわざライバルに手を貸すなど!」

「ライバル？ 私は伯爵と張り合う気はないよ」

「ですが——」

「勿論、それ以外の誰とも張り合う気はない。」

真つ直ぐに、彼はターナーを見つめた。そのあまりの瞳の強さに、ターナーは息を呑んだ。

「くどいようだが、あの絵が誰のものであっても構わない。どこにあるのかさえ判れば・・・何故なら、たとえ誰のものであろうと、いずれ私のものになるのだから。」

明け方近くになって、ミロはホテルに戻ってきた。威勢よく飛び出したものの、財布も何も皆部屋に置いたままだったのだ。

「カッコ悪いっつらないよな・・・」

朝まで待ち伏せて渡して貰うよりないか。いささか戸惑いながら、最上階の部屋へと向かう。最後の角を曲がったとき、オートロックのその部屋が僅かに開いていることにびつくりして、ミロは扉に駆け寄った。中から明る

い光が漏れている。

「カミュ・・・」

ミロはそつと扉を開けた。物音はない。

「カミュ?」

呼んでしまつてから、ミロは慌てて口を押さえた。ソファで眠っている姿が目に入ったからだつた。

「馬鹿・・・開けっ放しで寝たりして、誰かが入つてきたらどうするんだよ・・・」

カミュを起こさないように小声で呟く。どうやら鍵を持たずに飛び出したミロのために、カミュが開けておいたものらしい。

ミロはテーブルの上を見た。新しいグラスと、ブランドの瓶が置かれていた。

「全く・・・あんたつて奴は・・・」

呟きが、溜息に混じる。

「何でこんな危険なことしてるんだ・・・?」

苛立つのは、自分のせいだ。自分は、もつと薄情な人間の筈だつた。こんな世間知らず、放つておけばいい。奴等に捕まろうが警察にしよつ引かれようが、俺の知つた

ことじゃない。……今までずっとそうしてきた筈なのに、今度ばかりはどうしても切り捨てるのが出来なかつた。

端から見ていて、あまりにもカミュが危なつかしいからか。

それとも、いけ好かないプロワイエ伯爵に一泡吹かせてやりたいからか。

どれも、違うような気がした。

ミロは向かい側のソファに越しを降ろすと、ブランデーのコルク栓を開けた。瓶とグラスのかち合う音に、カミュがゆつくりと目を開けた。

「……ああ、お帰り。」

「鍵ぐらい締めて寝ろと言いたいところだが……俺のせいだからそれも言えないな」

啖呵切つて飛び出した手前、素直に例を言う気にもなれなくて、ミロはふいと横を向いた。カミュがくすりと笑う。

「君だと分かっていた。だからのんびりと構えていたんだ」

「気配に敏感なのは結構だが、気付いてからでは遅いつてこともあるんだぞ？」

そつぽを向いたまま、ミロが横目で睨む。こう言うところだが、甘いと思うのだ。

少しぐらい、灸をすえてやった方がいいかも知れない。

「例えば……」

グラスを置き、カミュの前に立つて倒れ込む。

「こんなことになってからじゃ遅いだらう？」

「ミロ？」

ミロは無言を言わずカミュの両腕をねじ上げ、残る手で細い顎に手をかけた。カミュが息をつめて、瞳を見開く。

——おつと。これは……——

胸中にわき上がった衝動をミロは無理矢理押し殺した。カミュのせいではないが、絵筆を握る人間には罪作りな容貌だ。この気品とプライドの高さを、カンヴァスに映し出せる人間はそうそういないだろう。彼を見る者は、自分の実力と現実とのギャップに苦しみ抜き、思いあまつて現実の方を傷つけてしまふに違いない。

気をつけなければ、冗談では済まなくなる。狼の振りをするつもりが、本当に狼になってしまったのでは、話にならない。

「……人を信じすぎるのはよくないぜ？カミュ。」
耳元に口づけるようにして、囁く。

だが、カミュは動じなかった。頬を染めて怒鳴り散らすかと思いきや、落ちついた口調でさらりと返したのみだった。

「……ミロ。悪いが、私にはその趣味はない」

「……わざわざ相手に趣味を聞いてから襲ってくる奴なんていないさ。相手の都合を聞かずにやるから犯罪なんだ。そうだろう？」

細身の腕を押さえつける手に、力がこもる。

カミュが、僅かに笑った。

「……だが、現実は今ここにいるのは君だ。君は、嫌がる相手に手を出すような悪覚じゃないんだろう？」

「……?」

何の迷いもない、真っ直ぐな瞳。

気が抜けた。危機感のかけらもない。それは信頼の証

なのか、元々こういう少しボケた人間なのか。

「……やめた。ばかばかしい」

ミロはねじ上げた両手を放してやり、髪を無造作にかき上げて溜息をついた。

「全く……少しは驚けよ。折角人が釘をさしてやろうと思つたのに……こんな密室で押し倒されて、本当に危機感感じなかつたのか？」

「別に……君の目は、濁っていない。人の身体を視線で舐め廻すような不躰な連中とは違う」

「成程ね……」

カミュは画商の息子という立場上、幾度かモデルを引き受けたことがある。芸術のためと称して向けられた視線が、必ずしも画家のものではなかつたことも、度々あつた。

そしてミロには、その経過がおよそ想像できたのだ。

「……負けたよ、あんたには。とつととベッドルームに行つて寝な。俺は明日朝一番で出ていくから」

「私はここでいい。君こそ、出発までちゃんとベッドで寝た方がいいだろう」

「ダメだ。あんたみたいな人種を、そんじよそこらに寝かせるわけにはいかないね」

「何故？」

カミュが眉を擡める。まだミロは、自分を上流階級の間だと思っているのだろうか。

ミロがくすつと笑った。このまま言い負かされて終わったのでは、彼の矜持が許さないのだ。

「寝顔が色つぼすぎる。綺麗な身体を汚されたくなかつたら、もう少し自重することだな」

カミュの頬が、かつと朝焼けのような紅に染まつた。

「分かりました・・・そこまで仰るのでしたら、どうか伯爵のためでなく貴方のために働かせて下さい」

長い沈黙の後に、ターナーは顔を上げてきつぱりと言った。ブロワイエ伯爵とは、手を切る。安定した立場も報酬も、既にその魅力を失っていた。この明らかに格

の違う、琥珀色の髪の紳士の前には。

「それは有り難いな・・・今の所、あの絵はもつとも厄介な人物の手中にある。彼には金も地位も通用しない。まず手始めは、カミュ・フロベールの手からモーツアルトの肖像画を引き離すことだ。必ずしも、我々が手に入る必要はない。それで、君が今まで受け取っていた報酬の倍は保証しよう。異存は？」

「勿論、ありません」

「それともう一つ。私はそれぞれの世界で独立した存在でありたいと思う。故に、この世界では一切身元を明かさないうちにしているのだ。無論、君が勝手に探るのは自由だがね・・・そういうわけで、失礼ながら今後私の身元は伏せさせて戴く。その代わり、私も君の身元については一切詮索しない」

「いいでしょう・・・」

得体の知れない集団だ。だが、ターナーはそんな集団をまとめている人物に興味を持った。

「君で十人目だ。〈カプリコーン〉と呼ばせて貰って良いかな？」

「結構です。それで、貴方のことは何と呼べばいいのですか？」

「そうだな・・・〈告知天使〉とでも。」

そこで彼はまたくすりと笑った。我ながら、随分と大層な名だ。

「分かりました。では、〈告知天使〉様。きつと、お約束は果たしましょう。」

「良い知らせを、楽しみにしているよ・・・。」

〈告知天使〉はにつこりと微笑みを作つて二人を見送つた。部屋に、閑静な静寂が蘇る。

「さて・・・そろそろ私も動くとするか・・・。」

手元の手帳をとり、電話の受話器を取り上げる。優雅なしぐさで長い髪をかき上げ、二、三度呼び鈴を鳴らした。

「・・・私だ。かねてからの計画を実行に移すように。ターゲットは『M』・・・くれぐれも、度を過ぎるな。三日後、

バイエルンのロッジで連絡を待つ」

鶯色の瞳が、鋭い輝きを宿す。いよいよ、炙り出しが始まる。

「さて、ご息殿はどう出るかな・・・父親の罪は子

供の罪。精々、楽しませて貰うでしょう」

琥珀色の髪が、陽光に透けて淡い金色の光を放つ。絵画泥棒とその協力者をめぐる包囲網が、また一つ完成されようとしていた。

Chapter 4 追跡

カミュが目覚めたとき、部屋から既にミロの姿は消えていた。シャワーを浴びた素肌にガウンを羽織り、テーブルの上のメモに視線を落とす。少し癖のある字が、旅立ちの挨拶を告げていた。

「Good Luck・・・か——」

意地っぱりで、猫のように気ままで、そのくせお人好しなミロ。

これ以上、彼の絵の邪魔をしてはいけないのだと、カミュは思った。ミロに出会うまで、カミュは画家が嫌いだっただけで、まるで躯の内部まで見透かそうとするかのような画家の眼差し。彼らの前に座るとき、カミュは自分が

一個の被写体でしかないことをまざまざと思い知らされる。彼らはカミュの輪郭の美しさ、象牙と薄紅が淡く混じりあう肌の色、深い赤葡萄酒色をした真つ直ぐな髪を写し取ろうと必死になり、その胸の内に秘めているものを表すことまでには気が回らないのだ。

だが、ミロは違う。彼は山々や木々、見慣れた台所の風景からたつたひとつのオレンジにまで、様々な輝きに満ちた生命を吹き込もうとする。何気ないスケッチが、まだ形も整えないうちに強く自己主張を始めるのを、カミュはある種の感動を持つて見つめていた。

——彼は・・・やがて、世界を手に入れるだろう——
確信が、胸を満たす。そのためにこそ、彼はあらゆる制約から自由でなければならぬ。

ふと、さわやかなオレンジの香りが鼻をくすぐる。それがミロの髪の毛の匂いであつたことに気付いて、カミュは小さく溜息をついた。

「カミュ・フロベールさんですか・・・」

初老の紳士は、うなだれたままゆつくりとそう言った。

「こんなことにならなければと、願っていたのですが・・・」

沈んだ声が、そう呟く。エッケル・マイヤー、今は亡きアンドリュウ・ニールセンの執事。それが、彼の肩書きだった。

「ニールセン氏のことは、私も心からお悔やみ申し上げます。原因の一端は、おそらく私にあるのでしよう・・・彼のためにも、私は父の遺志を継がなくてはなりません」

「それは違います、ヘル・フロベール」

びつくりしたように、マイヤーが顔を上げる。

「貴方は何も知らない。貴方が罪を背負うことはない・・・そう思ったからこそ、お父上は何一つ貴方には打ち明けられなかったのですよ」

「でも、私は既に盗みを働いてしまった！」

思わず、カミュは声を上げた。分かつている。悪いのは、ブロワイエ伯爵の方だ。ただ一度、頼み込まれてあのモーツアルトの肖像画を一年間の約束で貸し出した。その貸

し出し契約書が、巧みに細工された売約書だったのだ。

しかし、それを取り戻すために非合法に訴えた自分を、カミュはどうしても許すことが出来なかった。

「もう・・・後には退けないのです。一度手を染めた罪を、忘れて生きることなど出来ません」

薄暗い応接室の中に、静かな沈黙が舞い降りる。少し冷めかけた紅茶を口に運んで、マイヤーは小さく呟いた。
「・・・貴方は・・・お母上にとてもよく似ていらつしやる」
「・・・え？」

「お母上は、それは聡明な方でした。高貴な家の生まれでありながら、道を誤った時にはたとえ相手がどんな階級の人間であろうとも、誠意をこめて償うだけの勇氣をお持ちでした。お父上は・・・それは良い人で、絵画評論家としての才能もあり、誰からも好かれておりましたが、ただ一つ、お母上が持っていたその勇氣だけがありませんでした・・・」

遠くを見つめるような眼差しで、マイヤーはカミュを見た。髪の色こそ父親譲りだが、真つ直ぐに通った鼻筋や涼しげな目元、形の良い薄い唇などは、若くして逝つ

たカミュの母親に生き写しだった。

「・・・父の犯した罪を教えて下さい。私は、その償いをしなければならぬのです」

凛とした表情で、カミュは訴える。

「父は、結局罪を背負ったまま逝ってしまいました・・・私に出来ることは、父の代わりにあの絵を叱るべき持ち主に返し、許しを乞うことだけです」

血は争えない。このまま退くには、彼の自尊心は高すぎるのだ。

「そうですね・・・そして貴方の仕事を引き継ぐはずだった人物も、いなくなってしまった・・・」

溜息が、口をつく。マイヤーは書架から古いアルバムを引き出すと、カミュの目の前に広げた。

「・・・許して下さい。私も、何一つ詳しいことは知らされていません。旦那様や貴方のお父上は、どうぞやどうぞ自分達の手だけのことを片づけるつもりだったようですね」

覆れた指が、セピア色に焼けた一枚を指差す。カミュは注意深くアルバムを手にとった。若い頃の父と思われる

青年が、同じくらしい友人に囲まれて笑っていた。

「それはお父上のご学友です。四十年前、芸術大学で美学を学んでおられたお父上は、二人の画家と彫刻家のグループに入りました。彼らは大変な音楽好きで、アマチュア四重奏団を組んでおり、集まるごとに演奏していたそうです。特にモーツアルトが好きで、モーツアルトと聞くときどんな高価なものでも手に入れてしまうほどの熱心さでした」

カミュは父の書齋を思い出した。確かに父はモーツアルトが好きで、チェロの置かれた部屋の隅にカルテットの楽譜がない日は一日たりとてなかつた。

「ではあのモーツアルトの肖像画もそのときに・・・？」
「そうですね。あれは、旦那様の手によるものです。画風こそ古典画に真似てありますが・・・そのときに彼らは何を話し合ったのか、私は聞いておりません。ただ、そのときからあのモーツアルトが四人の共通の秘密になったのです」

「では、父とニールセン氏の他に、まだ二人の関係者がいるのですかね？」

「一人は亡くなりました。もう一人——彫刻家の方は、今はオーストリアにお住みです。・・・訪ねて行かれませうか？私も数度しか会ったことのない人物ですが・・・」
カミュはちよつと首を傾げて沈思した。このままスイスにいたところで、じきに追手がやってくることに変わりはない。

「ええ。お願いします」

写真の中の笑顔を瞳の奥に焼き付けて、カミュは深く頷いた。

「吊られた男」、正位置。〈女帝〉、逆位置。・・・情の濃さが仇になるってことか」

ミロは、街角のカフェでサンドウィッチを頬張りながら呟いた。〈女帝〉は愛情を示すカードであり、〈吊られた男〉は試練と忍耐を表す。当然、運気は回復しそうになかった。

「・・・まあ、気の向くままどこへでも行くさ」

最後の一枚をめぐってみる。〈隠者〉の正位置。

「過去の栄光・・・？スペイン、オーストリア、ローマ・・・」
スペインはブロワイエ伯爵のいる南フランスに近いし、ローマは人が多すぎる。

「オーストリアに行つて、湖でも描くか」

ミロはコーヒーを一気に飲み干すと、カードをしまつて店を後にした。

ローザンナは、料理酒の入つた買い物袋をテーブルの上に置き、大きく溜息をついた。ミロが家を出てからというものの、殆どアルコールを口にすることはない。普通のワインを買つても持て余すに決まつているから、安価な料理酒にしまったのだった。

「いつか、戻ってきてくれればいいのにね・・・」
望んではいても、おそらく二度と帰つては来ないである

うことを、ローザンナは知っている。

ふいに、戸口をたたく音が聞こえた。ローザンナはちよつと躊躇つてから、階段を下りてドアの門を開けた。立っていたのは、きちんとスーツを着込んだ背の高い男。

「ローザンナ・マラルメさんですね？」

鉛のないフランス語で、男は聞いた。

「そうですか……？」

ローザンナが訝しげに首を傾げる。

「ミロ・サヴォナローラ氏について、お聞きしたいのです」

「ミロはもういません！」

思わず、ローザンナは叫んでいた。伯爵家の追手が、とうとうミロを追ってきたと思つたのだ。

「知っている。そして今、どこにいるのかも。安心して下さい。私は伯爵家の人間ではありません。かつては彼の元で働いたことがありますか……」

男が苦笑する。

「私は彼に忠告する役目を負つて来ただけです。カミュ・フロベールから手を引けと。さもなくば、たとえ私が手を下さなくとも彼は様々な人物から狙われることになる

でしょう」

「どういふ……ことなの？」

「言葉通りです。我々はカミュと彼の持つているモーツァルトの肖像画を追っている。それを邪魔する存在を黙認するわけにはいかない」

「……彼は、手を引かないわ。」

ローザンナは、男を斜めに見上げて言い切つた。

「確かに気まぐれだけど、一度助けた人間を見捨てるような真似はしないわ。——たとえ裏切られてもね……そういう人よ」

「これは……」

少し驚いたような瞳が、気丈な女性を眺め降ろす。

「随分確信をお持ちのようだが……例外はあり得ませんかな？」

「ないわ。」

「……では、カミュにあの絵から手を引くように進めた方が良さそうだ。有り難う、マドモワゼル。手遅れでなければ、サヴォナローラ氏は傷つかずに済むでしょう」

「……待つてよ！」

慌てて、ローザンナは男の袖を引いた。男の真意が掴めない。

「それだけいいに来たの？ わざわざここまで？」

「・・・貴方に説得して貰おうと思ったのですが・・・貴方自身が無駄だと言いつ切るなら無理だ。もはや彼が無事でいられるかどうかは、カミュの一存にかかっている」

「じゃあ私も行くわ！」

男は少し眉を上げて、ローザンナを見た。

「ミロを危険な目に遭わせる人は許さない。私が、カミュを口説き落としてあげる」

少し怒りを含んだ瞳が、真っ直ぐに男を見上げる。元々整った顔立ちの娘だったが、こうして僅かに頬に朱がさすと、はつとするほど美しい。

男は内心でほくそ笑んだ。カミュは『人』に弱い。彼以外の人間が絡めば絡むほど、身動きが取れなくなるのだ。

「決まりね。貴方のこと、なんてお呼びしたらいいの？」

「アルフレッド・ターナー。ターナーと呼んでいただければ結構です」

男は、僅かに瞳を細めて笑った。

断崖の上からの、ドナウ川の眺めは圧巻だった。シユバルツバルトで生まれた小さな流れは、南ドイツをめぐりオーストリアからハンガリー、ユーゴスラビア、ルーマニアを経て黒海に注ぐ。ミロはイタリアの生まれだったが、行き着いた国もフランスだったので、こんなに長い河には馴染みがなかった。彼は時の経つのも忘れて、じつと悠久の流れに見入っていた。

ふいに、人の話し声が近づいてきた。視線を河から外し、後ろを振り返る。ピクニックに来たと思われるイタリア系の一家が、丘を上がつてくるのが見えた。

「おや、先客がいるようだ」

一家の主と見える男が呟く。

「おじゃまして済みません。お隣、よろしいですか？」

「いえ、俺は息抜きに上がってきただけです。すぐ降りますよ」

ミロはイーゼルとカンヴァスを抱え直して笑った。自分にはこんな思い出はなかったな、と思う。父は誰なのかわからないし、ジブシーだった母はミロが十二の年に死んでしまった。

「そうですね・・・。何だか追い出してしまったようですね。申し訳ありません」

「どうぞ、お気遣いなく。俺も、仕事がありますから」

申し訳なさそうに頭を下げる婦人に、軽く会釈を返す。家族の団欒は、邪魔すべきではない。

「それじゃ、ごゆっくり——」

さつさと降りよう。苦笑めいた笑みを悟られないよう、ミロは下を向いて歩き出した。その瞬間。

「——何を——」

銀の刃が、日の光を受けてきらめく。言葉よりも早く身を翻し、ミロは啞然として男を見つめた。

先ほどまで愛想の良い笑いを浮かべていた顔が、強欲にひきつっている。

「そうか・・・あんたら・・・！」

伯爵に金で雇われた刺客か。ミロはぎりつと唇を噛みしめた。家族を装って近づくと手の込んだことだ。

「いけ好きな野郎だな！こんなガキまで連れてきて・・・そんなにあの絵が欲しいのか！」

「自業自得だ。君があんなものに関わらなければ良かったんだ。いつておくが、俺は伯爵とは何の関係もないぞ？・・・あの絵を欲しがる人間は、まだまだいるさ」

子供達が、ミロの退路を塞ぐ。ミロはイーゼルの握りしめて舌打ちした。親はまだしも、子供の方はイーゼルで殴りつけるというわけにはいかない。だが、同じイタリアに生まれ育ったミロには、彼らもまたただのかわいい子供ではないことがよく分かるのだ。

——まずいな・・・このままじゃ、じきにやられる——

考える間も与えず、男がミロに飛びかかる。ミロはとっさに身をかがめて刃をかわし、肩口に向けてイーゼルの振り上げた。途端に、長い紐を巻き付けた女の腕がする

りとミロの襟元に伸びる。

「くっっ！」

締め上げられるはずだった喉の代わりに、黄金の髪が搦め捕られる。

「・・・放せよ！」

ミロは女の腕を引き掴むと、そのまま思いきり突き飛ばした。そのまま踵を返して、丘の麓めがけて駆け下りる。目の前で、小さな少女が嘔然とした表情で立ちすくんでいる。

——今度は何だ——

少女を避けようと、左足を大きく斜めに踏み出す。そこへ、金の髪の少年が転がり込んできた。

「わっ・・・馬鹿！危ない！」

ミロの身体が、バランスを失って前に傾ぐ。

——しまったっ・・・！——
鋭い痛みが太股を走る。少女の手に握られた小さなナイフを見つめつつ、ミロはその場がくりと膝をついた。

「お会いできない・・・？」

カミュの些か焦燥を含んだ声が問い返す。

「氏も御覧になつたでしょう。スイスでニールセン氏が亡くなり、私の父もある遺言を残してなくなりました。もはや彼らの秘密を知るのは、氏しかいないのですよ」

「詳しいことは計りかねます。ただ私は、全てのお申し出をお断りするようにといいつかつておりますので」

とりつくしまもない執事の様子に、カミュは苛立ちを押し隠して溜息をついた。カール・F・リンネ。ただ一人存命中の、カミュの父の学友。カミュは不可解な死を遂げたニールセンの執事からリンネのことを聞き、最後の手がかりを求めてオーストリアのインスブルックまでやってきたのだが——ここへ来れば一つ肩の荷がおろせるところだったのは、些か浅はかな考えだったらしかった。

「では、相談に応じる気もないというのですね？」

「申し訳ありませんが、今のところは。」

全くの無表情のまま、執事が告げる。

「分かりました……」

カミュは諦める気になった。父達のしようとしていたことは、『償い』だったのだ。ただ一人残ってしまった老人がその責を一人で負うことに怯えてしまったとしても、無理はないのかもしれない。

「本日はこれで失礼します。ですが、私の能力にも限界があります。やがて、追跡の手はここにも伸びてくるでしょう……私は出来る限り父の遺志に添いたいと思っていますが、あるいは力及ばずにあの絵を手放してしまうかも知れません……もしもまだ私に協力して下さる気持ちがおありなら——」

早めに連絡をくれ、と添えて、カミュはホテルのメモを差し出した。手ごかりはもうない。あるとすれば、父が若き日を過ごした芸術大学だろう。

漆喰の匂いのする彫刻家のアトリエを辞して、カミュは表に出た。背の高いイギリス風の紳士と、金茶色の長い髪を束ねた女性が歩いてくるのが見えた。

「順調なようだね」

その紳士は、木漏れ日の揺れるテラスにゆつたりと身をくつろがせて言った。相手の姿は見えない。静かに問いかけるその対象は、どうやら小さな通信機の端末のようだった。

『はい。じきに二人は合流します。彼らが我々の存在を知るのも、あと僅かのことでしょう』

「では私も準備しなくてはなるまいな」

紳士はゆつくりと身体を起こし、落ち掛かる琥珀色の髪を後ろに払った。風が、細い絹糸のような髪を靡かせて吹き過ぎていく。木漏れ日に透けて、何故かその髪は淡い金色に輝いて見えた。

「ご自分で出向かれるのは久しぶりですね、〈告知天使〉様。」

合図を待っていたかのような執事の声が告げる。

「クレール。あれは今までのコレクションとは次元が違うのだよ……私はモーツァルトの天才にひれ伏した者として、彼を侮辱した者を許すことが出来ない。そしてそれを許した体制も……」

「故に、お手元に残しておきたいと願われるのですか？」
 〈告知天使〉は微笑した。それはどこか、狂信めいたものを思わせる笑みだった。

「カミュ・フロベール。そして、ミロ・サヴォナローラ……彼らは私と同じだ。同じ魂を持った者同士が、たつた一つの絵を追い求める。面白いと思わないか？……この追跡に終止符を打つのは容易い。だが、私は見極めてみたいのだ。果たして、彼らと私のどちらの情熱が、より勝っているのかを……」

インスブルックの透き通った風が、立ち尽くした人々の間をすり抜けていく。

「……あなた方は——」

カミュはともすれば失いそうになる言葉を必死で探しながら、目の前の紳士と女性を見つめた。二人とも、顔は知らない。だが、何の目的でここへ来たかは、彼らの名と肩書きを聞けば分かる。

「そうよ。貴方に、無謀なことを止めてもらいに来たの。」
 ローザンナと名乗った女性は、少しきつめの瞳に強い決意を宿して言った。

「無茶なお願いだとは、分かっているわ。でも、歯車は回り始めてしまったの。幾ら貴方がミロには関係ないと言いつても、あの人は手を出さずにはいられない……そして貴方を追う人々も、今はミロを目の敵にしているわ。絵画泥棒の共犯者として」

カミュは瞳を曇らせて押し黙った。ローザンナの怒りは正しい。あの時自分がミロのところに転がり込んでいなければ、二人は今でも仲良く暮らしていたかも知れないのだ。

「……貴女には、本当に済まないことをしたと思っています。ですが——」

「そんなことはどうでもいいわ!」

ローザンナはたまっていた怒りを爆発させた。

「ミロは命を狙われるかも知れないのよ? 貴方に関わったばつかりに・・・もはや、あの絵を狙っているのはプロワイエ伯爵だけではないわ」

「・・・何ですって」

想像もしなかった言葉に、カミュは胸を凍らせた。他に、誰があの絵の秘密を知っていると言うのか。

「・・・君は、あの絵の秘密を知らない。違うか?」

ふと、隣で黙っていた紳士が口を挿んだ。アルフレッド・ターナー。伯爵の、有能な執事だ。

「・・・何故、そんなことを訊くんです?」

「はつきり言おう。私も知らない。だがある方に頼まれて、あの絵を追っている」

「ある方?」

「そうだ。伯爵とは手を切った。私も彼女の言うところのその他大勢の一人になる。私自身は君たちを傷つけてまであれを手に入れようとは思わないが——」

他のメンバーがどんな手段を選ぶかは定かではない、と

ターナーは続けた。〈告知天使〉が他のメンバーにどんな指令を出しているかも分からない。穏便なままで済むはずがないと、ターナーは思っている。

「もう一度訊こう。君はあの絵の秘密を知らないんだな?」

「はい・・・父は何も教えてはくれませんでしたから」

「ならばさつきと手を引くことだ。君の手に終える代物ではないらしい」

「残念ながら、そう言うわけにはまいりません」

「何故そこまで、あの絵に固執する?」

「・・・分かるからです」

一つ大きく息をついて、カミュはターナーを見上げた。

「父にとってそれがどれほど大切なものだったか・・・そしてそうである限りは、あれは人類の遺産となるべきものなのだと言うことが」

父が最後の頼みを打ち明けたときの、必死な瞳が記憶に蘇る。だからこそ、いい加減な始末をするわけにはいかないのだった。きちんと、しかるべき持ち主の元へ返さねばならない。

優れた遺産を守り伝えること。それは幼い頃から一倍感受性の強かったカミュにとって、何を賭しても守り抜かねばならない戒律だった。

だが……

——ミロ……君はどうしてる？——

焦燥が、胸を焼く。

将来有望な画家の、大切な時間を奪い取ってしまったことに、カミュは少なからず罪悪感を抱いていた。ミロとは別れるべきなのだ。ましてや、危険な目に遭わせるなどんでもない。

それなのに、理性ではどうにもならない感情が訴える。もう一度逢いたい。せめてもう一度だけ、無事だと言うことをこの目で確かめたい。

カミュは深く息を吸い込んだ。もはや、一刻の躊躇も許されなかった。

「……ですが、たつた今私も考えを改めました。彼らがあの絵を手に入れるのに手段を選ばないと言うのなら、私も覚悟を決めなくてはならない」

意を決したようなカミュの口調に、ターナーがダーク

ブラウンの瞳を僅かに細める。

「では、話し合いにに応じてくれると？」

「場合によつては。ですが、ミロに会うのが先です。無事なミロの姿を見届けたなら、そのときはお話を伺いましょう」

ターナーは苦笑した。動揺したかと思いきや、なかなかどうして抜け目がない。

「……分かった。本部に連絡しよう。じきに、ミロ氏の居場所も分かるだろう」

カミュが堅い表情を崩さないまま、ゆつくりと頷いた。

「……あんた達……どういうつもりだ……！」

ミロは、じわじわとかすんでくる視界に目を凝らしながら、イタリア系の親子を睨みすえた。少女の持ついたナイフに、何か神経系に作用する薬が塗り込めてあったのだろう。ほんの一筋の傷で、ミロの全身はほぼ麻痺

してしまつていた。

「悪いね。君がああ御曹司に関わるからいけないんだよ。彼を従えるには、彼自身を傷つけるよりこの方がよほど効果があるんでね……」

「この俺に……カミュのお荷物になれてのか? ……冗談じゃない!」

吐き捨てるように言つてみたものの、身体力が急速に抜けていくのはどうしようもない。己の腑甲斐なさにミロの胃は煮えくり返つていたが、四肢は重く冷え切つていくばかりであつた。

「気にやむことはないよ。君が眠つているうちに、全てことは片付くだろう。君はまた自由な絵描きに戻れるんだ。……結構な話だと思ふがね?」

「……カミュは……どうなる?」

男は、唇だけで嘲笑つた。だが、それはミロに向けられたものではないようだった。

「彼は大罪を犯した。君は知つているかね? 彼の罪の数々を」

「何……だつて……?」

思わず見上げた視線が、男の視線をすり抜ける。相手の視線は宙の一点に固定されたまま、ぴくりとも動かない。ぞつとするような、狂的な目の色だった。こいつ、様子がおかしい……?

「まず、彼の父親が罪を犯した。そして彼自身、盗みを働いた……。だが、何よりも大きな罪は、あの姿だ。

私の兄は、赤い髪を天使を描き続けて狂つてしまった。彼は天使の姿をしていながら、心の奥底の情欲を引きずり出す。兄はその魔力に憑かれて、現実の世界を捨ててしまつたんだ……。だが、それは幻惑的な光景だつたよ。白いモスリンを張つたアトリエで、天使が血の色に染まつていく。象牙色の肌に、ナイフで赤い筋が引かれていく……カンヴァスに映し出す必要はない。そこにある生きたカンヴァスの方が、よほどなまめかしい……そう思わないかね?」

「……貴様……っ!」

「君にも見せてやりたいねえ……罪人に相応しい姿だつたよ……」

ミロは煮えたぎる瞳で男を睨み付けた。狂つている。

自分は芸術家だと豪語する人間ほど、自らの犯罪行為をその対象のせいにして正当化するのだ。その事でそうされる人間が、身体だけでなくどれほど心を傷つけられるか、彼らは考えてみようとしなさい。

「・・・カミュに・・・何をした!」

「あの傷はもう消えてしまつただろうねえ・・・折角罪の証を刻みつけてやったのに。だから私は彼に贖罪をさせてやろうと思つているんだよ。兄は『聖セバスチヤンの殉教』を描きたがつていたからね。彼が演つたら、どんなに美しいだろうねえ・・・」

「・・・ふざけるな!」

ぎりつと、唇が切れて血の味が舌に流れ込んでくる。自分が捕まつたら、カミュはどんな目に遭わされるかわからない。この狂つた兄弟は、モデルと称してカミュを木に縛り付け、本当に矢を射かけるくらいやりかねないだろう。

何とかしてこの窮地を脱しなければ、カミュの命が危ない。

初めの悪寒は激しい焦燥感となつて、ミロを煽り立て

た。

だが――

「・・・ミロ! どこにいる!」

聞き覚えのある声を耳にはきんで、ミロはぎよつとして振り返つた。もつとも、全身が痺れていたのでその動作は緩慢だつたに違いないのだが。

「ミロ!」

叫んだ声が喉元で止まり、息を詰めて硬直しているカミュの姿が視界に飛び込んでくる。

「ミロ・・・!」

「カミュ! 来るな!」

駆け出しかけたカミュの足を、ミロは厳しい制止で止めた。これは、尋常な相手ではない。捕まつたら、その時が最後ののだ。

「こいつ・・・危険だ!」

「ミロ・・・!」

がくりと、身体を支えていたミロの腕から力が抜ける。その襟首を、男が乱暴に掴まえて引きずり起こす。

かつと、カミュの両頬が紅に染まり、普段の彼からは

想像もつかないほど激しい怒りが口をついた。

「止めろ！ ミロに何をした！」

「待つていたよ、カミュ・フロベール。僕は正直言つて、あの絵には興味がない。だがあの絵と引き替えに君を貰うことになつてゐるんでね」

「お前は……！」

カミュの中で、記憶が弾ける。鼻の脇の大きなほくろと、ひつきき傷でひきつれたような左耳。

彼は、あの時、自分が成す術もなく傷つけられていく様を笑つて眺めていた男ではなかつたか。

「思い出してもらえたようだね……兄を狂わせた罪は、償つてもらおうよ」

「な……」

カミュの全身を、ぞつとするような嫌悪感が駆け抜けた。絵の具のオイルの匂いに混じる血の匂い。幼かつた自分は、急に獣と化した画家を前に、ただ助けを求めて泣き叫ぶことしか出来なかつた。あの画家は、精神異常で病院に送られたはずだ。……弟の方は、うまく警察の目を逃れていたのか。

凍り付いたカミュの前を、ローザンナの姿が風を切つて通り過ぎた。

「ミロ！」

「ローザンナ……どうしてここに……」

「カミュを説得しに来たのよ！ こんなことになる前に、あんな厄介なもの手放してしまいなさいつて……ああ、もう少し早く来るんだつた！」

ローザンナは動かないミロの身体に縋り付くと、きつと男を見上げて言つた。

「ミロにこれ以上何かしたら許さないから！ カミュ、早く行つて！ こんな奴等に渡すくらいなら、ターナーに渡す方がよっぽどいいわよ！」

「ローザンナ……」

「元氣なご令嬢だ」

かちりと、安全弁を外す音が響く。一瞬、ローザンナの身体がすぐんだのが、遠目にもはつきりと分かつた。

「……だから何よ……打つなら好きにすれば？ 死んだつて、ミロのことは守つてやるから！」

「ローザンナ！ 止めろ！」

ミロは、しがみつくローザンナの身体を引き剥がそうともがいた。うまく力が入らない。焦りと怒りとで少しは感覚が戻ったが、まだ自由には動けない。

——畜生！ どうすれば……！——

ふと瞳を継らせた先に、ドナウの流れがあった。ミロの中で、一つの答えが実を結ぶ。あそこまで行ければ。何とか河に飛び込めれば、とりあえずの危機は脱出できる。——問題は、この崖の下がどうなっているかだな……

岩場だったら、もう覚悟するしかない。まさしく、投身自殺だ。

だが、ミロは自分の勘を信じた。まだ、死ぬ気がしない。何があっても、生き残れるような気がする。

「さあどうする？ 君が嫌だと言えば、僕はすぐにでもこの引き金を引けるんだが？」

男が愉しそうに告げる。カミュは拳を握りしめたまま、低い声で呟いた。

「……待て。その二人は関係ない。今すぐ解放するんだ。肖像画は引き渡そう」

男の目を睨みながら、ゆつくりと歩き出す。男が、笑った。「言っただろう？ 僕は絵などどうでもいい。欲しいのは、君だ」

すつと男の右手が上がる。

「……危ないっ！」

一瞬、カミュに向かって振り上げた手で、銀色の刃がひらめいた。それと同時に、ミロの左手から折り畳んだイーゼルが飛んだ。

「うあつ……！」

したたかにイーゼルの直撃を食らった右手から、小さな短剣が滑り落ちる。

「ふざけんなよ……俺は、足手まといになるのは大っ嫌いだ！」

叫びざま、ローザンナの身体を押しつけて立ち上がる。

何故身体が動いたのかは、分からなかった。だがミロは、崖つぶちに向かって走り出していった。

「ミロ！」

カミュの制止がその後を追う。その姿へ振り向きもせず、崖下に向けて身を踊らせる。

「きゃあ——っ！」

ローザンナの悲鳴が、天を裂く。

カミュには、もう何が起こっているのか分からなかった。ただ、すぐにミロの許に行かねば、と強く思った。

「カミュ！ 何をする気だ」

同じように崖に向かって走り出したカミュに気付き、ターナーが声をあげる。

「やめて！」

我に返ったローザンナが叫ぶ。

カミュは振り返った。迷いも何もなかった。

「ミロが生きているなら、私も生きている！」

次の瞬間、カミュは崩れ落ち掛かる大地を蹴っていた。

chapter 5 ドナウの流れで

1

「投身した・・・だと？」

部屋の中の空気が、一瞬冷たく凝縮したような気がした。それでいてその言葉の主は、顔色一つ変える素振りも見せず、ただ冷たい雨のちらつく窓の外を眺めていた。あるいは、それ故に恐ろしかったと言うべきか。

「連絡によれば、Mは麻酔に侵された身体で断崖から飛

び降りたそうです。Cは、画家を追つてすぐに、と」

「夏まではまだ遠く、場所は山間の溪谷……。おまけに雨が降つてきたようだ。運良く岩礁から逃れたとしても、あるいは寒さにやられるかも知れないな……」

〈告知天使〉は独り言のようにそう呟くと、テーブルの上の冷め切つた紅茶に口をつけた。彼らが死んだとは思わない。むしろ、それくらいはやつてくれなければ面白くない。だが……

「ビューローも少しやり過ぎたようだな。あれほど加減しろと言つたはずだが……」

「しかし〈告知天使〉様、貴方はご存じだったのでしょう？ 彼がフロベールの息子に異常な執着を抱いていることを」

「異常と言うかね？ クレール」

鷺色の瞳を持つ紳士は、刃のような笑みを執事に向けた。

「……彼は素直なだけだよ。君は画家が梨を描くのに、時折皮を剥いてみたり不可解な傷をつけてみたりするのを知っているだろう。ビューローとその兄の企みも同じだ。対象を思いのままに操り、それをカンヴァスに写し

出す……不幸なことに、彼らは対象に吞まれて、芸術家としての使命を忘れてしまったようだがね」

「……ですが、他ならぬ貴方が配下に加えるような手合いであるとは思えません」

〈告知天使〉は、少し頬を崩した。彼は、この物怖じしない執事が気に入っていた。

「一度だけ、機会を与えた。それだけのことだ。彼の兄の描いた『天使』を持っている。それがあまりにも幻惑的だったのでね……」

実のところ、彼にとつてビューローは計画の一コマに過ぎなかつた。援助の手をさしのべるなら、大きな危機の後でこそ効果がある。

「……いづれにせよ、少し手を貸してやる必要がありそうだ。彼らが自分から私の許へ来るまでだね」

琥珀色の髪を優雅な仕草で梳き上げて、〈告知天使〉は幽かに微笑した。

頭上で、波が砕けていた。

全身に伝わった冷たい水の感覚の中で、右の肩だけが燃えるように熱く疼いていた。負傷したのだ。その事に気付いたときには、全ての器官がミロの統制を離れていた。

——このままだと、死ぬな……——
 思考までが緊迫を欠いていたのは、まださめていない麻酔の効果を思えば当然のことで、少なくとも彼の落ち度ではなかっただろう。

だが、その次の行動は、完全にミロの失敗だった。

——あれは……——

彼は見たのだ。血の色に染まっっていく波間に、その紅よりももつと赤い髪の色を。

「……カミュ？」

思わず水中で口を開いたミロは、次の瞬間に大量の水を飲み込んで、そのまま意識を失った。

「……しまったっ！」

ここ数年、彼がこんな叫びを上げたことはなかったに違いない。アルフレッド・ターナーは、思いもかけない出来事に身を凍らせた。彼の使命は、カミュの手からモーツァルトの肖像画を引き離すこと。その肖像画は今はずいぶん信用のある銀行に預けられていて、カミュのサインがなければ拝むことすら出来なかった。彼の身に何かがあれば、おそらくは正当な手続きを踏んでフランス政府に返されることになるだろう。如何に〈告知天使〉とはいえ、国家相手ではまともに渡り合えるはずもない。

「早く船を……！」

少々警察の力を借りることになるのは、仕方あるまい。また機を改めて、接触を図ればよいことだ。

ターナーは迅速な決断を下し、すぐさま実行に移した。眼前のイタリア一家を視界の外に追いやって、登ってきた崖を駆け下る。そのとき、何かが頬の横を掠め過ぎた。

「な……っ！」

呆然として後ろを振り返り、浅く傷ついた肌に指を這わせる。赤い液体がほんの少し、指先を汚した。

「・・・どういうつもりだ？」

何故、彼が自分を襲うのか。彼は〈告知天使〉の命を受けて来たのではないのか？

今朝方から少し弱々しかった太陽が、冷えた灰色の雲に覆われて姿を消した。雨足が、そこまでやってきている。ローザンナは、傍らで両手を握りしめたまま立ちすくんでいた。先ほどの勇敢さからは考えられないほど、その姿はか弱く見えた。

「・・・それが、本性か・・・」

包囲の輪が少しずつ縮まっていく。彼の目的は、肖像画の保持者。ここで邪魔者は消して、おそらく相当なダメージを受けているであろうカミュを手に入れるつもりなのだ。

「・・・悪いが、功績を譲る気はないな」

〈カプリコーン〉は、一呼吸おいてゆつくりと拳銃を取り出した。

くぐもつた銃声が、二発聞こえた。

カミュは、気を失ったミロの身体を抱えたまま、そそり立つ断崖を見上げた。どうやら、事態は思いもしなかった方向へと流れていつているようだ。

——急がなければ・・・ミロが危ない——

いずれ、追手がやってくるのは間違いない。一刻も早くこの場を離れて、安全な場所を探さなくてはなるまい。だが、こんなに傷ついたミロを抱えて、どうする？

ぼつんと、大粒の雨がカミュの頬をたたく。水圧のためか、やつと吹き返したミロの呼吸も時折不規則になる。カミュは二、三度ミロの肺に呼吸を送り込んでやってから、意を決したように冷たい流れを下り始めた。

身体中が、痺れている。

冷たくて、重苦しくて、指一本すら思うままにならな

い——

そんな感覚の中に別の感覚が加わっているのを知ったのは、夜もかなり更けてからだだった。ずきずきと疼く肩の痛みと、息苦しくはないほどに身体の上を覆うぬくもりと。無理矢理こじ開けた瞳に、むき出しの木の梁が写つて、ミロはやつとそこが小さな小屋の中であることに気付いた。辺りをしんしんと覆う湿つた空気と、かすかに薪の燃える臭い。それから身体の上の重みの正体にも。

「……カミュ？」

ミロを抱きすくめたまま半ば閉じられていた瞳が、呟きに醒まされてゆつくりと開かれた。

「——ああ、ミロ……気付いたのか……」

「うん……」

「……良かった。このまま気付かなかつたらどうしようかと——」

ほつとしたように、溜息が揺れた。カミュの、全身に張りつめていた緊張が解けた。

彼は、少なからず迷っていたのだ。一刻ごとに冷たくなつていくミロの身体を暖めながら、この間に彼を背

負つて病院に連れ込んだ方が良いのではないかと。だがこの弱つた身体を、これ以上動かすのは怖かつた。あの時断崖から飛び降りたのは奇跡のなせる技だったのではないか。そう思わせるほど薬は強く効いていて、人を呼ぼうにも呼吸が不安定で側を動けなかつたのだ。

どうしても、助けたい。

その一念が、そのときどうして幾千の治療に勝ると思つたのか。

「……済まない。とうとう君を、こんな危険な目に遭わせてしまった——」

呟いた紅の瞳は本当に悲しげで、まだ夢の淵にいたミロの心をどきりとさせた。

「その上私には、医学の知識もない。ろくな手当もできないで、何一つ、君の好意に報いることが出来ないんだ……」

ミロは、血の色を透かしていた艶やかな唇が紫色に青ざめてしまつているのを見た。肩口を流れ落ちる紅の髪はまだ濡れたままで、おそらく彼自身も河水に体温を奪われてしまつていたのであろうことを窺わせた。

「・・・まさか・・・」

不意に先刻の状況を思い出し、思わず詰問口調になる。

「あんたもあの崖から飛び降りたのか?！」

「・・・ああ。」

——何だつて・・・!!——

まどろみが、一瞬で吹き飛んだ。

・・・後を追って飛び降りた?

・・・あの崖から?!

ミロが飛び降りたのは、他に道がなかったからだ。決して勝率の高い賭だった訳ではないが、残れば更に最悪の事態になる。それに、まだ死ぬ気がしなかった。今まで我が身を守ってきた勘を信じた。全て計算の上での行動なのだ。

それを、めくらめつぼうに真似する奴があるか?!

「何考えてるんだ、一体あんたは・・・!!」

「それ以外に、君に追いつく方法はなかった。君が無謀な投身自殺をやるとは思えないし、君が無事なら私も無事だろうと思ったから。」

「馬鹿な・・・俺もあんたも、死ぬかも知れなかったん

だぞ?！」

「それならそれでいい。・・・あの時は、そう思ったんだ」

「な・・・」

それがいつもの冷静な口調だったら、きつと迷わず横面を張り飛ばしていただろう。だが、今のカミュは語り口も伏せた瞳もすっかり沈み込んでしまっていた。まるで、自分自身が分からなくなつたと言うように。

——・・・カミュ・・・?——

見知らぬ街で迷子になつた子供のような、カミュの表情。

——あんた——

「・・・すまなかつた。我ながら、無茶苦茶な理屈だつたと思う。」

「カミュ・・・」

「迷惑な話だな。勝手に後を追われて、私だけが死んだりしたら・・・君だつてさぞかし後味が——」

「違う、そう言う意味じゃない!」

言葉尻を遮って、激しい否定が口をつく。後味とか、そういう問題ではないのだ。ただ、カミュに死んで欲しく

なかつた。怪我もして貰いたくない。危険な仕事はさつさと済ませて、またもとの安定した生活に戻つて欲しい。だからこそ怒鳴りもするし、感情の押さえも効かなくなる。

一体、何故そう思うのか。

「……全く……自分のせいで、危険を冒される方の身にもなつてみるよ……」

あんたは俺に恩を感じてくれてるのかもしれないが、と呟いて、ミロは嘆息した。

「迷惑とか、後味とか、そんなの関係ない。そんなこと思うくらいなら、さつさとあんたから手をひいてるさ。あんたがどう思おうと、俺がとつつかまつたのは俺の責任だ。俺が俺の意志であんたにくつついて回つてるんだからな」

「ミロ……」

「だから、そのせいであんたが危険な目に遭うなんてのは絶対認められねえんだよ」

ぱちんと、音を立てて薪がはぜた。厳しく言い切つたミロの上に、ふと、いつもの伶俐な輝きを取り戻した眼

差しが落ちた。

随分と、一方的な台詞ではある。同じ言葉は、カミュにも言えよう。気に入つた相手の為に無茶をするのは、ミロの専売特許みたいなものだ。

にもかかわらず、カミュはその言葉を否定しなかつた。彼の理屈は正しい。何故なら、この気儘な画家の卵は、初めからカミュの為に事件に首を突つ込んだわけではなからだ。誰かへの感情に引かずられているわけではない、常に自分の興味の赴くままに行動している……少なくとも、ミロはそう信じている。

——本当に、そうならば。

きつと、この先の言葉は口にするべきではないのだけれども。

「……同じ台詞を、私が言つたら？」

「……は？」

カミュは不自然なほど静かに呟いた。その内で行き場を求めて彷徨っている感情を押し殺すかのように。

「……君の自尊心を逆撫でするようで申し訳ないんだが……私だつて、君が私に関わることで危険な目に遭

うのは認められない。君がここにいるのが、君の自由意志であろうがなからうが。．．．そんなことは許せないから、責任をとらなければ、と思つた。．．．いや、私君と同じ運命を辿つたからとて、責任をとれるわけでは決していないんだが。．．．」

「カミュ．．．あんた——」

「．．．同じ言葉を、君に返す。私だって、大切な人に、自分の為に危険を冒されるのはたまらない．．．助けてもらつた恩があるからとか、そんなことじゃない。何故かと聞かれてもわからないし、迷惑だと言われてやめられるものでもないんだ」

ただ、君が大切だから。

最後の台詞は、言葉に出来なかつた。まだ、口に出してはならないような気がして。

「．．．カミュ．．．？」

ふと、ミロの中で、わだかまりが透明な壁を透過するように溶けていった。何かひとつ、小さな鍵が音をたてて外れたように感じた。

カミュを相手にすると、いつも調子が狂う。それは自

分が変わつたからだと思つていた。今までのマニュアル通りに出来ない。余計な感情が、行動の軌道を狂わせる

——それが不甲斐なく、ただただ腹立たしかつた。

『たとえ何が起ころうと、おまえには関係ない』と。そう言つてやりたいのに。

だが、変わつたのは、はたしてどちらだったのか。

——そうか。．．．——

我知らず、微笑みが口元に上つた。

多分、どちらも、なのだ。

自分だけではない。カミュもまた、戸惑っているのだ。

知らず知らずのうちに、他の誰かに心の中への侵入を許していたこと。

これから、誰も傷つけないためにはどうするべきなのか、未来を計りかねている不安。．．．

「ごめん．．．わかつた。．．．いいよ、気にすんなよ。．．．」

「ミロ。．．．？」

すっかり濡れて冷え切つた肩をあやすように叩いて、ミロはくすりと笑つた。もし自分が意識を取り戻さなければ、カミュはここで自分と一緒に凍え死ぬつもりだつ

た。目が醒めてほっとしたところで、そんな些か少女趣味な幻想に酔いしれた自分に惑っているのだろう。

愚かなことだ。自分自身の変化を柵に上げて、カミュの戸惑いばかりを責め立てるなど。

「・・・一応、礼を言つとく・・・有り難う。助かったよ、お陰で。」

濡れた髪を梳くミロの手に驚いて、カミュが目丸くする。

「これだけのアクションをこなせるようになれば、あんたもそろそろ一人前の泥棒かな・・・」

言葉も継げずにミロを見つめているカミュを後目に、ミロは笑いながら、こつんと頭をカミュの肩口に預けた。触れ合う体温が心地よかった。

「・・・初めからそうだったのだ。カミュの前では、自分という人間の殻は、まるで透明な空気のようになんの屈折もたらさなかった。他者の侵入を許したのは、ミロも同じだ。この不器用な育ちのよい泥棒は、出会い頭から、何か人の固く張り巡らせた壁をすり抜けてしまう力を持っていた。」

彼は、もしかしたら自分に一番近いところにいる人間なのかも知れない。物心つかないうちから生きるために物事を斜に構えて見つけてきたミロが、そうすることを守ってきた純粋さへの憧れを、カミュもまた守り続けてきたのかも知れない。理性という名の殻に閉じこもるところで。

「・・・少し寒いけど、待っていてくれ。すぐに人を呼んでくるから」

カミュが、所在なげに身じろいで、立ち上がろうとした。

「待ってくれ」

とつぎにのぼされたミロの腕が、カミュの剥き出しの腕を掴む。

「・・・あんただって、相当冷えてる。雨も降ってるのに、こんな夜更けに出歩かない方がいい。・・・何より——」
青碧の瞳が、惑うことなく真っ直ぐにカミュの瞳を見つめる。

「・・・今は、側にいてくれ。」

誰かにそんな言葉を告げたのは、これが初めてだった。

目に見えて動揺したカミュの身体を、両手で出来る限り優しく抱き込む。

「ミロ……？ 私は——」

眩きと共に、小さな抗いがカミュの不安を直に伝えた。

一瞬、フラッシュバックする過去の記憶。

「……ごめん、変な意味じゃないんだ。こうしていると、あつたかくて、気持ちよくてさ」

静かだった胸が、とくとくと高鳴る。全身に回り始めた血が、触れ合った部分から少しずつ、冷え切った手足と腕の中の冷たい身体とを暖めていく。

カミュなら、あるいは本当の自分をかいま見せてもいいだろうか……？

「……何もしないから。安心して寝ろよ……」

強張りが、ゆつくりと解けていく。やがて聞こえ始めたカミュの安らかな寝息に耳を傾けながら、ミロは久々に心地よい眠りに落ちていった。

2

石を削る澄んだ音が、静かなアトリエに反響している。リンネは、槌を握った右手を大きく振り上げ、不意に何かに遮られたかのようにその手を降ろした。力の抜けた両手を、じつと眺めてみる。くすんだ肌はかさかさひび割れ、骨張つて、青く血管が浮き出していた。

いつの間に、自分はこんな年老いてしまったのだろうか。

ふと遠くを見るように、老人は窓の外へ視線を投げた。昨日訪ねてきた青年の姿が、雨の上がった外の景色に重なった。会うこともせずに執事に追い返させてしまったが、その姿はこの窓からしっかりと見届けている。炎の

ように赤い髪をした青年。一度だけこちらを見上げた瞳は、並ならぬ決意と強い意志の光を湛えていた。

身に覚えのない罪を、その身で購おうと言うのか。今は亡き父親に代わって。

——フロベールも、過ぎた息子を持ったものだ……

重い溜息が、リンネの口をつく。確かカミュという名の、旧友の一人息子。

——すまん……儂はもう……

リンネは疲れた瞳を伏せて、二、三度首を振った。罪を、悔いていない訳ではなかった。だが全てを白日の下に晒してやり直すには、自分はもう歳を取りすぎた。共に償いをするはずだった仲間も、もはやこの世にはない。

それとも友人達は、残された自分一人でこの罪を償えと言うだろうか？

——許してくれ……

今は、やっと得たこの生活を失いたくなかった。一人前の彫刻家となるまでに、どれだけの苦勞をしたことか。今自分の罪が明らかになれば、この平安もあつと言う間

に崩れざつてしまふ。

芸術家であるが故に、人々は決して彼らの罪を許さないだろう。

槌を握り直した腕にもはや力が入らないのを察して、老彫刻家は諦めたように鑿と槌とを下ろした。グレーの山高帽とステッキを取り、まだ雨の匂いのする外へ出る。いつもより早い時間に散歩に出かける主人を、初老の執事が訝しげに見送っていた。

アルテ・イン・ブリュッケの橋を渡ると、正面に旧市街の町並みが開けてくる。リンネは川沿いの防波堤の上に作られた公園に足を踏み入れると、旧市街を見渡すベンチの一つに腰掛け、太めの葉巻を取り出して火をつけた。

よく晴れているが、やや肌寒い午後である。空気は雨上がりの湿り気を帯びて、明るい空の割には散策する人影も少ない。

「——もし」

葉巻の長さが半分ほどになった頃、不意に、低い男の
声が老人の動作を止めた。

「カール・F・リンネ殿ですネ？」

「・・・なんだね？あんたたちは」

数人の、見覚えのない男達がいつのまにかリンネを囲んで
いた。人氣がなくなるのを待っていたものらしい。名
乗りもしない男達を前に、リンネは全身を固くした。

「まずそちらから名乗るのが礼儀じゃないかね？こんな
大人数で取り囲むとは——」

「その必要はない」

男はびしりと言つて、幽かに笑つた。

『『罪人』を連れてこいとのこと。貴方には、世界中の芸
術愛好家から蔑まれて当然の理由がある。分かっている
でしょうな』

「な・・・」

「我々と共に来ていただきます」

いきなり、口元を白いハンカチが覆つた。きついエーテ
ルの匂いに男達の真意を悟つたが、年老いた身体はもは

や彼の言うことをきかなかつた。

——これは・・・！——

間違いない。こんな荒技をするのは、フロベールの言つ
ていたプロワイエ伯爵の一味に違いない。

——やはり・・・逃げられないのか？——

どんなに息を潜めて暮らしていても、モーツアルトは
追ってくるのだろうか。

「早く車を回せ。一刻も早く、スイスを脱出する」

「フランスへの入国はどうします？」

「大丈夫だ。伯爵が手配して下さっている」

いつそこれが劇薬だったなら。そう願いつつ、急速に
薄れていく意識の中で、リンネは流暢なフランス語の響
きを聞いた。

遠くで鳥の鳴く声が聞こえた。穏やかな光が、僅かな
戸の透き間からこぼれてくる。

ミロは二、三度首を振つて身を起こした。途端に負傷

した肩が悲鳴を上げ、ミロは顔をしかめたまま忌々しげに舌打ちした。カミュの姿がない。裸の上半身に、乾かしたシャツと共に彼の上着が掛けられているところを見ると、外の様子でも見に行つたのだろう。手早く服を着込んで、ミロは小屋を出た。

耳を打つ、咳きにも似た、低い祈りの声。

河岸に面した小さな丘の上で、カミュは敬虔なカトリック教徒らしく、朝の祈りを捧げていた。何を祈っているのか、瞳を閉じて少しうつぶむいた横顔は、重苦しい悔恨の念を浮かべているようだった。

——カミュ・・・？——

呼んだ名前は、声にならない。

不意に、途切れた雲の合間から数条の光が差し込んだ。遠く東の空から降り注いだそれは、横向きに佇む人の合間をすり抜けて、ミロの瞳を射抜いた。

その背に拡がるのは、光で編まれた大きな羽根だ。あのイタリア人の男が言った。『赤い髪のアナスタシア』と。ぞくり、とミロは身体を震わせた。・・・自分は今、何を考えた？

——俺も、同類なのかも知れない・・・——

筆を取る左手が、疼く。この姿を描きたいと。いや、赤裸々にカンヴァスに写し出すことで、自分のものにしてしまいたいと。

愚かな、とミロは自分を嘲つた。自分は下らない独占欲のために絵を描いているわけではない。胸を打つ感動を自分一人に止めてはおけないから、持ち得る全てをそぞろ込んで表そうとするのだ。対象を自分の良いように歪め、写し取り、その影を抱いて独占した気になるのは、所詮は自分の殻に閉じこもつた自己陶醉に過ぎない。

とはいえ、その自己陶醉こそが多かれ少なかれ世界に芸術と認められるものであることを、ミロは十二分に知っていた。

——ザマないな・・・——

つまりはミロが『売れない画家』であるのも、そのあたりに原因があるということなのだ。

それ以上の考えに嫌気がさして、ミロは迷いを断ち切るように一歩を踏み出した。足音に気付いたカミュが朝の祈りを終え、ようやく顔を上げた。

「・・・お早う。身体はもういいのか？」

「——ああ。近年にないさわやかな目覚めだよ。麻醉が効いてよく眠れたし、昨晩は結構な役得だったしな」

カミュの半ば夢を見ていたかのような表情が、鋭く引き締まってミロを睨み付けた。残念なことに、昨晩の心細げな表情は、どこかへ雲隠れしてしまったようだった。

「——よく言う。死にそんな顔をしていたくせに」

「でも死ななかつただろ？」

「・・・随分自信ありげだな」

「わかつてたのさ。俺は勘がいいっていっただろ？」

ミロが軽く片目を瞑ってみせる。

「まだ死ぬ気がしなかつた。結局あなたに助けられたけど・・・実のところ、分かつてたから、あの崖から飛び降りたんだ。まさか、あんたまで追ってくるとは思わなかつたし・・・次はもう少し自重するよ。でないと、あんた何するか分からないもんな」

「・・・次はない。」

不意に、淡々と紡がれていた言葉が沈んだ。真つ直ぐにミロを見つめていた視線がそつと外れ、朝露に濡れた地面を見るともなく見つめた。途端に、ミロは何か焦燥

のようなのが胸を灼くのを感じた。・・・違う。何かがおかしい。何か、彼の人格を支えていた強烈な感情が、欠け落ちてしまったような・・・

「・・・今日、ジュネーヴに戻つてあの絵を引き出してくる。・・・もう、いいんだ」

次にカミュの唇から零れた言葉は、事実上の敗北宣言だった。

「・・・おい、待てよ——」

「あの絵は、手放す」

「待てつたら！」

こんな唐突に。それなら、今までの奮闘は何だったというのか。

一瞬怒りとも悔しさともつかない衝動に駆られて、ミロはつかつかとカミュに歩み寄り、二の腕を掴み絞めた。冗談ではない。

「どういふことだよ、それ！ あの絵は、そんな簡単に手放していいもんなのか?!」

腕を掴む手に、力がこもる。

・・・少々むきになつていたかも知れない。カミュが

驚いたような瞳を向けた。考えてみれば、彼がそんなことをいうのはおかしい話だった。元々、これはカミュ一人の問題なのだ。興味本位で首を突っ込んできたミロにしても、つい先日まではカミュにこんな荒技は向かないと思っていたはずだったのだから。

不意に顕在化してきた執着の根本にあるものに、ミロはまだ気付いていなかった。だがカミュは純粋に、それをミロの心遣いと取った。

「良くない。・・・だがもう限界だ。君に散々迷惑をかけておいて、こんな終わり方をするのは本当に済まないと思っているが——」

身を省みない覚悟で進んできたものを、ここで諦めるのは口惜しい。けれど。

「これ以上、犠牲を出すわけにはいかない。・・・もう誰も、傷つけない」

何かが、音をたてて崩れたような気がした。言葉付きはしっかりしている。だが、その希有な瞳には、いつもの人を真っ直ぐに見つめる強さはなかった。唇が皮肉っぽく歪むのを、ミロは感じた。

「昨晚、お互いに相手の存在を受け入れられたと思っただけは錯覚だったのか。」

「・・・随分簡単に言うんだな。この程度のことですべて覚悟だったのか？」

「・・・この程度、だつて？」

カミュの瞳が、驚愕に見開かれる。

「初めから分かっていたはずだろう？ 随分厄介な連中を敵に廻した。危険は承知だったんじゃないのか？」

ああ、まただ。峰の中で、もう一人の自分が警鐘を鳴らした。カミュを相手にすると、何故か普通なら簡単に押さえられる筈の感情が暴走する。今止めなければ、自分は何を口走ってしまうか分からない。

「今更、怖じ気付いたのか。だつたら相当鈍いよな。既に、人ひとりが死んでるんだぜ？ それでもあの時、あんたは止めようとはしなかった。誰が死のうが、あんたは親父さんの悲願の『贖罪』とやらを、やり遂げるつもりじゃなかったのかよ？」

その瞬間、深紅の瞳に燃えるような感情の光が灯った。痛いところを突かれた。まなじりを上げ、きつと睨みす

えたその瞳の色はあまりにも普段の色とは違いすぎて、無防備に覗き込んだミロは無意識のうちに背筋を凍らせた。

周囲から熱を奪って燃える炎があつたら、こんな感じだろうか。

「・・・だつたら君はこのままでいいって言うのか?!

私のせいで死んだって構わないとでも?! 彼らは手段を選ばない。また狙われたら今度こそ死ぬかも知れないのに、私には君を守る力もない・・・! 離れたつてもう遅い。私が逃げ続ける限り、君も追われるんだ!」

「・・・俺がへましたのが、原因って訳か・・・」

「そういう問題じゃない。逃げ続ければ、危険な目に遭うのは私一人じゃないんだ。あのモーツァルトがどれほどの価値のものだったとしても、この世に人の命と比べられるほどのものなんてありはしない!」

「・・・本気で言っているのか、その言葉を、この俺に!」

思いがけない叫びが、ミロの喉を震わせた。カミュが、はつと身体をすくませた。

「・・・所詮あんたも、他人の苦勞の結晶を眺めて、あ

れがいいだのここが悪いだのつて無責任な評価を並べ立てる奴等と一緒にのかよ。自分の価値観に『作品』を押し込めて、それで何もかも解つた気になつて・・・冗談じゃない。こつちはその大切な命を削つて、のたうち回りながら描いてるつてのに・・・!」

言うつもりはなかつた言葉が、次々にミロの口から溢れ出した。自分でも、何故こんなに熱くなるのか解らない。制御できない感情に呼応するかのように、あの焦燥がじりじりと胸を焦がす。

「それとこれとは話が違う!」

「違うない! もしあのモーツァルトがとんでもない価値のものだったとして・・・俺のせいでそれが失われたら、その重さを俺は一生背負つていかなきゃならないだよ!」

半ば吐き捨てるように叩き付けて、ミロは悔しげに唇を噛んだ。分かっている。こんなのは、八つ当たりだ。芸術を生み出す立場にある訳ではないカミュに、こんな気持ちを持て解れと言う方が無理なのだ。命を越える存在が、自分にはある。本当に万人の胸を打つ芸術に巡り会えた

ら、自分はきつと自分の命だろうと他人の命だろうと構わずに捧げるだろう。

その重さを背負えるだけの才能が、自分にない限り。

「……ミロ……」

しばしミロの呼吸が落ちつくのを待って、カミュが戸惑いつつ声をかけた。

「金持ちの道楽だと、思っていたんじゃないやなかったのか……?」

問いはやがて、あてどない眩きが変わる。

「君は……初めから、こんな逃避行は私では役者不足だと思っていなかったのか……? 本当の価値も判っていないものを命がけて守るなど、愚かしいことだと思っていたのではなかったのか……?」

ミロは少しだけ両目を見開き、それから黙って俯いて、両手をズボンのポケットに突っ込んだ。問いの形をした独り言には、答える必要はなかった。いつのまにか変化した心に、彼自身でさえ気付いていなかったのだから。

たった今、感情にまかせて焦燥をぶちまけてしまうまで。

役者不足、どころではなかった。最初は呆れた。ただ死に際の父の言葉を信じて、世の中も知らない御曹司が伯爵相手に盗みを働くなんて。どうせ安っぽいヒロイズムだ。今に痛い目を見て音上げるに違いないと思った。だが、カミュは諦めなかったのだ。少なくとも今までは。

——こいつは、本物かも知れない——

自分にもその価値が判らないモーツアルトの肖像画を守り抜く、その上に馬鹿がつくほどの一途さに惹かれた。芸術の恩恵にあずかるだけの人間が、命を賭してまでそれを守ろうとするはずがないと、ミロはずつと信じてきた。所詮批評家など、優れた芸術を目でる自分が可愛いだけの人種なのだ。だがこの赤毛の御曹司は、不器用な、しかし真剣な態度で、それを否定した。甘さや危なっかしさが目につくほど、思いの真剣さだけは純粹に研ぎ済まされてミロに伝わってきた。

……誤解していたかも知れない。彼のその一途さを、自分の都合の良いように。

いつのまにか、陽光は途切れて雲が重く垂れ下がって
きていた。ぽつん、と雨粒がミロの頬を叩く。軽く舌を
鳴らし天を見上げた視線の端に、ミロは滑るように走っ
てくる黒いベンツをみとめた。

「何だ……？」

自然と、全身が緊張する。

無言で固まった二人の前で、運転席のドアが開く。制
服を隙なく着込んだ運転手は、足早に後部座席へ回り込
むと、恭しくドアを開いた。

「な……」

降り立ったのは、長い髪と同じブラウンのスーツに身
を固めた長身の男。

「……初めまして。オーストリアへ、ようこそ。」

自然の造形にしては整いすぎた面の鳶色の瞳が、一瞬刺
すような光を宿して二人を見つめた。

3

頬に冷たい感触を感じてリンネは目を開けた。深い紅
を基調にした、豪華な天蓋が視界に飛び込んでくる。し
ばらくの間、見るともなくその色彩を眺めていた彼は、
その待遇が想像していたものと正反対であることに気付
いて、不意に瞳を大きく見開いた。

「お目覚めですか」

枕元から、若い声が聞こえた。

「わしは……」

「急に起きあがってはいけません。まだ薬がさめていな
いようですから」

目の上を、冷たいタオルが覆った。先程の感触はこれだっ
たのだと、彼は気付いた。

「・・・どうということなんだ？ あんな風に不法に拉致しておいて、この待遇は・・・」

「僕は貴方のお世話をするように言いつかつただけですから。詳しいことは直接旦那様にお伺いになって下さい」

リンネはタオルを少しずらし、必死に首をねじ向けて声の主を見やった。確かに、まだ身体が動かしにくい。

控えていたのは、少年と言っても良いくらいの年齢の男の子だった。いや、そう判つたのは彼が先程「僕」という一人称を使ったからで、黙つていれば少女のようにも見えただろう。

「こは・・・どこだ」

「エクスプロバンスのブロワイエ伯爵邸です」

「伯爵にはすぐ会えるのか」

食い入るように見上げたリンネに、少年は少し皮肉めいた笑みを返した。

「・・・旦那様は、昼までお戻りになりません。それまで、ごゆつくりここでおやすみになって下さい。何かご用の向きがありましたら僕か、外に控えているガードマンにお伝え頂ければ手配いたします」

言外に、逃亡は不可能だ言っているらしい。やはり囚われの身であることに間違いはないようだ。

——彼も、追われているのだろうか・・・——

天蓋の深紅が、ある人物を思い起こさせる。リンネは、深い溜息をついた。

「あんた一体・・・何者だ？」

低い吹きが、ミロの口をついた。そうして睨み付けるのが精一杯だった。面立ちは優しげなくせに、その両眼には見るものを片っ端から威圧するような凄みがある。おそらくその瞳の方が本性で、口元に浮かんだ微笑みは人当たりの良さを演出する仮面でしかないのだろう。

一瞬気押された自分に気付き、彼はぎりつと唇を嚙んだ。

「そんなに睨まないで戴きたい。私はどちらかと言えば、あなた方を助けに来たのだから」

男は、今度こそはつきりと笑った。優しいな笑みがかえって人を馬鹿にしているように思えて、ミロはかっこなつた。

「・・・助けにきただと・・・っ!」

「ミロ」

カミュが隣で袖を引く。

「カミュ・・・」

はつとして、隣を振り返る。表情を消し去った厳しい眼差しが、じつと男を見つめていた。

「・・・まず、名乗るのが礼儀でしょう。それとも初対面の相手に自己紹介もなしに話しかけるのが、オーストリアの礼儀ですか?」

「これは失礼。私はガブリエル・ウーベルン。フリーの収集家です。・・・お察しの通り、貴方の所持しているモーツアルトの肖像画を追っている」

ガブリエルと名乗った男は悪びれもなくそう告げてから、ゆつくりと二人に近付いてきた。上等の麻のスーツにぼつりぼつりと雨の痕が滲んだが、全く気にかける様子はない。

「貴方のことは、随分昔から存じ上げている。お父上の存命中からです。・・・ですが、今はそれは問わないことにしましょう。それよりも——」

男はちらりと、ミロの方を見やった。

「随分と、手荒く追われておいでのようだ。早く安全な場所に移動した方がいい」

「・・・何ですって?」

「連れの方も、怪我をしておられるでしょう。この川を下ったところに、病院があります。そこまでお送りしましょう」

「待つて下さい」

カミュは、両の瞳に僅かに戸惑いの色を浮かべた。少し、勝手が違うことに気付いたのだ。確かに、いきなり自分たちの前に姿を現したことからして、このまま男の言葉を信用するわけにはいかない。だが、甘い顔を見せて自分たちを騙すような、姑息な手段を使うような人物にも思えなかったのだ。

「・・・貴方はあの肖像画を追っていると仰いましたね。我々を助けるのは、その後で合法的な取引をしようと考えて

えておられるからなのですか？」

「合法的、か」

「・・・我々は、かなり危険な目に遭ってきた。私はまだしも、これ以上周囲を巻き込むことは出来ない」

はつとミロが顔を上げた。先程のカミュの言葉を思い出したのだ。

カミュは、あのモーツアルトを手放そうとしてい
る・・・

「場合によつては、節を曲げるのも仕方がないと思つて
います。ですがあれを闇の世界に埋没させてしまうよう
な人物には譲りたくない。いつか、本当の持ち主の元へ
還ることが出来るように」

「・・・合法的、というのは難しいかも知れないな」

少し小首を傾げて、男は続けた。

「何故なら、あの肖像画自体、既に違法の存在だからで
す。貴方も、ただあれを返すだけならこんなな苦労はし
なかつたはずだ」

「・・・・・・・・」

急所を突かれて、カミュは黙り込んだ。その通りだ。

ただ返せばいいというものではないからこそ、父も〇〇
年間沈黙を守り続けてきたのだろう。

「・・・あんたは、あれが何だか知ってるのか」

不意に、ミロが口を開いた。

「・・・俺は一度、あの絵を見たが、あれに大した美術
的価値があるとは思えない。にもかかわらずこれほど皆
が血眼になつて欲しがる理由があるとしたら——それは
多分美術じゃなくて音楽の領域だ。違うか？」

「・・・流石に——」

「画家の目は厳しいですね、と微笑まれて、ミロは視線を
鋭くした。自分たちの素性など、当然調査済みというわ
けだ。

「・・・宝の地図ならぬ、モーツアルトの未公開の楽譜
が塗りこめられているとでもいうのか」

「・・・そうだとしたら？」

「！」

二人は同時に、緊張に身を固くした。カマを掛ける程
度のつもりで口にしたことを、まさかあつさり肯定さ
れるとは思つてもみなかつたのだ。

カミュは両目を見開き、不思議な光を宿す鳶色の瞳を見つめた。津波のように押し寄せる衝撃が、正常な思考を阻む。……もし本当にそうなら、父はどうやってそれを手に入れたというのか。

——肖像画自体が、違法の存在……！——

それほど重い罪を、父は侵していたのだろうか。

「……」安心を。まだ、そうと決まった訳じゃない」

カミュの動揺をなだめるように、男は続けた。

「そういう可能性も、あり得ると申し上げただけです。確かなことはただ一つ、三十年前、モーツアルトに関するある事件が起きたということだ」

「事件……」

「あの絵がそれに関係していることは、ほぼ間違いない」

耳を打つ低い声が、ゆつくりとカミュの眠っていた感覚を呼び覚ます。心臓が痛いほどに鼓動を打ち、足下がぐらついて、奈落の底に落ちていきそうな感覚。

伯爵の家に盗みに入ってから押し殺し続けてきたもの

——恐怖。

「カミュ……！」

青ざめてよろめきかかった相棒の腕を、ミロは力をこめて握った。堪えても、じつとりと手のひらに汗が滲んだ。

——なんてこった……！——

並の作曲家ではない。モーツアルトだ。数百年の音楽の歴史において、ただ一人「天才」「神童」の名を欲しいままにする、世界でもっとも愛호가多いと言われる作曲家だ。

——よりによって……！——

いつのまにか、雨は本降りになっていた。車のドアが開く音がして、執事風の男がもう一人降りてきた。

「〈告知天使〉様。傘を……」

「私はい。彼等に渡してやってくれ」

男が差し出した傘を礼と共に受け取って、カミュはミロの肩の傷をかばうようにさしかけてやった。目の前で、執事が〈告知天使〉に何事かを囁いている。

「……何？リンネ氏が……」

すつきりと形よく伸びた眉が、僅かに顰められた。

「はい。たつた今、車内電話で報告が……」

「・・・わかった。すぐに戻ろう。余計なことをしなけれ
ばよいが・・・」

執事は軽く一礼すると、車の方へと戻っていった。その姿を見送って、〈告知天使〉が振り返る。

「失礼。急ぎの用が来ました」

「リンネ氏に、何かあったのですか？」

弾かれたように、カミュが顔を上げる。

「・・・何者かに拉致されたようです。誰の仕業か、おおよその見当はつくが・・・」

〈告知天使〉はそこで言葉を切って、カミュの両目を真正面から覗き込んだ。

「あなた方も、ここに留まっているのは危険です。出来れば、私と共に来て戴きたい」

見る者を圧倒する、強い眼差し。

真つ直ぐに見据えられて、カミュは心が揺れ動くのを感じた。

「・・・自分たちだけで解決するのは、もう無理かも知れない。」

少なくとも彼は、自分よりあの絵についてよく知って

いる――

「カミュー！」

一歩踏み出しかけた足を、ミロの厳しい制止が止めた。

「カミュ・・・行くな！」

はっと、傍らを振り返る。青碧の瞳が、燃える光を宿して男を睨み付けている。

「ミロ・・・」

〈告知天使〉は苦笑した。どうやら、今回は引き上げるよりほかなさそうだ。

「・・・気が変わったら、連絡を下さい」

名刺を取り出し、裏に更に電話番号を書き加えてカミュに手渡す。

「・・・自惚れるわけではないが、私は、あなた方をお守りできると思いますよ。」

すっかり雨に濡れた髪を後ろに払って踵を返す姿を、二人は黙りこくつたまま見つめていた。不意に一瞬の概

視感が、カミュを襲う。

——あ……——

「……どうした？カミュ？」

「い、いや……何でもない」

あの姿、どこかで見たことがあるような気がするのだが……

「……とんでもないことになっちまったな……」

車が視界の彼方へと走り去ったのを確かめて、ミロは大きな溜息をついた。きつきは何か胸騒ぎを感じてカミュを引き留めたものの、この先カミュを守りきれるといふ確信は全くなかった。

だが、このまま引きずられるのは危険だと、直感が訴えたのだ。

「……それでも、手がかりは掴めたよ。鍵は、三十年前の事件にあるんだ……」

「しかしそれにしても……金持ちの俗物と精神病患者、その上《告知天使》か！」

ガブリエル、という名前からついたものなのだろうか、そんな大層な呼び名を平然と受け入れているところが、

ただ者ではないと思う。……親切そうな顔をしていても、油断は出来ない。

「……一度、フランスに戻らなければ駄目かも知れない」

父が学生時代を過ごしたパリで、三十年前の出来事を解きあかす。カミュはもう、覚悟を決めたようだ。

「……そうだな。なるべく早い方がいい。すぐに出よう」

幽かに震えるカミュの腕をとって、ミロは己に言い聞かせるように言った。

「……お待たせしました。旦那様がお会いになります」

歌うような少年の声に、リンネは俯いていた顔を上げた。……伯爵は、自分をどうしようと言うのか。

絵が手元になく、自分が侵した罪の証拠になるものは何もない。可能ならば、しらを切り通したい。

——そうしなければ……——
次に追われることになるのは、あの赤毛の青年なのだ。

怖じ気付く心を叱咤して、扉をノックする。
「・・・入れ」
傲慢な声が、扉の奥から重く響いてきた。

chapter 6 パリへ

それは、生前フロベールからきいていたとおりの、妙に腫のぎらついた男だった。

かの伯爵の、芸術に対する支援の数々は知っている。だが、リンネには、どうしてもそれが伯爵の芸術への深い造形と愛情から来ているものだとはい解積できなかった。

そもそも、それなりに芸術への理解のある人間が、こゝも派手に黄金で飾り立てるだろうか？

「カール・F・リンネ。彫刻家だそうだな」

伯爵は、ちらりとリンネの方を見やっただきり、また右手のブラックオパールに視線を落とした。

「・・・はい。この度は何故私を？」

「心当たりは十分すぎるほどあるであろうが」

成程、威圧感だけは十分にある。この迫力では、あの気の弱いフロベールはひとたまりもなかっただろう。

事実、リンネはブロワイエが怖かった。何しろ、パリの芸術界を少なくとも資金面で支えているのは、この男なのだ。

「心当たり・・・？ なんのことでしょうか？」

「別に今更しらを切らずともよい。全てはお前の友人だったフロベールからきいているからな・・・そもそも、全く心当たりがなければ、こんな無礼な招待を受けて唯々諾々と従う筈があるまい」

「な・・・んだって?！」

ではフロベールは、我々に黙って秘密を漏らしたというのか。

フロベールが口を割っていたという一言は、しらを切り通そうと構えていたリンネを動揺させるのに十分だった。おそらく、気の弛んでいたところを上手く引っかけられたか、酒でも飲まされてつい口が滑ってしまったの

だろう。だがそれでも、信用していたものを裏切られたような気になるのはどうにも止められなかった。その結果今自分一人がこんな目にあっているのだとしたら、なんと不条理なことだろう。

別に唯々諾々と従ったわけではない、と返してやりたかったが、乾いた唇がはりついたように動かなかった。

「わしが如何に芸術を愛する人間か、知っておるだろう？」

リンネの動揺を無視して、ブロワイエはがうつとりと続ける。

「美術館への多額の寄付、美術学校への援助・・・勿論、お前が卒業した芸術大学にも多額の出資をしている。まさしく芸術こそ、我々高貴なる人間の知性の証だからだ！ そこに惜しみなく金をつぎ込むことこそ真の文化人たる者のつとめだ」

彼の言う真の文化人とは、彼が主催する美術品のオークションで法外な値段をつけていく道楽貴族や、成り上がり経済大国の社長連中である。正直、これほどうまく商売はなかった。オークションの開場に少しさくらを混

せてやって、いかにも物知り顔に高い値をつけさせてやれば、彼等は幾らでも値段をつり上げていくのだ。

大切な点は、有名芸術家の作品であることだ。名が売れてさえいれば、出来はどうでも良いのだった。一流の芸術家のものともなれば、書簡からスケッチ、はては落書きまで、ばかばかしいほどの高値がつく。

あとは、『これは青年期の転換を示す貴重な資料で云々』のもつともらしい注釈をつけてやれば、およそ値段は倍に跳ね上がるのだった。

「ゆえにわしは、芸術を侮辱する行為をとことん軽蔑する。例えば、非合法で傑作を我がものにしようとするとする輩などはな」

限りなく非合法に近い手口で我がものにするには全く寛容な伯爵は、刺すような眼差しでリンネを見た。

リンネはといえば、すっかり顔から血の気をなくしている。

「まったく、芸術を志す者が、随分なことをしたものだ。好意で本物に触れる機会を与えて貰ったものを・・・その恩を仇で返すような真似をしたのだからな」

「あ・・・あれは・・・!」

乾いた唇を割って、悲鳴のような声が老彫刻家の口をついた。

「あれは・・・若気の至りだったんだ・・・わしらは、モーツァルトを愛していた・・・いや、崇拜していた!・・・祭壇が欲しかったんだ・・・」

「・・・全世界のモーツァルト愛好者に向かって、法廷でそう言い訳するかね?」

「後悔しているんだ・・・あんなこと、するんじゃないかった。仲間に加わりさえしなければ、こんなことにはならなかった」

たった一人で、四人分の責任をとれというのか。

そもそも、フロベールがへまをしなければ、とつくにあの絵はしかるべき持ち主の所へ返されていたはずなのだ。

頭を抱えてうずくまってしまったリンネを、ブロワイエはしばらく眺めていた。これくらい脅せば、もういいだろう。

次に彼の口をついて出たのは、先程までの調子とは

打って変わった猫なで声だった。

「・・・成程。よくわかった。君はこの三十年間、ずっと悩み続けてきたわけだ」

「・・・?」

「もう、モーツアルトから解放されたくはないかね? izzo、後の事後処理も何もみんな他人に任せてしまいたくはないかね?」

「・・・伯爵?」

呼称が『お前』から『君』になったことに、リンネは気付いていた。だが、奇妙な優しさが、老彫刻家の正常な思考を阻んだ。

「君たちは確かに罪を犯した。だが、それを君一人でそれを背負うのは些か不公平だ。だから、わしが手を貸してやろうというのだ。・・・わしに預ければ、上手く裏から本当の持ち主に返すことも出来るが: : : どうかな?」

「持ち主に返す: : : ?」

「そうだ。まあ、君の三十年の罪悪感に免じて、出所は隠してやってもいい。幸い、君の友人の習作は決している出来ではないから、これまで画壇に注目されたことも

ない。君は昔年の重圧から解放され、私は芸術界に貢献できる・・・悪くない話だと思うがね」

巧妙な、心理作戦だった。初めに散々脅しておいて、不意に救いの手を差し延べる。

言葉面を飾ったところで正確にはただ持ち主に返すわけではなく、売りつけるつもりなのだということをリンネは悟っていたが、もはや抵抗する気力は失せていた。

裏切りというなら、フロベールが喋った時点で、もう自分は裏切られているのだ。

今ここで渡すと言ってしまうえば、自分は罪に問われることもなく、あのフロベールの息子だつて追われずに済む: : : 。

「どうだね?」

ねとついた眼差しが、俯いた顔を覗き込む。

「・・・いいでしょう: : : わしが、フロベールの息子から預かってきましょう」

まるで自分の物ではないような声で、疲れ切つたように、リンネは頷いた。

アカシアの花が、頭上で揺れている。

ミロは予定より十分を回った腕時計を見て、並木道の奥を眺めやった。あの時間に正確なカミュが、例え十分でも遅れるとはたいした事件である。

「・・・やっぱ、ムリだよなあ・・・」

頃は六月、大学も年度末の忙しい次期である。いくらカミュの財力をもってしても、この時期に聴講生となるのは無茶なことなのかも知れない。

三十年前、カミュの父親が在籍していた芸術大学で何があつたのか。

手っ取り早く知るには、同じ大学に所属してしまうのが一番だと思つたのだが・・・

何気なくアカシアの花房を一房ちぎったとき、事務室のある本館のアーチ型の門の下に赤い色彩が覗いた。

「ミロ！」

目を凝らすと、門の下でカミュが手招きしている。隣に誰かいるようだ。

ミロは、とりあえず花房をポケットに押し込んで、カミュの元まで走った。隣にいるのは、この大学の教授らしい。

「すまない、遅くなって・・・ミロ、こちらはここで教鞭をとっておられるルノー先生だ。君の先生にもなる」

「・・・なんだつて？」

思わずミロは、カミュと人の良さそうな教授の顔をなんどか見比べた。・・・予定では、聴講生になるのはカミュだったはずだ。

「宜しく、ミロ。君のスケッチを見せて貰つたよ。君の絵は荒削りだが、自己主張が強いから面白いね。もう少し描き込めば、ものになるだろう」

「え?!・・・あ・・・有り難うございます！」

よく状況が飲み込めないまま、頭を下げる。それにしても、カミュは人のスケッチを持ち出して、一体今まで何をしていたんだか・・・

「私の方も、なんとか美学のクラスに入れて貰えること

になったよ。私は聴講生扱いだけどね」

「私は、つて・・・じゃあ、俺は一体・・・」

「君は正規の入学。近々入学試験代わりの作品を提出することになるから。」

「・・・あんたつて、ホントに平気で無茶するんだよなあ」

買ってきたばかりのカンヴァスを公園のベンチに下ろして、ミロは呆れたように溜息をついた。昼だまりの公園は程良い温かさで、目の前の噴水では子供達が水を跳ね上げながらはしゃいでいた。

「俺達は、三十年前の調査のためにあの大学に潜りこんだんだろ？ アトリエに入っちゃったら、忙しくて調査どころじゃなくなるじゃないか」

「調査は私がやるよ。君は、少し腰を落ちつけて絵の勉強をするといい」

となりに腰掛けたカミュの手には、今日の夜食のパンとワインを突っ込んだ紙袋があった。どうせ何処にいても

危険は同じなら隠れるのは止めよう、ということ、大学寮に入るようになった二人である。

「あんたに任せきりに出来るくらいなら、俺今頃こんな所にいないだろ」

「おや？ 一人前の泥棒だと認めてくれたのは君だったじゃないか」

「・・・そんなことまで覚えてんのかよ・・・」

カミュはさらりと口にしたが、ミロにとつては赤面ものの記憶だった。大体、敵に追われる身でありながら半日もくたばっていたと言うだけでもみつともないのに、こともあるうに、側において欲しい、だなんて！

きつと、魔が差したのだろう。その証拠に、光の元ではとても二度と口に出来そうもないではないか。

「・・・君が、絵を描いているところを見たかった」

ミロの動揺には気付かずに、ぼつんと、カミュが言った。

「・・・え？」

「恵まれた環境で。食べるものや、画材やらを心配しないでいい場所で。ちゃんと、見る目のある人の中で――

「カミュ……」

それは、恵まれた環境で育ったカミュの同情なんだろう
か。

「……いい匂いがする」

不意に、カミュが笑った。こんな風に笑うときの彼は、
本当にきれいだと思う。多分それは、整いすぎた容姿の
なせる技ではなくて、決して造らないが故の美しさなの
だろう。

「……ああ、さっきアカシアの花を摘んだのを忘れてた」

「花を摘んでどうするつもりだった？」

「どうするって……」

……別に、理由はない。花の形が、きれいだと思った。
気がついたら、手を伸ばしていた。

「……フライにして食べようかと……」

「ウソだな」

くすくすと、カミュは忍び笑いを漏らした。どうしてそ
こまで格好を付けなければならないのか、と思う。

「……君は、ゆとりのある時間を持つべきなんだよ」

素直に、きれいなものをきれいだと感じられる時間。繊
細な感性が、生活から解放されて息をつける時間。

「……それは俺に、このままあなたの好意に甘えろと言っ
てるのか？」

「今のところはね。ただし、君が有名になったら、学費
から生活費まで全部現物支給で返して貰う。……それ
で納得して貰えないかな」

軽い口調だったが、真摯な眼差しだった。ミロは、不
思議と反発する気が起こらない自分に驚きつつ、溜息をつ
いた。

「……有り難う……」

不意に子供達のはしゃぐ声が近くなった。

「要は素直な感性だよ」

ルノー教授の口癖である。とかく美大に入ってくるよ

うな学生は、理論ばかり先走って面白味がないか、物知りを気取ってすつかり感性がひねくれている者が多い。

だが、ミロの仕上げてきた静物画を一目見るなり、教授は珍しく白くなつた眉を下げ、溜息をついたのだつた。

「要は素直な感性、なんだがねえ……」

無理からぬことであつた。激しく飛び散るバーミリオ、目に眩しいほどのハイライト。皿の上に盛られたフルーツが踊りだしかねないほど、幸せな雰囲気だけは十二分に伝わってくる画面である。

「あの……」

「……取りあえず……この画面に満足してるかね？」
 デッサンとか構図とか——と言いかけた台詞を飲み込んで、教授はひつこんだ両目からちらりとミロを見やった。折角の感性だ。知識を詰め込んで潰れてしまうくらいなら、今しばらくは描きたいように描かせた方がいいかも知れない。

彼は、ミロがまだ全然描き込んでいないことを知っていた。

「いえ、全然。」

「なら、いいでしょう。わしからの助言は一つだけだ。油でも水彩でもかまわんから、一日一枚スケッチを持ってくることに！」

「は、はい！」

ミロは内心、ぎくりとした。一日一枚なんて、そんなに描いていたらとても調査どころではない。カミュは少し勉強に専念しろと言つたが、言葉通りに世話になるつもりなど毛頭なかつた。

第一、それ以前に絵の具代が……！

「紙はあるか？なければアトリエから持つて行きなさい」

「教授。実は絵の具もないんですが……」

「わかつとる。いくらでも持つていけ。ただし代金は出世払いで現金だぞ。お前は四十八人目だな」

有り難うございます、と頭を下げておいて、ミロは埃のかぶつたアトリエの中をぐるりと見渡した。今年のルーノー門下生は三人だから、単純に考えて最大四十五人の弟子が借金返済中の筈だが……あまり回収率はよろしくないようである。

紙と絵の具を受け取ってミロが部屋を辞そうとする
と、先刻の絵を覗き込んだ教授のぼやきが聞こえてきた。

「ふむ……若いってのはいいもんだな……」

カミュは図書館で、膨大な量の新聞と取っ組み合っていた。三十年前の縮刷版が残っていたのは幸いだった。当時在職していた教授がまだいれば一番手っ取り早かつたのだが、その最後の教授が先年退職してしまっていたのである。

あとは図書館の司書が当時から在籍していたが、ここ数日体調を崩して休んでいた。

となれば、後は自力で調べるよりほかない。

「カミュ、ごめん、遅くなった」

背後から小声で囁く声を聞いて、カミュはすっかかり凝ってしまった首を上げた。今日は朝から書庫を何度も

往復したので、肩も腕もまるで力が入らない。

見上げた先に、絵の具のチューブの入ったビニール袋を下げたミロが立っていた。

「構わないよ。どうだった？」

「どうもこうもないよ。とにかく描けてさ」

「成程。」

納得して、今一度絵の具の入った袋を眺め直す。

今のミロには、一番必要かも知れない。

「参ったよ。折角大学に潜伏したのに、これじゃ……」
「いって言っただろう？ 調査は私がやる。君はとにかく勉強するんだ」

言葉尻を遮って、カミュは笑った。口では援助を受けるのは嫌だの何のと言っても、絵を描いて一番楽しそうなのはミロである。それは絵にも反映されているように、最近のミロの絵はどれも明るく華やかだった。

ミロの絵が、好きだ。

特に今の絵は、見ているだけでほっとする……

「そのうち、私も描いてもらおうかな」

何となく、そんな言葉が口をついた。

「カミュ……?」

ミロはびつくりして、カミュの横顔を覗き込んだ。彼は、モデルになるのが嫌いなのではなかったのか。

視線に気付いて、カミュが僅かにはにかんだ。そういえば、ミロは最初に出会ったときに、肖像画は描かない主義だと言っていたのだ。

「……そうか。君は人物は描かないんだっけ……」

「ああ……」

肖像画を描く気はない。そう続けるつもりだった。それなのに、何故か言葉は続かなかった。

—— 一体俺は…… ————
 どうしたというんだろう。

一度だけ、人を描きたいと思った。あの時、朝の祈りを捧げるカミュの姿を見たときだ。胸が疼いて、ぞくり、と全身が震えた。今でも、思い出すと胸の鼓動が早くなる。

—— こんなザマじゃ…… ————
 カミュにモデルなんて、頼めるわけがない。

カミュは別に気を悪くした風もなく、また新聞の紙面

に視線を落とした。速読術に近い速さで斜めに走らせていた視線が、ふと一カ所で止まった。

「……これだ……!」

「何?!」

慌てて、長いすらりとした指が指し示す先を見ている。文化面だった。

「……モーツァルト・フェスティヴァル?」

「企業主催の音楽祭だ。同時に、展示会もやつてる……」

二人は顔を見合わせた。モーツァルト気違いの四人組だ。こんなチャンスを見逃したはずはない。

「成程……これだけの規模だと、バイトの募集が出たなら」
 「特に美術大学の学生なら、大学側の斡旋もあり得るだろう」

手がかりは、掴んだ。後は動くだけだ。

ミロは黙って主催企業の連絡先を写し取った。三十年も経てば連絡先も変わるだろうが、調べれば辿ることは出来るだろう。

「ミロ?」

「こっちは俺に任せろ。あんたは、スイスのモーツァル

トを引き取りに行った方がいい」

「・・・リンネか。」

「そういうことだ」

「厳しいミロの横顔を眺めやっつて、カミュは溜息をついた。あの、鶯色の瞳の男が言っていた。『リンネが何者かに拉致された』、と。」

十中八九、ブロワイエ伯の仕業だろう。

「・・・酷い扱いを受けていなければいいのだが・・・」

「お人好しだな。門前払い食わされた奴の心配するなんて」

「君だつて、見捨てるつもりはないから肖像画を取りにいけなんて言ってるんだらう？」

「ミロは肩をすくめた。カミュの性格上、もしリンネの身柄と引き替えに肖像画を渡せと言われたら無視できない。」

「それ以前に、リンネ自身がこれ幸いと厄介ごとを他人に押しつけようとする可能性だつてある。」

「・・・カミュ。」

「何だ？」

「・・・もし、リンネが自分に全て任せろと言ってきたら、どうする？」

「カミュが、気怠げに前髪をかき上げてミロを見た。言外に、あまり考えたくないと言っているようだった。」

「・・・所詮私は部外者だ。あの四人の中で残っているのはリンネ一人・・・彼の気の済むようにするのが筋だろう」

「それがたとえ、今までの努力を水泡に帰すことであっても。」

「カミュは父親の代理ではあつても、リンネと共にその罪を背負うことは出来ないのだ。」

「引っぱり出してきた縮刷版を倉庫に返して、二人は図書館を出た。モニター・ルームで誰かがニュースを見ている。アナウンサーの声が、途切れ途切れに耳に飛び込んできた。」

『・・・国際財団法人モーツァルテウムでは、本部本館を含む建築物の改装後、散逸しているモーツァルトの資料を収集・展示することになり・・・』

「モーツァルテウム、か・・・」

渡してしまった方が、いいのかも知れない。

何も、詮索せずに……

疲れたように息を吐いたカミュを、ミロは黙って見つめていた。

う。

「ああ、大丈夫だ。心配しなくていい、ローザンナ」
少し笑って、ターナーは言った。

ミロがドナウに飛び込み、カミュがその後を追ってから、陸ではそれまで以上に壮絶な戦いが繰り広げられていた。ターナーを邪魔者とみなしたビューロー一家が、襲いかかってきたのだ。

最初に、頬にナイフを一筋受けたのが失敗だった。何か薬が塗ってあったらしい。手足が痺れて重くなり、膝をつくまでに一分とかからなかった。

目の前で恋人の投身を見たローザンナは、逃げることも立ち向かうこともできずに呆然と立ち尽くしている。

立て続けに、大人二人の利き腕を打ち抜いた。加減する余裕はなかった。子供二人を昏倒させようとして、ローザンナに襲いかかるビューローの姿が目に残った。

左手に握り込んだ発煙筒が煙を吐くのと、その二人の間に割って入ったのが同時だった。ガスをまともに食らい、意識が途切れる寸前に、かつての部下の声が自分の名を呼ぶのを聞いたのだ。

陽光が、瞳に突き刺さる。

アルフレッド・ターナーは、久々にみる太陽に目を細めた。軽い痛みを感じる。だがそれがかえって、両目が無事であることを実感させた。

ここ三日間、彼の両目は闇に閉ざされていた。ビューローとやりあって、神経性のガスをまともに両目にくらったのだ。

「大丈夫？ちゃんと見える？」

隣から、心配そうな表情が覗き込んできた。整った顔立ちで、少し肌が浅黒い。南の血が混じっているのだろ

——どうも俺は、メームリンクに借りが多いな——

実は今も、彼にその後の情報をもらいに行くのである。

ローザンナがカフェのドアを開けると、奥で金の髪を束ねた男が右手を上げた。彼は昔から、待ち合わせの時間に遅れたことがない。

「ターナー殿。お加減は如何ですか？」

「メームリンク、助かった。お前が来てくれなかったら俺は今頃ドナウに沈んでいたかも知れないな」

メームリンクは穏やかに笑って、ちらと目の前の女性を見やった。

「流石はターナー殿ですね。あれほど不利な状況で、女性には髪の毛一筋ほどの傷も負わせないと」

ローザンナは赤くなつたが、無論メームリンクの言葉は皮肉でも揶揄でもない。彼は、かつての上司が如何に優秀であるかを良く知っているのだ。

「それもお前のお陰だな。昔から俺はお前には助けられてばかりだ」

「ご謙遜を」

「悔しいが、事実だ。．．．それで？ 今度は何があつた

んだ？」

ターナー達の注文に会わせて追加したコーヒーを一口含んで、メームリンクはふと真顔になつた。．．．軽口を叩くために、ここまで出てきたわけではない。

「．．．カール・F・リンクネが拉致されました。十中八九、プロワイエ伯の手に落ちたと思われます」

「何だつて？ ．．．リンクネに見張りはついていなかったのか？」

「あまりの手際の良さに、出し抜かれたそうです。多勢に無勢、ということもありましたが．．．」

リンクネが切り札になることは、初めから誰の目にも明らかだつた。それゆえ、〈告知天使〉も彼に見張りをつけていたのだ。

だが、それにしても全くお粗末な結果ではないか。

「これでほぼ間違いなく、肖像画は伯の手に落ちるでしょう。問題は．．．」

「．．．あの二人がすんなり渡すかどうか、だな」

一気にコーヒーを飲み干して、ターナーは呟いた。．．．そんな素直な玉なら、断崖絶壁から飛び降りるような

真似などしないだろう。

「・・・〈告知天使〉様も、何を考えておられるのか・・・」
 所詮、ゲームなのだ。あの方にとつて、欲しいものを
 手に入れる事も、奪い合うことも——一連の動きを見て
 いると、どうもそのように思えて仕方がない。

——まあ、俺にはどつちでもいいことだが——
 「それで、貴方はどうします？」

綺麗な紫の瞳が、探るようにターナーの瞳を覗き込んで
 きた。ぎくりとして、視線を外した。

「・・・俺は、ミロをマークする。画家つてのが気になる」
 「ブロワイエ伯は贋作を掴まされるかも知れない、とい
 うことですか」

「あまり絵の真偽は重要ではなさそうだがな」

あのモーツアルトには、美術的な価値はほとんどない。
 ターナーがいくら絵画に疎いとはいえ、そのくらいは判
 る。

「・・・判りました。では私は、カミュの方をマークす
 ることにしましょう」

メモムリンクが、薄く笑った。

スイスから戻ると、カミュは肖像画をミロのアトリエ
 に預け、図書館を訊ねた。ミロは約東通り企業の方を調
 べてくれているようだ。努力が全て水の泡になるかも知
 れない。判つていて、ミロは一生懸命働いてくれている。

一分一秒も、無駄には出来なかつた。

タイムリミットが訪れるその時までには、少しでも情報
 を手に入れなければならない。

司書は、今日出勤してきていた。三十年前の話が聞
 きたいというカミュの申し出に、定年間近の老人は快く
 応えてくれた。

「三十年前のモーツアルト・フェステイヴァルねえ・・・
 あんまり記憶にないが・・・さてよ、友人が会場に泥棒
 が入ったのどうのつて騒いでたつつけね」

「泥棒・・・ですか?！」

「ああ、今はモンパルナスで画廊を開いてる奴なんだけ

どね。当時は学芸員で食ってたから、あれの展示にも関わっててねえ。セキュリティに問題があるって随分憤慨してたっけ」

「すみません、そのご友人のご住所をお聞かせ願えませんか？」

カミュは、逸る心を抑えて訊ねた。おそらく、その盗難事件こそ父が起こした事件なのだ。

——何を・・・何を盗んだらう・・・？——

モーツアルトの未公開の楽譜なのかと、ミロは言った。

鳶色の目の男は、否定はしなかった。

そんな大変なものなのか。

床に伏した父の、悲愴な表情が脳裏に蘇った。自分には判らない。何故彼等が、その遺産を人類共通の宝とすることで満足できなかったのか・・・

愛すればこそ、無理矢理にも自分のものにしたと願う。

だが愛しているからこそ、その罪に苛まれ続けなければならぬ・・・

年の割に力のある達筆で書かれた住所を受け取り、カ

ミュは鄭重に頭を下げた。老人は、礼儀正しい学生に好感を持ったようだ。握手を返して、思い出したように言った。

「そうだ、もう一人詳しい人がいるよ」

「どなたですか？ どんな情報でもいいのですが」

「プロワイエ伯爵だよ。あの人、たしか展示部門の顧問やってたからね。たしか出資もしてたんじゃないかな？」

ミロは、新しい梓にはりなおしたモーツアルトの肖像画を、ただひたすら眺め続けていた。

カミュが図書館の司書から得たものと同じ情報を、ミロもまたスポンサーとなった企業から聞いていた。展示部門で盗難があったこと。何故か、普通に考えたら大騒ぎしそうな借り受け先のオーストリア政府が、賠償金を請求しただけで沈黙を守ったこと。メイスイベントは音楽祭の方だったため、展示部門は警備が甘くなりがちだったこと。

この肖像画が、全ての謎を握っている。

じつと注がれていたミロの視線が、彷徨うようにモーツアルトから外れ、それから手の中の小さな写真へと移された。

セピア色に焼けた、古い写真。先刻、新しい枠を捜してアトリエを引っかき回した際に見つけた、研究室の卒業生アルバムから抜き出してきたものだ。

写っているのは、カルテットを演奏する四人の若者たちの姿である。チェリストの顔が、どことなくカミュに似ていた。白黒ではよくわからないが、おそらく、その髪の色は燃えるような赤だろう。

何故、彼らは盗みなどはたらいたのだろうか・・・
ぼんやり眺める視線が、急に刺すように一点に吸い寄せられた。

「これは・・・！」

モーツアルトの肖像画だ。画面のすみに、クッションと一緒に避けられている。おそらくカルテットの場所を作るために、急遽動かされたものであろう。

だが、ミロを驚かせたのはその絵の中身であった。

「・・・ない?!」

慌てて、本物の絵を見つめ直す。確かに、ある。モーツアルトが寄りかかっているチェストの上に、見る者にひどく野暮つたい印象を残す一輪の薔薇が。

「どういうことだ・・・?!」

ミロは何度も、写真の中のモーツアルトと本物の絵とを見比べた。写真の中のモーツアルトには、薔薇の花など欠片もなかった。なるほど、そうあるべきであろう。ミロがもしこの絵を描くなら、こんな位置に薔薇など書き込みはしない。

少ないスペースに無理に薔薇を描き込んだことで、この絵は非常に素人くさくなってしまうのである。

クッションと一緒に放られていることを考え合わせても、この絵が描きかけであったということは考えられなかった。そんなことをすれば、家具一切に絵の具がついてしまう。

では、この薔薇は後から描き込まれたのか？

どきりと、心臓が大きく波打った。

画家二人と、彫刻家と、美術評論家の、共通の秘密。

：：：そうだ。きつと、この薔薇は後から描かれたのだ。何のために？ 勿論、あるものを隠すために、だ！

いつの間にか、じつとりと掌に汗が滲んでいた。ミロは、一番細いパレットナイフを取り上げた。オイルを取り出し、ナイフに薄く塗り付ける。

神をも恐れぬ所行と、言うなら言えがいい。

ナイフを当てた先で、紅の絵の具が崩れた。その塊を、注意深く拾う。どんなタッチで、どんな形に描かれていたのか。全て、この頭に叩き込んでおかなければならない。

五、六枚花びらをむしったところで、ナイフの先が小さな引っかけかりを捉えた。眼を近づけて、じつと見つめてみる。その形から正体を悟って、ミロは思わずその場に座り込んだ。

「・・・本当に、隠していやがった・・・」

無惨に散った薔薇の花の間から、セロファンにくるまれた紙片の角が覗いていた。

ブロワイエ伯の元へ無法に拉致されたリンネは、帰りには大変丁寧な扱いを受けてその門をくぐることになった。勿論、勝手な行動が許されるはずもなく、護衛といえど聞こえがいい監視を何人もぶら下げた囚人の旅であつたのだが。

カミュ・フロベールが今、リンネの母校の聴講生になっていることは伯から直接聞かされていた。正直彼には、カミュの情熱がわからなかつた。何故、そつとしておいてくれないのだろう。誰にだつて、知られたくないことの一つや二つあるではないか。

『誰にだつて』と彼が断じたことがあの赤毛の青年には当てはまらないことを、リンネは知らなかつた。もともとカミュには知られて後ろ暗いところなど何もなかつたし、そもそも何かを隠し通すことに何の利点も見出していなかつたのである。

司書の話聞き終えると、カミュは図書館を飛び出して教わった画廊に電話をかけた。プロワイエ伯爵が三十年前の事件に関わっていた、という事実は、カミュの心拍数を倍ほども跳ね上がらせるのに十分だった。彼は、ずつと、父が何かの拍子に伯爵にモーツアルトの肖像画の秘密を漏らしてしまったために事件がややこしくなったのだと思っていたのだ。だが、本当にそうだろうか？

「フロベールからきいている」というプロワイエの言葉は簡単に信じてしまったリンネとカミュとの違いは、単純に故フロベールとの付き合いの長さの違いであったろう。細工された貸し出し契約書で肖像画を奪われるまでは、たしかにカミュの父とプロワイエ伯は親密な間柄であった。それゆえ、適当におだてられて、人の良いフロベールがついとうっかり口を滑らせた——リンネは、そう思いこんだ。

だが、カミュはそのことがどうしても腑に落ちなかった。プロワイエ伯爵が、あのモーツアルトの秘密を知っていることは確かだ。とにかく、数ある得意客の中でモーツアルトの肖像画に異常な執着を示したのは伯爵だけだったのだから。だが、彼は自分の父親のことをよく知っていた。「ついうっかり」で自分の犯した罪を他人に漏らせるほど、気の大きな人間ではないのだ。その証拠に、自分にも、妻である母にさえ、死ぬ間際まで一言も漏らさなかつたではないか。

何故、父はそんな大変な秘密を赤の他人に喋ってしまったのか。

だが、プロワイエ伯爵が初めから事件に関わっているとすれば、話は変わってくる。伯爵は、おそらく、偶然にか故意にか、最初からモーツアルトの肖像画に隠された秘密を知っていた。カミュの父は、秘密が筒抜けになっていることを知らずに、頼み込まれて、無用な疑いを避けるためやむなく肖像画を貸したのだ。

さらに、重要な問題がある。もしもこの仮定が正しいなら、伯爵の行動は謎だらけだ。伯爵は、何故父達の過

ちを知ったのか？　そして知っていたのなら、何故その場で処断しなかったのか？

展示会場で盗難事件など、展示顧問であった伯爵の名前には大層傷が付いたはずである。それを、巨額の賠償金を支払ってまで、何故隠し通したのか……

七回ほど呼び出し鈴が鳴った後、受話器から聞こえてきたのは落ち着いた女の声だった。画廊の主に取り次ぎを頼むと、主人は絵の買い付けに出ていて明後日に戻ります、と申し訳なきような返事が返ってきた。

気は焦るが、仕方がない。

カミュは明後日にまた連絡することを告げ、受話器を置いた。顔を上げると、ふと、見事な金色の髪を長く垂らした男の姿が目に入った。

——あの金髪……

どこかで、見たことがあるような気がした。ミロの黄金の髪よりも、もう少し淡い、優しい金色。

不意に、男がこちらを向いた。どこか中性的な、優しい面影の中央に、不思議な紫色をした瞳がある。どきりと、心臓が鳴った。自分は、この男を知っている?!

男は、少し微笑したようだった。そして凍り付いたカミュの表情を認めると、何事もなかったように踵を返した。

カミュは、引きずられるように、その後を追った。それほど早足で歩いている様子もないのに、金髪の男との距離は開いて行くばかりであった。いつの間にか、駆け出していた。ポー・ザール通りからフランス学士院へ、マザリーヌ通りを下り、ビュッシンの四つ辻をサン・タン・ドレ・デ・ザール通りへ曲がり——そして不意に、彼は足を止めた。夕刻の街を行き交う人々。

金髪の男の姿は、なくなっていた。

「それで、俺を呼びだしたって訳か」

ビュッシンの四つ辻からランシエンヌ・コメデイ通りを下った道沿いのレストランで、ミロはバゲットをほおばっていた。アトリエからモーツァルトを寮に持ち帰り、

カミュも溜息をついて、運ばれてきた料理にナイフを突き刺した。羊肉をワインにつけて、黒胡椒をまぶしてガリックオイルで焼いたものである。羊は、ミロの好物だった。子羊でなく羊がいい、というあたり、よくよく香りものが好きなのだろう。

「で？ これからどうする？」

カミュが切り分けた羊をすかさずフォークで突き刺して、ミロが訊ねる。

「とりあえず、追っ手をまく。」

「どうやって？」

カミュが、上着の内ポケットに手を突っ込んだ。細長い黄色の紙切れを一枚取り出す。予約票のようだ。

「本日、二十一時……『ムーラン・ルージュ』?!」

「もう少し過激なところの方がよかつたか? ……エル・エ・リュイとか」

ミロは、羊を突っ込もうと開けた口を塞ぐのも忘れてカミュに見入った。ムーラン・ルージュもエル・エ・リュイも、有名なキャバレーの名前である。……特に、後者はレスピアン・ショーを見せるのが売りであった……

「……いや、いい。……しかし、あんたがキャバレーねえ……」

一体、どんな顔をして予約をとったのだろうか。

カミュが、少しいたずらっぽ目つきをした。

「期待させておいて申し訳ないが、途中で席を立つことになるんでね。オペラや芝居じゃ後ろ髪引かれるだろう？」

ショーの途中に、こっそり裏口から逃げよう、というわけだ。ミロは、成程、と呟いて溜息をついた。……後ろ髪引かれることには変わりないような気がするが、これはカミュには言っても無駄であろう。

「まあ、君が一枚デッサンを仕上げるくらいの間は、大人しく見ていることにするよ」

ミロの何とも言えない表情を見て、カミュが笑った。

「おやおや、これは……」

後をつけてきた若者二人が入っていった先をみて、
 メームリンクは苦笑した。あの二人の容貌では、さぞか
 し言い寄る遊び女達が奮起することであろう。彼は二人
 が何のためにキャバレーなんぞにやってきたかを正確に
 見抜いていたが、こうした店がしばしば追っ手をまくた
 めに使われることも知っていた。

残念ながら、この店の裏口がどこに通じているかは知
 らない。

メームリンクは、ポケットからコインを取り出し、い
 ましがた中年の男が受話器を置いた公衆電話に歩み寄つ
 た。三台向こうの電話には、長蛇の列が出来ている。お
 そらくコインのカウントが壊れていて、コイン一枚で何
 時間でも話せるという有り難い代物なのだろう。間二台
 に誰もいないのは、コインを取られるだけでつながらな
 い故障電話の証拠である。

二度ほどベルをならすと、おちついた執事の声が聞こ
 えてきた。彼はどんな時でも、四回以上呼び出し音を聞
 かせることはない。〈告知天使〉の側に控え、色々と忙
 しい身であるはずなのだ。

〈アリエス〉だと告げると、ほどなくして〈告知天使〉
 が受話器をとった。

「私だ。——どうした？」

「カミュを追ってきましたが、『ムーラン・ルージュ』に
 逃げ込まれました。呼び込み係を掴まえて裏口を吐かせ
 ることも出来ませんが・・・如何いたしますか？」

「『ムーラン・ルージュ』ね・・・」

電話の向こうで、少し笑った気配がした。あの鳶色の
 瞳の紳士も、その場所がカミュにそぐわないと思つたの
 だろう。

「いや、その必要はない。先ほど〈カプリコーン〉から
 連絡があった。——リンネが、リヨン駅に着いたようだ」
 「では・・・」

「今夜中に、モーツァルトは伯爵の手に渡ることになる
 だろう。一時間後に、もう一度連絡をしたまえ。それま
 では、リンネの行き先も分かっているだろう」

「承知いたしました」

リンネの後を追えば、自ずとカミュ達の行く先も分かる
 というわけだ。メームリンクは、ちらりと腕時計を見た。

九時三十分。催し物が終わる十時三十分までには、彼らも店を脱出するだろう。

「では、一時間後にまた連絡いたします」

「ああ、待ちなさい。もうひとつ」

電話を切ろうとしたメームリンクの右手が止まる。

「・・・何でしょうか？」

「現金は余分に持っているかね？」

「はい。」

「では、ちょうどいい、君もショーを楽しんできたまえ」

「・・・は？」

思わず数秒おいて聞き返したメームリンクに、〈告知天使〉は面白そうに告げた。

「まだ、あの二人が我々の取引相手になる可能性が消えたわけではないのでね。彼らが女達にどんな態度を示すか見てきてもらいたい」

派手な照明の交差する中で、参ったな、とミロは頭をかいた。

言い寄ってくるきつい香水の女達に少々辟易していた、ということもある。それでもなかなかきれいな身体ラインをした娘達も居て、飲みながら何枚かはカミュの持っていたノートにスケッチした。人物画は描かないが、デッサンだけは別だ。だが、夢中になれるような被写体ではなかった。

カミュは、終始黙ったままだった。決して気むずかしい顔をしているわけでもないのに意外に女達が寄って来ないのは、そのどこか場違いな雰囲気せいだろう。

「・・・右から三番目の彼女は、バレエか何かやってたんじやないかな」

不意に、カミュが呟いた。

「身のこなしに、どこか品がある。タイミングの取り方がうまいんだ」

・・・キャバレーに来て女の感想が、それか？

どうも、やっぱりどこか感覚のピントがずれている、

と初めて出会った頃の印象を再確認する。だが、決してその目に狂いがないところが、カミュのカミュたる所以である……

視線の先で、すんなりのびた指がグラスをもてあそんでいた。無意識に、左手がノートの新しいページをめくっていた。自分でも驚くほど快適に、鉛筆が紙面を走った。女の柔らかい手ではない。けれど、骨張ってごつごつした手でもない。

楽器を弾いていたかも知れない、とミロは思った。指先が斜めに切れている。関節は、指の太さの割に意外にしっかりとっている……ピアノ弾きの指だ。本来なら、楽器を弾いたり、書き物をしたり、こうしてグラスをくゆらして過ごす手なのだろう。

盗みをはたらいて命を懸けた荒事をやるような手じゃない……

カミュが、その外見を裏切つて、結構過激な一面を持ち合わせていることも知っている。でも本質の彼は、おそらくこの手が表すとおりなのだろう。

熱に浮かされたように描き殴つて、ミロは不意に、自

分のしていることに気づいた。

……今、自分は誰を描いた？

背筋を、冷や汗が流れ落ちたような気がした。あわて、新しいページをめくる。舞台上に視線を投げているカミュは、気づいた様子はなかった。ミロは静かに、息を吐いた。

どうかしている。

華やかな女達が色気を振りまくほど、カミュしか目に入らない。

ライトが舞台の一点に集中し、フロアの明かりがおとされた。これから、メイスイベント、というわけだ。まだ明るさに慣れきっていないミロの袖を、カミュが軽く引いた。

「ミロ、申し訳ないがここまでだ」

「……俺より、あなたの方が熱心に見てたんじゃないか？」

「……そうかな」

少し、笑った気配がした。顔が見えなくて良かった、と心底思う。……自分が今、どんな顔をしているか、大体想像がつく。

初めから手配してあったのだろう、嬌声を上げる男達の合間をぬってフロアの端まで行くと、店の主人が小声でこちらへ、とささやいた。舞台裏から物置のような場所を通り抜け、いくつか普通のアパートの居間のような部屋を横切り、大きな南京錠のついた扉の外へ押し出される。

小さな街頭の他は明かりもない頭上には、満点の星空が輝いていた。

「……待っていたよ……」

カミュは、寮の目の前で足を止めた。何度も後ろを振り返りながら、なんとか追っ手を振りきって寮までたどり着いた。だが、今寮の門の前に居るのは誰だ？

ミロが、鋭くカミュの表情と門前に佇む老人とを見比べた。背筋を、冷たい緊張が走った。

間違いない。あれは、リンネだ。

とうとう、タイム・リミットがやってきたのだ。

ミロは、自分の左手を何度も握ったり弛めたりしてみた。……彼は、この手がした細工に気づくだろうか？

いや、それ以上に、恐ろしく鋭い目を持つカミュを誤魔化せるのか……

老人が、一歩前に進み出た。伏し目がちにしていた瞳をまつすぐに上げ、それからじつとカミュを見た。

「カミュ・フロベール殿ですな？」

「……はい。」

「……先日は、失礼した。初めてお目にかかる。貴方の父君の大学時代の友人で、カール・フレデリク・リンネと申す者です。……大変不躰ながら、貴方が今お持ちのモーツァルトの肖像画の処置を、どうか私にお任せ願いたい。」

chapter 7 第二の秘密

赤い月が、東の空からゆつくりと姿を現した。僅かに照らし出されたアスファルトの路面の上に立つ人影を、カミュは息を詰めたまま見つめていた。今更——どんな顔で、この男はあの絵を渡せというのだろう。だが一瞬胸中にわき上がった怒りは、すぐに霧となつて消えた。月明かりの中の老人の表情を見たからだつた。重い悔恨にさいなまれて、幾重にもしわの刻まれた額。

「・・・勝手なことを、とお思いだろうが・・・あれは、あなた方の手に負える代物ではない。このまま手放さずにおれば、きつと今以上の危険があなた方に及ぶだろう・・・」

重苦しい声だつた。何十年もの怯えを、その言葉に凝縮させたような。

「・・・あれは、何なのですか？」

当然の疑問が、カミュの口をついた。断れないのなら、せめて自分が守ってきたものが何なのかを知りたかつたのだ。

だが、リンネは首をふつた。無知な者の好奇心をたしなめるように。

「・・・私は何と思われても致し方ない。だが、故人を見損ないたくなければ、そのことは訊かずにおくことだ・・・」

モーツァルトがリンネの手に渡った、との連絡が〈告知天使〉の元に入ったのは、十一時三十分すぎの事だった。プロワイエ伯爵が非公認に開いているオークションは、夜中の十二時に始まる。〈告知天使〉はしばらく思案して、テーブルの上の呼び鈴を押した。支度は、出来ているはずだった。

「お出かけでございますか、〈告知天使〉様。」

「ああ。今日はお出ないだろうがな。伯爵の顔色を確かめに行くには良い口実だ」

「ウェーベルン様として赴かれるのですか?」

執事は、少し気がかりな視線を向けた。彼の主は、その優美な容姿の割に大衆に紛れる術を心得ている人物であつたが、それでも、狙つた獲物は決して逃さない収集家の噂は近頃有名になつてきているのである。

「・・・お気をつけ下さい。オーストリア政府が、オーストリアからの盗品を法外な値段で取り引きしてゆく収集家について、調査を命じているとのことですよ」

「ああ、わかっている」

ふと、〈告知天使〉は笑つた。・・・そのオーストリア

政府が、収集家『ガブリエル・ウェーベルン』の正体を知つたら、何と云うだろうか。

「・・・所詮、金で買われて、何もできなかった者たちだ。遠くでいくら叫えかかろうと、彼らが私に手出しをすることは出来ない。」

長い夜が、明けた。

カミュは、ぼんやりと寮の窓から通りを眺めていた。ミロは、今日も朝からアトリエに行つていて。課題の絵が仕上がつていないと、パンを一切れ口にくわえて慌てて出ていった。

自分は。

二時限目に美術史の授業が入つていた。出かけるつもりで、ノートと資料も用意した。だが、ブックバンドで止めたノートはテーブルの上に置かれたまま、彼は窓辺に座り続けていた。

視線の先を、二時限目の授業を受けに行くのであろう、学生たちが笑いざめきながら通り過ぎて行く。

以前は当然のように身の回りにあつた、ごく当たり前の日常が、眼下に広がっていた。

——何を・・・しているんだろう。——

こんなところで。あの日常の中に、戻って行きもしないで。

全ては、終わったのに。昨晚、リンネにモーツァルトを渡した時点で。

何も、思いまどうことはないはずだった。初めから、そのつもりだったのだ。最初は、ニールセンに。そして、その次はリンネに。父の友人の誰かにあの絵を手渡して、それで終わりだったはずだ。

奇妙な脱力感が、彼の全身を支配していた。

これ以上過去を暴こうとするのは、故人に対する冒瀆だと、カミュはうすうす感じ取っていた。とすれば、リンネは絶妙のタイミングで悩みの種を引き受けてくれたことになるのだ。

問題は、その後あの絵をリンネがどうしたか、であつ

た。

——行き着く場所は、矢張り伯爵か・・・——

そうさせたくないからこそ、父が死に際に途方もない遺言を残したのだと、カミュは知っている。ましてや、伯爵が三十年前の事件に関係しているのは、ほぼ間違いない。

どうするのか。自分は。

カミュはしばらく窓際で頬杖をついたまま、じつと身じろぎをせずに通りを眺めていた。やがて、授業に数分遅れた最後の学生が大学の門をくぐるのを見届けると、彼はゆっくりと立ち上がり、外出用の上着を取った。夕イをしめ、鞆の中に小さなメモ用紙とペンを放り込む。

上着のポケットに、右手を突っ込んだ。モンパルナスの画廊の名を記したメモ用紙が、その手の中に握られていた。

『人生』という名の画廊を訊ねてみると、少し頭の毛の薄くなつた主人が新しく絵を掛け替えている最中であつた。カミュは主人の手の空くのを待つて、壁に並べられたいくつかの絵を眺めてみた。

無名の画家のものだが、何とも暖かな気分させてくれる絵である。構図のセンスも、決して奇抜ではないが、所々にとぎすまされた感性を思わせるものがある。

この店の主人は、若い人材の発掘にご執心であるらしかつた。

ここにミロの絵が並んだらどうだろう。ふと、そんなことを思つた。

「いらつしやい。どうもお待たせしてすまなかつたね」

気のいい主人が、ひよこひよこ片足を庇いつつカミュに近付いてきた。

「カミュ・フロベールさんだつたつけ？ 女房から話も聞いているよ。なんでも、三十年前のモーツァルト・フェスティバルについて訊きたいんだつて？」

「ええ、大学で博物館学をかじつていまして。展示方法について取材をしているんです」

これは、嘘ではない。カミュはこういつた事態を予測して、あらかじめ博物館学の授業を聴講したのである。カミュが学生証を見せると、主人はさも納得したように頷いた。

「そう、あれは酷かつた！ あのととき、あたしや芸員を務めていたんだがね」

三十年のブランクは、怒りを鎮めるにはまだ不足であつたらしい。主人は鼻眼鏡ずりあげ、かみつかんばかりの勢いでまくしたてた。

「見てくれは一応整えてあつたが、裏口はフリーパス、アルバイトのEチエックもなし、あれじゃ盗難が起るのも無理はない！」

「盗難というのは、一体何が？」

「それがあんな——まあ、そこに座んなさいよ——事もあるうに、モーツァルトの遺筆だよ！」

瞬間、カミュの顔が僅かに青ざめたことに、画廊の主人は気づかなかつた。当然、この礼儀正しい青年がその泥棒の息子であることなど、思いもよらないようであつた。彼は、奥方の運んできた紅茶を一口含むと、当時の

怒りを思い起こすように続けた。

「大体、あんな大層なものを預かるんなら、せめて鍵つきの防弾ケースに入れるべきだつて、あたしや何度も忠言したんだよ。でなぎやとてもじゃないが責任もてないとな。あのときは凄くてねえ。モーツァルトの自筆譜やら書簡やら山ほど来てて、愛好家たちにはそりやまさしく垂涎ものだったさ。ところが上の連中と来たら、モーツァルトの信奉者の事をまるで分かっちゃいなくてね。絵画みたいに世界にただ一枚というわけでなし、出版もされてる曲の自筆譜を盗んで何になる、つて耳も貸さなかつたのさ」

確かに、その判断は間違っている。あるいは、モーツァルトでなければ、それで良かったのかも知れない。未公開の楽譜ならまだしも、公開済みの自筆譜など、芸術的な価値などないに等しいからだ。

だが、モーツァルトである。彼の信奉者たちは、彼を一種神の如く崇め奉っているのだ。

書簡一枚でも、彼らには祭壇になり得るだろう。

「それで…….」

声が掠れているのを、カミュは自覚した。父なら、やりかねない。

「やられたのは、『レクイエム』だよ。知ってるだろう？あの中でモーツァルトが最後に書いたのは何だ？」

あまりにも有名な話である。音楽史上他に類を見ない天才が、死の恐怖に苛まれながら書き続け、とうとう完成し得なかつた鎮魂曲。

「第七曲……涙の日……ですか？」

「そう。正確には、その第八小節目だ。有名な、上昇音形だよ」

罪ある人 裁きを受けるために

塵より甦る日 それは涙の日

モーツァルトは、この悲痛な上昇音形を書き終えたところでペンを置いて激しく泣き出し、涙ながらに弟子のジュスマイアーに完成の指示を与えたという。つまり、この『涙の日』の第八小節最後の音符こそ、モーツァルトの絶筆ということになる。

「では・・・その最後の頁が盗まれたのですか!」

思わず身を乗り出したカミュに、画廊の主人は満足げに首を横に振った。

「ところが、犯人は相当なモーツァルトのマニアだったのさ。普通は第八小節目が遺筆だと思うだろう? だが、本当の遺筆は他にあったんだな」

またがり落ちてきた眼鏡を押し上げ、少し悪戯っぽい目つきがカミュの瞳を覗き込む。

「あんた、音楽の知識はあるかね?」

「・・・少しなら。」

「それじゃ、『涙の日』の続きがどうなってるか、知ってるな? 弟子が書いた部分だよ」

カミュは、有名な『涙の日』の旋律を、初めから思い起こしてみた。九小節目から先は、モーツァルトの形式を真似てはいるが、やや平凡な印象の旋律が続く。歌詞は、八小節目までの繰り返しである。

「九小節目から先は、弟子の創作だ。だがこの弟子は、出来る限りモーツァルトのテキストに従おうとしたんだろうな。モーツァルトが最後に走り書きした指示を忠実に

に守って、歌詞を繰り返し返した」

——え・・・?——

では、本当の絶筆というのは・・・!」

「もう分かるだろう? モーツァルトは、『涙の日』の八小節目まで書いたところで、もう自分がこれ以上書けないことを覚悟した。それで、弟子のために、楽譜の下に、『初めに戻る』という指示を書き残したんだ」

「それじゃ・・・盗まれたのは・・・」

「まさしくその文字さ。酷い話だよ。きれいにそこだけ、破り取っていきやがった! 全く、人類の遺産に傷を付けるなんて、何を考えとるんだか・・・」

カミュは、ただ言葉もなく、その憤慨を込めた言葉を聞いていた。無理もない、と思った。自分だって、身の仕業でなければ、義憤に燃えたことだろう。

モーツァルト愛好者にとって、『レクイエム』は特別な意味を持つ。

この曲こそが、かの天才の命を縮めたと言えなくもないからだ。

その、音楽史上類を見ない天才が、まさしく命の全て

を叩き込んだであろう紙面に、傷をつけるなど。

彼を愛する者には、とうてい許せる仕業ではないに違いない。

——あなたが畏れていたのは、これだったんですか……

カミュは、亡き父を思い、一人残されてしまったリネを思った。どうしても、自らの罪を明らかにする勇氣を持たなかつた人たちを。

彼らは、モーツアルトを誰よりも愛するが故に、己の行いが決して許されるものではないことを知っていたのだ。

「とにかく、それが原因で、あたしや博物館を首になつちまつてね。全く酷い話さ！ 結局、何だかんだで現場の責任だからな。まあ、そのお陰で女房と出合つて画廊を継ぐことになつたんだから、結果的には良かったんだがね——ああ、いらつしやい」

画廊の主人が、戸口に視線をやつて立ち上がる。客がやつてきたのだ。

「ご注文の絵が入つたよ！ 他にも数枚——今日は、ゆつ

くりしていくのかい？」

「いや、今日は別の用事がありましてね」

どうやら、得意客らしい。カミュは邪魔にならぬよう暇を告げようとして席を立ち、その場に凍り付いた。入つてきたのは、淡い金色の髪と、紫の瞳の男。

「……あなたは——」

「久しぶりですね。ようやく思い出して頂けましたか？」

男は、つとカミュの前まで歩み寄ると、カミュの顔の前でぱちんと小さく指を鳴らした。音と共に、頭の奥で何かが弾ける。記憶が、波のように溢れてカミュの胸にうち寄せた。——そう、あのルツェルンのカフェで、この男はメームリンクと名乗つたではないか。

「……よくもぬけぬけと……」

カミュは、瞳に力を込めて睨み返した。ニールセンを殺したのは——おそらく、この男。

「そう怖い顔で睨まないで戴きたいものです。私は命令に従つただけなのだから」

「何故ニールセンを殺した?! 命まで取らなければならぬ理由が一体どこにあつた?！」

「いいがかりですよ。……あれは、自殺だ」

かつと、カミユの頬が紅潮する。卑劣だ。人の罪悪感につけ込み、自殺に追い込むなど。

「……彼は、初めから重い罪悪感に苛まれていた。私は、彼の口から真実を伺っただけだ」

真実、という言葉が、怒りに我を失いそうになっていたカミユの神経を現実に取り戻した。ならば、この男は全てを知っているわけだ。うかつな事をすれば、またしても相手のペースに引き込まれてしまう。

「店主の話の、続きをお話ししましょう」

無理矢理に言葉を飲み込んだカミユを偷しそうに見つめて、まるで今までの会話を聞いていたかのように、メームリンクが笑った。

「あなたの父君は、確かにモーツァルトの遺筆を盗んだ。しかし、盗まれたのはそれだけではなかったのですよ。」

ミロは、ボナパルト通りからパリ第五大学を駆け抜けていた。殺気だった気配が二つ、後ろから迫ってくる。美術学校を出た辺りからつけられていた。覚悟はしていたことだったが。

——カミユと一緒にやなくて、よかったな——
もつとも、そのために今日は朝早くからアトリエに来ていたのである。

——どうやってまくか？——

走りながら、ミロは左右を見渡した。人の多いところへ逃げる必要がある。派手な手出しが出来ない場所だ。

思った通り、だった。

あのモーツァルトには、絵画としての価値など爪の先ほどもないのだ。

サン・ジェルマン大通りへ駆け出した。車が、派手なブレーキ音をたてて止まる。運転手が、窓から怒鳴り声を上げている。

好都合だった。

後ろの二人も、すぐには通りを渡れないだろう。

脇の小道へ駆け込んだ。このまま、レンヌ大通りに出て、タクシーを拾って逃げるつもりだった。

ところが、一台のベンツが細い小道を走り抜けて後を追ってきたのだ。

——まずい……！——

ひやり、と背中に冷たいものが走った。一体連中は、どれだけの追っ手を差し向けているのか。

猛スピードの車体が迫る。間一髪でよけて、ミロは地面に転がった。跳ね起きようとした頭に、冷たい鉄の感触が押しつけられる。

かちり、と安全弁の外れる音が、ミロから抵抗の意思を奪った。

こんな路地裏にまで人員を配置するなど、敵ながらあつぱれな執念である。

「……手こずらせてくれたな、へぼ画家」

ベンツのドアが開き、中から中背の男が姿を現した。両手の指に、不釣り合いに大きい石をつけた指輪をはめている。左手のブラックオパールなどは、巨大すぎて気

味が悪いほどだ。

「このわしに逆らった芸術家がどうなるか、未だに分かっていないと見える」

「結構。あんたに見込まれるほど人生捨てちゃいないね。伯爵。」

ミロは、鼻で笑って男の顔を見返した。確かに、このフランスでのブロワイエ伯爵の力は絶大なものがある……。だが、この男には死んでも媚びたくなかった。第一、世界は何もフランスばかりではない。

「……遺筆を何処へやった？」

「何のことだ？」

「しらばつくれるな。お前がむしった薔薇の花の中に隠れておつたらうが」

「焦れて赤黒く顔を染めた男を、ミロは冷めた目で見つめていた。ブロワイエは、最初から、あのモーツァルトが何を隠しているかを知っていたのだ。肖像画をリンネに渡したのが、昨夜夜更け。遺筆以外はどうでもいいと言わんばかりの、この異常に早い反応こそ、紛れもない証拠だ。」

では、伯爵は一体いつ、どこでそのことを知ったのだらう？

「……冗談を。あんたたちや他のお偉方が目の色変えておっかける名作を、何で俺がいじると思うんだ？」

銃口を押しつける男の手を、ミロは蠅でも払うように押しのけた。どうせ彼らには、ミロを殺すことは絶対に出来ないのである。

遺筆の在処を喋るまでは。

「変な話だよな？ そうするとあんたは、折角手に入れた肖像画の薔薇の花を早速むしってみたというわけだ。」

『芸術の守護者』にしては、随分な所行じゃないか？」

「なんだと……？」

「あんたがどういいわけするつもりか知らないが、少しまともな脳味噌のある奴ならすぐに判るだらうよ……あんたは最初から、あれが何を隠しているか知っていた。フロベールから詐欺まがいの方法で絵を奪ったことが何よりの証拠だ。知っていて、三十年も黙っていたんだ」

周りを取り囲む男達が、ざわり、と色めき立つ。

「つまり、あんたも三十年前の盗難事件の共犯者だつて

ことさ」

「……！」

脇から腕を捕らえていた男が、ミロの襟首を掴んで強引に引き上げた。別の男が、ミロを黙らせようと拳を振り上げる。彼らは、この人より常に優位に立っていないと気の済まない伯爵が、不遜な人物に対してどういう報復を要求しているかをよく知っていた。

その時だった。不意に、伯爵が声を上げて笑ったのだ。それは、秘密を暴かれたことへの開き直りというよりも、勝ち誇った高笑であった。

——なんだ……？——

「フロベールは、もう死んでいるのだ」

異様な光を放つ両目が、獲物をいたぶる目つきで、とらわれの画家を見下す。

「わしは前非を悔いたフロベールから遺筆を託された者なのだ。フロベールは、罪の重さに耐えかねて、遺筆ともう一つ重大な遺産をわしに託した……自分が死んだらこれらを世に出して欲しい、とな。わしは、古くから付き合いのある友人の頼み事を引き受けた……これで、

立派に筋は通るのだがね？」

「・・・重大な遺産、だと・・・?!」

「おまえのような凡夫には及びもつくまい。ネズミは精々、絵をほじくっていい気になっておればよい」

遺筆など、実のところ記念的価値しかないのだ。もう一つの、隠された遺産に比べれば。

——こいつ・・・!——

後ろ手にねじ上げられた両手がきしんだ。じわじわと増してくる痺れの中で、ミロは全ての知識の断片が組み合わされて行くのを感じた。初めから、事件の首謀者はブロワイエ伯爵だったのだ。三十年前、カミュの父らは遺筆を手に入れた。だがこの強欲な俗物は、それ以上のものを手に入れたのだ。

そして今、その全ての罪をカミュの父にかぶせようとしている・・・

遺筆が伯爵の手に落ちれば、計画は全て完成するのだ。

その後には待っているのは、——おそらく、関係者の抹殺。

「わしが十年かけても見つけられなかった遺筆を探り当

てた腕は誉めてやる。だが、遺筆の在処を吐かない限り、その腕に未来はないぞ」

「ばかな・・・!」

カミュは声を震わせた。父やリンネの怯えかたからして、とてつもない秘密を抱えているに違いないとは思っていた。だが、それにしても。

——『涙の日』のページに仕込まれた、未公表のメモだった・・・?!——

絶句して立ちつくしているカミュに、メームリンクはわずかに憐れみの混じった視線を投げた。画廊の主人は、あまりに深刻な二人の表情に事情を悟ったのか、いつの間にか姿を消している。

「何故、モーツァルトがそのような細工を行ったのか、

現物が手許にない限り、推測も容易ではありません。ただ、彼は、ラクリモーサを記したページの板紙を剥がし、その間に紙片を埋め込んだ。その内容は、フリーメーソンの何らかの秘密を記したものであったかも知れないし、個人的なメモであったかも知れない。・・・もっとも多い見解は、何かしらの宗教的な事情でレクイエムに組み入れることが出来なかつた小曲であろうというものです。あの曲を自らのレクイエムとして書き進めていた作曲家の心情からすれば、十分にあり得ます」

「でも・・・そんな重大なことに、どうして今まで——！」
「原譜は、普段は防虫を施した保管金庫に厳重にしまわれています。そもそも、目にする機会自体が少ない。しかし、一部が破られれば話は別です」

メームリンクは、三十年前の展示会場で起こった事件の経過を語った。ニールセンから直接聞いた情報である。

フロベールとリンネ、エドモント・グレイ、ニールセンの四人は、バイト先で見たレクイエムの原譜に心を動かされ、モーツァルトが最後に書いたと思われる『初めに戻る』の文字を彼らの祭壇にしようと企んだ。甘いセ

キュリティーに助けられて、彼らはラクリモーサのページから紙片を破り取ることに成功したが、焦っていたため、その後の楽譜の様子に気付かなかつた。

第二の泥棒がレクイエムのもとを訪れたのは、それからまもなくのことであつただろう。その人物の目的が、フロベール等と同じであつたか否かは判らない。目標に近付いてみたら既に先を越された後で、その破れ目から覗く隠しメモに気付いたのかも知れない。

いずれにせよ、ずさんな管理体制はその事実に展示会の最終日まで気付かず、責任追及を怖れて、主催者側も国も、この事件を秘密裏に処理しようとしたのだ。

そのころのフロベールは、一時期の狂熱が冷め、自首をする覚悟を固めていたらしい。だがその折りに、レクイエムに隠されていた文書が盗まれたと、関係者に極秘で回ってきた。ラクリモーサの八小節目のページの端が破り取られており、その破れ目からナイフで切れ目が入れてあつて、そこから何かを取り出した跡があるというのだ。

「ほんの軽い気持ちで盗みを働いた四人は、知らぬ間に

膨れ上がったしまった事件にしりごみし、自首の機会を失ってしまった。当然のことながら、二つの犯罪は、同一犯の仕業だと見られていました。オーストリア政府への手前、警察側は躍起になって失われたメモの行方を追っていましたから、自首すればただでは済まなかったでしょう。もし第二の犯行の容疑が晴らされたとしても、芸術家としての将来に傷が付くことには変わりありませんしね……。もつとも、不思議なことに、その後のこの事件に関する調査は全てうち切られ、オーストリア政府も沈黙してしまつたのですが」

それで、彼らは遺筆を決して見つからない場所に隠すことに決めた。

それが、モーツアルトの肖像画だというのである。

「肖像画……?! あれのどこに、そんなものが隠されていたというんですか?」

一瞬、怒りとも悔しさともつかぬ感情が、カミュの胸を塗りつぶした。たつた、八文字の走り書き。それがたとえモーツアルトの遺筆だつたとしても、所詮は死んだ人間の言葉だ。

そのために自分は罪を犯し、ニールセンは自殺し、リンネも捕らわれているとは……!

「そう……誰にも判らなかつた。何十年も。伯爵も、一度は手に入れたものの、ついに在処をつきとめることは出来なかつた。ニールセンは……その答えを言うまいとして私の前から逃げ出したのです。後を追つたが、間に合わなかつた。だから、私も知らない……。ですが——」

画家の目から見ればどうでしょうね? と、ふいに真顔になつて、メームリンクは呟いた。まるで独り言のよう。

「——まさか……」

ゆつくりと、カミュが瞳を見開く。アトリエに通つている、ミロは。

「……私は、リンネが持ち帰つたモーツアルトに果たして意味があるのか、甚だ疑問なのです。」

「なんだと・・・っ！ 出し抜かれた?！」

ターナーは、掴んだ電話のコードを握りしめた。ミロをずっとマークしていた。初めのうちは自分で尾行していたのだが、どうやら異常に勘が鋭いらしく、尾行をしてもすぐにまかれてしまう。

それで戦法を変え、ミロが移動しそうな場所に部下をポイント配置していたのだが・・・

ミロが伯爵の追っ手をまくために小径に入り込んだことが災いして、対応しきれなかったようだ。

「ではプロワイエ伯爵本人が乗り込んできたんだな？」

ターナーは、太った成金趣味の中背の男の情報をもう一度確認した。左手に、悪趣味なほど大きなブラックオパール指輪をはめていた、という。彼はそのまま尾行を続けるように指示を出すと、乱暴に受話器を置いた。間違いない、行き先は伯爵邸であろうが。

ほんの先日、メームリンクから聞いた、肖像画の秘密。

ミロが拉致される理由があるとしたら、ひとつしかない。

——怖いもの知らずが・・・！——

火をつけたばかりの煙草をねじり消して、ターナーは舌打ちした。彼は、かつてプロワイエの元に居ただけに、伯爵のやり口を嫌と言うほど知っていた。中世の城を丸ごと買い取って改造したあの建物の地下には、秘密のオークション会場だけでなく、血なまぐさい拷問部屋も多々あるのだ。

ミロには、出会いから出し抜かれている。何度も逃げられているにもかかわらず、不思議と、怒りはわいてこなかった。むしろ、あの悪趣味な伯爵のおもちゃにされるかと思うと、何とも胸が悪かった。

そもそも、伯爵の目的も〈告知天使〉の狙いもミロが奪った遺筆にあるのなら、自分の仕事はまだ終わっていないのだ。

一番大事なものが、まだミロの手元にあるのだから。——だからって、助けてやる義理はないんだがな・・・

「ご親切にも助ける算段を考えてやっている自分に気付いて、彼は、むっとしたようにソファに身を投げ出した。放っておけば、そのうち伯爵が手に入れるだろう。カミュやリンネを人質にとることも考えられるし、伯爵は自白剤も持っている。如何にミロが頑固であっても、長期戦になれば強情にも限界があるだろう。」

「ただ、待っているだけでいい。それで、仕事は終わる。……その代わり、ほぼ間違いなくミロは廃人になるだろうが。」

「……くそっ!」

言い捨てて、ターナーは立ち上がった。所詮、自分はメームリンクほど冷徹にはなれないのだ。いや、あるいは彼も、平然とした表情の下ではニールセンを死に追いやったことを気にしているのかも知れないのだが。

「ここで見過ごして、ミロが死んだりしたら、さぞかし後味が悪いに違いない。」

彼は再び受話器を取ると、手帳の中から一枚のメモを取りだしてダイヤルを回した。

三度ほどベルが鳴った後、話口に出たのは女の声。

「ターナーだ。……頼みがある、ローザンナ嬢」

「まあ……どうしたの?」

驚くローザンナの問いを遮って、ターナーは事の成り行きを早口に告げた。彼女は今、事件が片づくまで、〈告知天使〉が提供したゲストハウスに身を寄せている。もつとも、〈告知天使〉の存在は知らないのだが。

だが、このまま手をこまねいていれば、彼女にも危険が迫るのは間違いなかった。

「ミロがブロワイエ伯爵に捕らわれたようだ。次に狙ってくるのは君とカミュだろう……俺は伯爵邸に行く。君は、このことをカミュに伝えてくれ。」

水の滴る音が、遠くに聞こえる。

ミロは、首を振った。ぼうっと、水膜を張った音がし

ている。声も、音も、そんなに遠いはずはないのだ。その証拠に、目の前の水面に、青ざめた自分の顔が映っている——

「遺筆はどこだ？」

遠い声が訊いた。ミロは俯いたまま、首を横に振った。「まだ懲りんのか。折角手を痛めん方法にしてやつてい」というのに」

ブロワイエは、疲れ切ったミロの前髪を掴んで仰向かせた。その口に細長い管を押し込み、水を流し込む。激しく噎せて、ミロは身体をくの字に折り曲げた。

既に、吐き出す胃液も水ばかりになっている。

「ふん．．．水にでも濡れば少しはかわいげも出るかと思つたが、ふてぶてしきは変わらん。一言吐けば、わしがとりたててやるぞ。どうだ？」

「．．．誰が．．．きさま．．．なん．．．ぞ．．．に．．．」

かすむ目で睨み付けた。冗談ではない。伯爵に取り立てられるくらいなら、死んだ方がまだ。

だが、伯爵の犬になるのでなければ、喋った時点で口封じに殺されるだろう。

「減らず口を．．．！」

床に倒れ伏した頭をけりつけられて、一瞬意識が白濁する。後ろ手にねじ上げられた手に、また新たに鉛の鎖が食い込んだ。手が痛まないのは結構だが、既に右肩は無理な姿勢にかけられた重みのために脱臼している。

「放り込め！」

足を固定したまま、鎖ごと、水槽の中に突き倒された。浮かび上がろうにも、背中の鎖が重くて顔が水面まで届かない。初めは、息苦しくて足掻いた。だが、既にその力もつきかけていた。

水攻めとは、よく考えたものだ。

肉体を痛めつける拷問は、体力を殺ぐ割には面白を得られないことが多い。最初の数日を乗り切つてしまえばあとは返事をする体力もなくなるのが普通であるし、人間は、痛みや恐怖には馴れる。

だが、呼吸の出来ない苦しさに馴れることはなかった。いつそ気を失つてしまえば楽になれると思いきや、飲んだ水を無理矢理吐かされて、また同じ事の繰り返しを待っているのだ。

——アクエリアスの、祟りか……——

窒息寸前で引き上げられて、荒い息をつきながら、ミロは己を噛った。

神聖なカードを引き裂いたから、きつと精霊が怒っているのだ。

薔薇の中から現れた小さな紙片を見た時、全身が燃え上がるのを感じた。あれだけ騒がせておいて、たったこれだけか、と。あまりに想像していたものと違いすぎて、この小さな紙片に記された八文字が何を表すのか、初めは訳がわからなかった。

真相を知ったのは、展示会の展示品目を見たときだ。『初めに戻る』という言葉からして、楽譜の中に描き込まれた言葉だろう。モーツァルト狂いの四人組が、楽譜の中の何を欲しがるか、品目を見れば一目瞭然だった。

大作曲家が、この世の最後に書き残した文字。おおお、そんなところだろう。

それにしても、ばかばかしい話だった。〈告知天使〉は、未公開の楽譜かも知れないと言った。なるほど、それならば血眼になって追う理由もあるだろう……。だが、た

かだか八文字の遺筆のために、何故人一人が死に、自分たちが危険な目に遭わなくてはならないのか？

無性に破り捨ててしまいたくなつて、目を背けた先に、大アルカナ『星』のカードが落ちていた。

熱くなつた自分を鎮める戒めも込めて、ミロは水を表すカードの中に遺筆を隠したのである。

——天才の、この世最後の八文字か……。——
おそらく、モーツァルトを愛する人々にとつては、聖遺物にも等しいものなのだろう。

それとも、あれは何かもつと大事なものに辿り着くためのキーワードなのだろうか……。？

ミロがまだ、弱々しくも自力で呼吸しているのを見て、プロワイエはいまいましげに命じた。

「何をしておる。休むな。続ける」

飲み込んだ水を吐き出そうとせき込んだ途端、また水の中に放り込まれる。縛られた指先は、既に痺れて感覚を失っている。

——……。そういえば、初めからアクエリアスについていたな……。——

ぼんやりと、甚だ緊張感にとぼしいことを思いながら、ミロは意識を失った。

ミロが捕らわれた、という情報は、夜になってからカミュに電話でもたらされた。メームリンクと画廊で別れてから一度寮に戻り、それからアトリエに向かったカミュは、ルノー教授の訝しげな一言を聞いて愕然としたのである。

「ミロ？ 今日昼頃に出ていったがね？ なにやら急いどるようだったが……」

「昼頃?! ……何時頃ですか?!」

「ふむ……確か一時頃だったと思うが。」

慌てて腕時計を見る。六時半。午後に何か用事があったとしても、そろそろ戻ってきていい時間である。

——ミロ……? ——
嫌な予感がした。

肖像画は、もう手元にはない。自分たちがつけねられる理由はなくなつたはずだ。

ミロが、あの肖像画の秘密に気付いて細工を施したりしてさえないければ……!

——ミロ……? まさか……! ——

寮に駆け戻り、祈るような気持ちで連絡を待った。遅くなるなら、きつと電話があるはずだ、と。

だが、やつとかかかってきた電話は、〈告知天使〉の元にかくまわれているローザンナからのものだったのだ。

「ミロがプロワイエ伯爵に捕まったらしいわ」

電話の向こうの声は、固くこわばっていた。

「ターナーが、次に狙われるのは私かあなたに違いないって……どうということなの？ 肖像画はもうリンネに返したんじゃないの？」

焦りの中に、小さな針が隠れている。恐らく、本人も気付いてはいないだろう。もう、彼を元の世界に帰して、と、そう訴えかけるように。

——ミロ……！——

口惜しさに、胃がねじれる思いだった。

ミロは何時、モーツアルトの秘密に気付いたのだろうか。

「……すみません……」

姿の見えない相手に頭を下げた。気付かなかった自分が許せなかった。

ミロはきつと、言えなかったのだ。あのドナウのほとりで追われた日、彼はたつた一枚の肖像画に命をかけてくれた。何が彼にそうさせたのか……ただ一つ言えることは、自分がここまで拘らなければ、ミロは本気にならなかっただろうということだった。己の行動が、ミロに、あの肖像画を価値あるものと思ひこませたのだ。

真実を知ったミロは、きつと憤つたに違いない。彼が、たつた八文字の走り書きに意味を見出すとはとても思えなかった。それでも、父の遺言を愚直に守り続けている自分を慮つて、遺筆を抜き去り手元に残しておいたのだろう。

この先の災難は、全て、自分一人で被るつもりで。

——そんなことまで、望んでいないのに……！——

だが、ミロがそういう性格の持ち主であることは、自分には判っていたはずだった。

「……あなたはいつも謝っているのね……」

不意に、溜息と供に小さな呟きが聞こえた。長い、長い溜息だった。

「……判っているわ。これは、ミロが自分で招いたことなんでしょ？ あの人、一度思い入れるとそういうところがあつたもの……これ以上は危険だとか、このあたりで諦めようとか、そういう判断は出来るくせに、その道を選べない人なの。私達にはどうにも出来ないわ。ただ、これ以上彼を危険な目に遭わせる要因にならないように気をつけるだけ。」

あなたのせいではないわ、と呟いて、電話の向こうの声は沈黙した。泣いているようだった。

「ローザンナ……」

呼びかける自分の声が、己の中に空虚に響く。

カミュの中で、一つの答えが実を結んだ。

自分は、ミロを返さなくてはならない。彼女の元に。

五体満足で、元通りの平和な生活の中へ。

「・・・待っていて下さい。必ず、ミロは連れ戻して来ます。」

「カミュ・・・？ あなた何を——」

「大丈夫。危険なこととはしません」

穏やかに言つて、カミュはふと口元に笑みを浮かべた。

結局、最後は自分に出来る方法に持ち込むしかなかつたのだ。盗むのも逃げるのも苦手だが、堂々と交渉の場に持ち込むのならまだ得意だ。

「今晚中に、手を打ちます。あなたもどうぞ、身の回りに気をつけて。」

静かに受話器を置いて、カミュは懐から名刺入れを取り出した。一番奥から引き出した一枚——上質のやわらかい紙に繊細な文字で名前が刷り込まれたそれは、ドナウのほとりで開催した収集家、ガブリエル・ウエーベルンから渡されたものだった。

真夜中の客を、ウエーベルンは待たせることもなくそのまま彼の居間に通した。プライベートな空間であろう

その部屋は、優しい木木の調度で統一されていて、幽かに森の香りがした。落ち着いた風体の執事は、常識外れの客に不快な色も見せず、飲み物の用意をしている。座り心地のよいソファアーに姿勢を正して腰掛けながら、カミュは、実のところ、こんな客も稀ではないのかも知れない、と思つた。

フリーの収集家だと言つた。狙いのものが手に入るなら、夜中でも会談する。そういう世界なのだろう。

「それで、ご用件とは？」

琥珀色の髪の紳士は、組んだ足の上でやわらかく両手を組んで、微笑した。

「聞けば、あなたは既にモーツァルトの肖像画を手放されたとか。今日はまた別の用件で？」

「いいえ」

短い一言に、ほんの少し、心が痛んだ。それは、『泥棒』

であつた自分の、最後の感傷だつたらうか。

カミュは細く息を継ぎ、それから一気に続きを吐き出した。

「用件ではなく、お願いです。．．．あなたに、モーツァルトの遺筆を買い取つて戴きたいのです。」

一瞬、〈告知天使〉の瞳に、探るような陰が浮かんだ。カミュは知る由もないが、今、彼の元には全ての情報が集まっている。肖像画の秘密は勿論、レクイエムの原譜に隠されていたメモの存在も、ミロが捕らわれたことも。

ミロがモーツァルトの秘密に気づき、遺筆を抜き取つたことは明らかだつた。

では、カミュはその遺筆の在処を知っているのだろうか？

「——それは、結構なお申し出だ。勿論、有り難くお受けさせて戴きませう。．．．今、現物をお持ちですか？」
秘書が持つてきたブランデーをカミュに勧めて、ウエーベルンは穏やかに訊ねた。カミュがゆつくりと首を横に振る。困つたような表情だつた。それから彼は、ためらいを振り切るように、およそ交渉の場には相応しくない

条件を持ち出した。

「．．．あなたが遺筆を買い取る相手は、私ではありません。ブロワイエ伯爵から、買い取つて欲しいのです。」

「それはまた．．．そのような条件で売買を申し出てきた方は初めてだが．．．」

「わかつています。．．．でも残念ながら、私はミロが隠した遺筆の場所を知りません。．．．そのミロは、先刻伯爵に拉致されました。彼の性格では、私が話せと言わない限り、決して伯爵に口を割らないでしょう」

カミュは、噛み締めるように語つた。だから、自分が先に交渉を成立させるしかないのだ、と。

くつくつと、〈告知天使〉は笑つた。それは、心からカミュの言葉を楽しんでいるかのような笑いだつた。

「成程．．．あなたのご友人は伯爵に遺筆を渡し、私がそれを買い取る。警察に助力を頼めない以上、最後は金に物を言わせるしかないというわけですか」

随分とあつかましい願ひではないか。現物もないのに、買つてくれという。しかも、手に入れるまでの交渉は、自分でやれというのだから。

だが〈告知天使〉は、憤つてはいなかった。この暁色の青年は何故か、人を不快にさせない力を持つているようだ。そもそもが深謀遠慮に縁がないから、こんな頼みも口に出来るのだろうか。

「・・・いいでしょう。伯爵を口説き落とせるかどうかはわからないが、やつてみましょう。しかし、その前にいくつか伺いたいことがある」

はつと顔を上げたカミュに、ウエーベルンは薄い剃刀のような笑みを向けて訊いた。

あなたは、あの遺筆が何故これほどまで追われるのかをご存じか？ と。

「・・・いいえ。モーツアルトを愛する人にとつては大切なものであるというのには分かります。——しかし、『涙の日』のページに仕込まれていたというメモの方ならばいざしらず、遺筆自体にそれほど価値があるとは——」

伯爵の執念はわかる。伯爵は、是が非でも遺筆を手に入れて、自分の犯した罪を遺筆泥棒に転嫁しなくてはならないという立派な理由があるからだ。

だが、目の前の紳士がそれほど欲しがる理由があるとは、カミュには思えなかった。

「——私には思えません。もし差し支えなければ、あなたがあの遺筆を欲する理由を教えてくださいませんか？」

「遺筆を欲する理由、ね・・・」

〈告知天使〉は、まつすぐなカミュの視線から目をそらすと、何かを思い出したかのように、皮肉な笑みを口元に刻んで続けた。

「正直な話、遺筆そのものにそれほどの価値はない。だが、もう一つの遺産である『涙の日』のメモは、遺筆と同じ場所に存在することになっているのです」

「存在することになっている・・・?!」

「——そう。三十年前、盗難事件が起きた際、オーストリア政府は勿論事件の解明と盗まれたメモ、遺筆の奪回をフランス政府に要請した。——だが、ある貴族の圧力がかかり、事件の捜査は未解決のままうち切られた。オーストリア政府が、急に、この事件については全く関与しないと断ってきたのです」

実のところ、オーストリア側としては、未公開のメモなどという重大な秘密をこれまで見逃し、たかがフランスの一盗賊にそれを暴かれたということに対する負い目もあつたのだ。そこへもつてきて、有力な政府高官へ莫大な賄賂がばらまかれた。賄賂をおくつたプロワイエ伯爵の言い分は、『いま事件をつつけば、オーストリア側にも傷がつく。勝ち気なパリ市民や警察の中には、「無能なオーストリア人が気づかなかつた秘密をフランス人が一目で暴いた」と得意になつている者もいる。いずれ頃合いを見計らつて、盗賊が死んだ時分に、盗品の返還という形にしてはどうか』というものだつた。

「市民どころか、警察までまるで協力する気がないのなら、オーストリアが遠くで吼えていても確かに仕方がない。丁度間近にフランスとの重要なサミットを計画していたこともあり、彼らは結局、その時点で最も楽な道を選んだ。——と同時に、もしも盗品が戻つてきたときのために、自分たちの言い訳を用意しておくことも忘れなかつたのです。つまり、メモが見つかったのは、野蠻なフランス人が楽譜を破くという暴挙を犯したからで、偶

然の出来事にすぎない、とね」

そのように主張するためには、その二つの証拠が同時に揃う必要がある。すなわち、メモと遺筆とは、同時に返還されなければならないのだ。

「・・・オーストリア政府は、条件を呑む代わりに、二つの盗品を一カ所に集めておくことをプロワイエ伯爵に命じた。それは、もし別々に遺筆とメモが存在しても、オーストリアはその真偽について一切関知しない、ということだ」

原譜をもつオーストリアが認めないのならば、その価値は無に等しい。

「・・・では・・・」

声が震えているのを、カミュは自覚した。・・・それでは、自分が申し出た取引は。

「あなたが、遺筆を手に入れるというのは・・・」

「当然、遺筆だけで済ますつもりはありません。伯爵も、そんなつもりはさらさらないでしょう。伯爵を口説き落とすとは、遺筆とメモ——恐らくは遺作だと思われるが——を同時に手に入れるということです。・・・どうや

らその点をご理解いただいていないようなので、説明申し上げました」

それから、〈告知天使〉は、何でもないことのように言った。

この取引が、メモの行方を支配する、と。

膝の上に置かれたカミュの両拳に、じつとりと汗が滲む。

「あなたはあれを持ち主に返したいと言っておられたが・・・私に売るのならば、結局は持ち主の手には戻らないことになる。それでは、伯爵が手にいれるのと大差ないのでは？」

重ねて尋ねたウエーベルンに、カミュは力無く頷いた。その意味では、確かに両者に違いはない。違うのは、伯爵は、誰にあれを売りつけるかわからない、という一点のみだ。

「仰るとおりです。ですが伯爵は・・・決して、芸術を愛する人ではありません。彼は、美術品の値段を煽ることにかけては天才的です・・・それゆえ、高値さえつけば、どんな相手にでも名作を売りつけてしまう。ただ見栄の

為だけに絵を求める人や、美術品を株や何かと勘違いしている人にも。彼の手から、まともに人も居ない社長室や会社の倉庫へと引き渡された作品たちが、どれほどあることか・・・」

「・・・私はそうではない、と？」

「あなたは、モーツアルトを愛しておられるでしょう・・・？」

そう言つて、カミュはゆつくりと、ウエーベルンの背後の柵に視線を移した。綺麗にレコードが整頓されている柵には、モーツアルトの交響曲やソナタ全集などが、綺麗に並んで収まっている。

〈告知天使〉は、また笑つた。今度は、夜の空気が密やかに滑り込んだような、そんな不思議な笑いだった。

「・・・成程。確かに、私はモーツアルトを愛している。幼い頃、無惨にも切り裂かれた『涙の日』の譜面を見て、怒りの為に一晚眠れなかつた程に。その一方で、私もあの譜面ごと自分のものにしてしまいたいと願うほどに――」

「・・・ウエーベルン殿？」

「では、最後にもう一つ、あなたに尋ねよう。もし私が、手に入れた遺筆やメモを自分だけのものにして、死んでも手放したくないと言ったら、あなたはそれでも私にこの依頼をするだろうか？」

不意に、ウエーベルンの双眸が、刃物のように鋭いきらめきを宿した。カミュは、その瞳の色が僅かに変わっていることに気付いて、両目を見張った。——彼の瞳の色は、鶯色ではなかったか？ だが今は、光の加減だろうか、燃えるような森の緑を宿している。

「それは——」

「ここで依頼をキャンセルされても、私は一向にかまわない。くれぐれも、後悔なさらぬように……」

一番怖れていた問いを相手から問われて、カミュは狼狽した。

本当に、これでいいのだろうか。もつと、他に道はないのか。

苦しげに自問するカミュを、〈告知天使〉はただ黙って見つめている。こうして見ると、以前に会ったときよりカミュは少し痩せたようだ。毎日追われ続け、隠され

た過去と戦い、失望し——今、眉間に刻まれている皺が、その日々の全てを物語っている。

やがてカミュは、伏し目がちにしていた瞳をゆつくりと閉じた。その姿は、まるで殉教者の祈りのようでもあった。

「——時間が……ありません。本当は、もつと他にも道があるのかも知れない……でも、今も、ミロは酷い扱いを受けているかもしれないんです。彼の命にはかえられない」

瞳を開く。全てを見透かすような、強い眼差しが、自分を見つめている。

「明日、朝一番で、伯爵の元に交渉に行きます。——どうか、私達を助けて下さい。」

ウエーベルンは、グラスをテーブルに置くと、優雅な仕草で右手を前に差し出した。カミュはしばらく呆然としていたが、その意図に気付くと、慌ててまだ強張っている腕を伸ばした。軽く握られた手は、うつつらとなま暖かかった。

「——交渉成立です。あなたは、明日伯爵の元へ行き、

ご友人に遺筆の在処をうち明けるように説得する。私はその後、伯爵から遺筆を買い取る交渉をする。——そして、もしもあなたがたが危険な目に遭われていたら、あなた方の命も買い戻す。そういうことですね？」

「あ……」

「助けてくれ、とは、そういうことでしょうか？」

口元に、あの初めて会ったときと同じ人当たりの良い微笑が浮かんでいる。だが、言葉も眼差しも、決してその微笑ほどの容赦はない。

あからさまに言及されて、カミュは思わず赤面した。期待していなかったと言ったら、嘘になる。いや、あのとき、『あなたがたを守れると思う』と言った彼だからこそ、今夜頼ってきたのだ。

「……すみません……」

「いいえ。光栄ですよ。あなた方のような将来有望な人材の命を買うなどと、そう簡単に出来るものじゃない……ただ、あなたのご友人は何と知りませんが……もう一杯、いかがですか？」

コニヤックのボトルをグラスに傾けつつ、ウェーベルン

は同じ質問を繰り返した。

貴方のご友人なら、どうしたでしょうね？」

「……ミロなら、きつと譲らなかつたと思います。多分、何があつても……」

彼は、ゆるがない。命より大切なものがある限り。

たとえ、自分が捕らわれていても——。

あのドナウの川岸での会話を思い出しながら、カミュは独り言のように呟いた。

chapter 8 炎の中で

カミュは、朝露の中に佇んでいた。

パリ郊外の、小さな街。高台に、古城が朝日を浴びてそびえている。

全ては、ここから始まったのだ。

胸元に下がる十字架に手を当て、大きく息を吸い込む。顔を上げると、まっすぐに古城が視界に飛び込んできた。

何があるか、判らない。捕らわれて、ミロを脅す為の囮に使われるかも知れない。いや、それ以前に、これまでの報復をたつぷりと返される可能性だってある。

だが自分が行けば、少なくともミロに危害を加えるこ

とは止めるだろう……

カミュは、睨むように古城を見上げたまま、一步を踏み出した。

伯爵家には、十年以上も前に、一度訪れたことがある。まだ、詐欺まがいの手法で肖像画を奪われる前で、関係が良好だった頃の話だ。

そのころから、カミュはこの伯爵の趣味がどうしても好きになれなかった。父もあまり好きではなかったのだろう、他のとりまき達のように世辞を並べ立てることも出来ず、懸命に美点を捜そうと苦勞していたことを思い出す。

同じ苦勞を、十年も経って自分がするはめになるとは……

通された応接室のソファで伯爵が来るのを待ちながら、カミュは苦笑した。

「……やっと会えたな、フロベールの。」

二十分ほど待たされた後で、部屋着のままの伯爵が姿を現した。自ら手の内に飛び込んできた絵画泥棒に、さぞかし復讐心をそそられているだろうと思いきや、意外に冷静な顔つきである。

「今頃になって、何をしに来た？ 神妙になれば、わしが泥棒を許すとも思つたか？」

カミュは黙つて首を横に振つた。如何なる事情があつても、罪は罪である。書類上は伯爵の持ち物である肖像画を、非合法に奪つたことは否定できなかつたし、カミュのプライドもそれを許さなかつた。

「——私のことは、お気の済むように。ですが、その前に、関係のない人々を元の生活に返さなければなりません。」

「ミロのことか？ あれは、十分わしにたてついた。痛い目を見るのは当然の報いであろう」

「わかつています。でも、殺すほどの罪ではないはずです……今、ミロは何処に居るのですか？」

悪びれもなく、カミュは訊ねた。弱気を見せてはならなかつた。どんなに厚かましかりうと、交渉の場まで持つていかなければならない。

悲愴とも言えるカミュの決意を、ブロワイエはほぼ正確に読みとつていた。この若造、虫も殺さない顔をして面の皮は存外に厚いらしい……いづれ、少々脅せば言うなりになる腑抜け者、と思ひこんでいただけに興味をそそられて、彼は嗜虐的な笑みを浮かべて言つた。

「今頃は地下の拷問室で虫の息になつておろう。一晚かけて、たつぷりと水を飲ませてやつたからな……なに、安心するがよい。殺してしまつては意味がない……今日はゆつくりと休ませてやるつもりだ」

「あなたはミロのことを何もわかつていない」

間髪入れずに、カミュの返答が跳ね返る。

「彼は、非常に誇り高い人間です。その彼が、捕らわれて、心身共に屈辱を受けて、遺筆の在処を喋ると思ひますか？ 彼は、屈服するくらいなら死を選ぶでしょう……そして、この世で遺筆の在処を知るのは彼一人なのでしょ？」

剣呑な表情が、普段は涼しげに開かれている双眸に閃いた。勿論、これは演技だ。拷問室に繋がれているミロへの、息が詰まりそうなほどの不安を、つゆほども表に出さな

いたために怒りにすりかえているのだ。

「私が直接諭さなければ、彼は絶対に喋らない。そういう人間です。」

「お前なら、口を割らせることが出来ると言うか」

「勿論」

ほんの数秒の間、ブロワイエは考えるふりをした。実のところ、彼の心は既に決まっている。カミュが面会を申し込んできたその時点でだ。

だが、何も初めから親切にあかしてやることはなかった。目的地についたその場所で、真相を知って絶望に染まるカミュの顔を眺めるのも悪くはないではないか。

ブロワイエは、ちらりと舐めるようにカミュを見ると、些か興味をひかれたように訊ねた。

「成程・・・では、お前の要求は、あの小賢しいへぼ画家の口を割らせる代わりに、解放しろというのだな？」

カミュが頷く。

「ふん・・・本当にお前がああ強情者を口説き落とせたら、考えてやる。ついてくるがよい」

メームリンクは、カミュの消えていった伯爵邸の扉を、そこから約二百メートル離れた貯蔵庫の影から見つめていた。彼は、かつてブロワイエの元に居たのだから、使用人にも顔を知られている。カミュのように堂々と玄関から侵入するわけにはいかなかったのだ。

今朝のカミュの書き置きを思い起こし、彼は珍しく苦笑した。玄関に押しピンで留められた手紙は、メームリンク殿へ、とご丁寧に宛名つきで始まっていたのだ。

曰く、自分はこれからブロワイエ伯爵を訪ねるつもりであるから、これ以上バりに残っているのは無益である、と。

カミュはまだ、メームリンクのことをブロワイエの手先だと思っている・・・

尾行者へのあからさまなメッセージは、或いはパリに残るローザンナの危険を慮つてのことだったのかも知れない。いずれにせよ、彼はカミュが昨晚何処に行ったか

知っていたし、それゆえカミュの言葉通りパリに残っているつもりも毛頭なかった。

ただ、舞台を伯爵邸に移すとなると、自由な身動きがとれないという問題がある。

彼はすぐさま、そのことを〈告知天使〉に報告した。

〈告知天使〉は、カミュを追う任務を解く代わりに、いくつかの新しい指令を下した。

その指令の一つが、この貯蔵庫にある。

ここは表向き食料貯蔵庫になっているが、地下には膨大な量の爆薬がしまっているのだ。

『我々は、制裁を下さなければならない……』

電話口の涼やかな声が、記憶に甦った。

『期限は正午。大聖堂の鐘が鳴り終わるまでに目標を手でできなかった場合には、館を爆破する。オークション会場と美術品貯蔵室、権利書の保管金庫を徹底的に狙え……』

それから声は、歌うような口調のまま付け加えた。

誰が居てもかまわない、と。

——たしか、ターナー殿も潜入しておられるはずだ。——

——そのことを知っていて、わざと言っているのか。

部下を信用しているのか、それとも本当に人の命などどうでもよいのか——。

一通りの指示を下した後で、〈告知天使〉は言った。

『喜びたまえ。いよいよ、復讐の時がやって来た。』

「……どういふことですか?! こんな……っ……!」

カミュは、段々と痺れてゆく身体を必死で支えながら、背後の伯爵を振り返った。胸元に、赤く血の筋が滲んでいく。この部屋の扉を開けた瞬間に斬りつけられたものだ。

「ミロは……ミロは何処ですか?!」

「愚か者が! わしがお前の言うことなぞに素直に耳を傾けるとでも思ったか」

哄笑が響きわたる。カミュはナイフを持って近付いて来

る男を見つめ、恐怖に背筋を凍らせた。

過去の記憶が次々に甦ってくる。

あの時と同じ、白いモスリンに覆われた部屋、鼻をつくテレピン油の匂い――

「待ちかねたぞ……！ わしの天使……」

「来るな……っ……！」

足の力が、がくりと抜けた。このナイフは、オーストリアでミロが斬りつけられたものと同じに違いない。たった一筋のかすり傷だと言うのに、全身が痺れて動かないのだ。

狂画家は、総白髪になっていた。

一体何時から、この地下の石牢に閉じこめられていたのか、手足は衰えて細り、背骨も曲がり、落ち窪んだ眼窩の下で眼光だけがぎらぎらと光っている。髪を振り乱し、曲がった膝のままよたよたと歩み寄る様は、地底に住むという小妖怪のようだ。

兄が『聖セバスチアンの殉教』を描きたがっている。そう言ったビューローの声が耳に甦り、カミュは身震いした。

「そやつは、お前をもう一度描く為だけに精神病院を脱走し、いままで生き延びてきたのだ。知っておろう？」

お前の天使は、先月にはルノールと同じ値段がついたぞ？」

「あなたは……まさか……っ……！」

「どのみちお前も、ただで帰れるとは思っていない……。楽しみにしておるぞ」

「伯爵……！」

とんでもない虎穴に入り込んでしまったことに、カミュは今更ながら気付いた。

伯爵は、この部屋に自分を監禁し、画家に絵を描かせて売りさばく気なのだ。

狂画家の手が、カミュの襟元に伸びる。カミュは身を震わせて、その悪寒に耐えた。理屈ではない。過去の記憶が、狂画家の動作の一つ一つに、耐え難い恐怖を呼び起こすのだ。

「やめ……ろ……っ……！ 放せ……！」

床に転がったカミュの身体から、画家は一枚ずつ衣服をはぎ取っていく。白いモスリンを肩から腰にかけてまき

つけ、荒縄で縛る。プロワイエは、ほう、と溜息をついた。成程、このような姿をさせれば、カミュには殉教者めいた空気が生まれながらに備わっているように見える。

「いや・・・だ・・・っ・・・！」

「子供のようによくゆるゆると首を振るカミュを、画家は壁際まで引きずって杭にぶら下げた。それでも、必死に抵抗しているのだ。だが、既に老人のようになった狂画家の力は、驚くほど強かった。

「伯爵・・・っ・・・！ミロに・・・！」

「案ずるな。お前のその姿を見れば、あやつも喋る気になろう」

「ミロは・・・喋らない・・・絶対に・・・！」

脅され、自尊心を傷つけられるほど、頑なになる。自分のこのような姿を見れば、あの誇り高い芸術家は、妥協どころか逆上してもつとも危険な道を選ぶだろう。

傷つくのが怖いわけではなかった。ミロには、そのまま変わらないで居て欲しい・・・彼は、彼の信じるものを守り通してくれてかまわない。

ただ、この狂画家に対する本能的な恐怖があるだけの

ことなのだ。

カミュは荒縄で縛られた両手を握りしめ、固く唇を噛んだ。もはや、見苦しく騒ぎ立てたりはすまい。ミロが連れてこられたら、その時は正気を持って、既に取引は済んでいることを彼を説得しなければならぬのだから。

画家は、絵の具の準備を始めている。その傍らに、弓矢が三本置かれていた。

いつまで、自分は持ちこたえられるだろうか。

握りしめた手のひらに、じつとりと、冷たい汗が滲む。

「畜生・・・また振り出しか・・・！」

ターナーは、顔にからみつく蜘蛛の巣を悪態と併に払いのけた。中世の古城を改造したこの館には、外から建

物に通じるいくつもの抜け道がある。だがその殆どは使われていない上、伯爵がいくつかの大部屋を除いて殆どの地下室を閉鎖してしまったため、地下道はまるで迷路の様相を示していた。

灯りを極限まで落としていることもあって、頼りになるのは音と光だけである。

拷問部屋が北の一角に固められていることは、ターナーも知っていた。だが彼はそういつた陰湿な手口を嫌い、実際に部屋まで行ったことが一度もなかった。ミロがそこに捕らわれているのはほぼ間違いない。それゆえ昨夜から何度も北棟への侵入を試みているのだが、流石に囚人を閉じこめていた一画だけあって、なかなかたどり着けないのだ。

何度か、遠くで狂ったような笑い声を聞いた。ミロが発狂したのかと思ったが、それにしても声やしわがれてるように思えた。それに、方向としては東棟の方向だ。東はオークション会場に近いため人通りが多く、このまま侵入するのは危険だった。

四、五回入り口に戻された後、彼は不意に、細い水の

響きを聞いて立ち止まった。かすかではあるが、水の流れる音だ。壁に耳をつけて、注意深く音を辿ると、それは壁の向こうの部屋ではなく、壁の中から聞こえているようだった。

——水路があるのか・・・？——

囚人を閉じこめているのなら、生活用水が必要だ。この音を辿れば、そのうち辿り着くかもしれない。

ターナーは、灯りを消した。水の響きは、相対に神経を集中しなければ聞き取れないほど細い。視覚情報に惑わされなかったためだ。

何度か躓いて転びかけた。全身の神経を聴覚に集中する。空気の流れる音が聞こえる。進むごとに水の音は大きくはつきりと聞こえるようになり、水路が太くなっていることを思わせた。出口が近いのだろう。

最後に、一枚の扉に突き当たった。水は、この向こう側で水場にそそいでいるようだ。

——さて・・・どうするか——

扉の向こうに人がいたら厄介だと、ターナーは思った。消音器つきの拳銃を持ってきてはいたが、それはあくま

でも最後の手段にとつておかなければならない。彼は地下道に詳しくない。こんな狭い場所で囲まれたら、こんな拳銃一つでとても太刀打ちできるものではないからだ。

唯一、この場面で有利に働くことがあるとすれば、彼自身の名前だろう。ターナーは拷問係など知らないが、相手はターナーの名前くらいは知っているはずだった。一般に、囚人の近くにいる人間には、外の情報が届きにくい。いつも地下に潜っていることもさることながら、囚人と結託するのを防ぐため、わざと多くを知らせないのだ。

彼らの情報が古ければ、まだ伯爵に仕えているふりをして逃げ切ることが出来るかも知れない。

扉に耳をつけ、物音が聞こえないのを確かめてから、そつとドアを押してみた。ちょうつがいが錆びている。持ってきたオイルを注し、鍵がかかつていないことを確かめる。思い切つて、一気に押した。木のきしむ音が木霊した。

——まずい……！——

二つ先の部屋の角から、足音が近付いてくる。ひどくゆつくりした足取りだ。

ターナーはとつさに判断し、ドアを元通りに締め、ひとつ先の部屋の角に身を滑り込ませた。あれが看守人なら、おそらく誤魔化せる。彼らもまたほとんどこの地下に潜っていて、外の情報に疎いからだ。

手早く、服に絡む蜘蛛の巣を払った。いちかばちか。見つかる前に、打つて出た方が勝率は高い。

「すまん。看守室はどこだ？」

男が通り過ぎたあとを見計らつて、ターナーはその背後から声をかけた。男がびくりとして振り返る。初老の老人だった。これなら、誤魔化しきれなくても黙らせることが出来るだろう。

「アルフレッド・ターナーだ。第二部隊の作戦指揮を担当している。先頃捕らえられたミロ・サヴォナローラに聞きたいことがあるのだが……看守室がわからず迷つてしまった」

「第二部隊……？」

男は、怯えたような目でターナーを見返した。何処まで

逃げようとも追ってくる悪名高き第二部隊の噂は、こんな地下にまで届いているらしい。

ターナーは、喉の奥で笑いを噛み殺した。これは意外に、簡単な仕事かも知れなかった。現役第二部隊にさえ出くわさなければ。

「・・・私が看守ですが・・・」

「それは丁度いい。ミロは何処にいる？」

「水牢です。・・・ご案内いたします」

男は訝しむ様子もなく、先に立って歩き始めた。そもそも、この地下へ降りて来られる人間は限られている。不審人物ならもつと手前の段階で足止めされるべきなのだ。

複雑な地下道の角を7つ曲がったところで、湿度の高い一画に出た。天井から、細い水の糸が滑り落ちていく。わざわざ、水路を上に通しているのだろう。その理由に思い当たり、ターナーは僅かに両の眉をひそめた。

・・・水攻めか。

どこかに、窓も入り口もない処刑用の部屋があるに違いない。

看守は、そこから更に奥の一画へと歩を進めた。木戸の代わりに鉄格子の扉がついている。現在も使用されている区域、北棟の中心部だ。

——伯爵がいたりしたら、目も当てられないな・・・

——
本当に鉢合わせようものなら冗談事ではないのだが、ターナーは臆する風もなく看守の後をつけていった。突き当たりの部屋に、腰まで水に浸されて壁にはりつけられた人影が見える。一通りの尋問が済んで、小休止中なのだろう、辺りに人影は見えなかった。

——運の強い奴だ。——

断崖絶壁から飛び降りて死ななかった一件といい、ミロには、どうも神か悪魔かがついているような気がする。

「こちらでお待ちします。」

頭を下げて看守に礼を返し、ターナーは壁際の人を見た。うなだれて俯いた顔からは、すっかり血の気が退き、唇は青ざめて死人のようだ。

時間はあまりない。ターナーは、少し考えてから、壁

の向こうに声を投げた。

「・・・いいさまだな、ミロ・サヴォナローラ。そんなになるまで秘密を守り通してご苦労なことだが、カミュはお前を裏切ったぞ。」

その日は、ブロワイエ伯爵の身边を世話する使用人達にとつて最悪の日となった。大体、伯爵は寝起きが悪い。十二時を過ぎてから起き出し、面談は常に三時以降というのが基本であるのに、午前中に二人も客を迎えることになったからだ。

彼らは何時自分が気まぐれに首を切られるかと冷や冷ややし、予兆が見えたら即とばかりを受けない場所に逃げようと様子をうかがっていたが、主が二人目の客を、たった一時間待たせたただけで比較的上機嫌で迎えたことに

度肝を抜かれた。相手はフリーの収集家であつたが、非常に見目形のよい人物だったのが幸いしたのかも知れない。

「突然お時間を戴きまして、申し訳ありません。こういったことは、どうしてもスピードの勝負になりますので」

その琥珀色の髪をした収集家は、もの柔らかな微笑を浮かべて言った。

「先日のオークションに伺わせて戴きました。いつものがら、素晴らしい品揃えですね」

「それはどうも。矢張りつまらぬものを扱つても自分が楽しくありませんのでな。今後是非よろしくお願いいたしますぞ・・・ウエーベルン殿。」

ブロワイエは、値踏みする視線で、目の前の紳士を眺め回した。そこそこの家柄を感じさせる気品の持ち主だが、決して派手ではない。何よりも、卑屈さのない謙虚な姿勢が、清潔な印象を与えて気分がよかつた。

こういった人物を取り巻きに加えるのは、決して悪い気分ではない。

「次回は日曜日に行う予定です。特別に、貴殿をご招待

してもよいが・・・」

「実は、用件というのはそのことなのですが」

ふと、伏せがちにしていた面を上げて、ウェーベルンは膝の上で両手を組んだ。その仕草が願いの合図のように思えて、ブロワイエはふと口元を弛めた。

なかなか、つぼを心得た相手ではないか。

こういう仕草は、やろうと思つて出来るものではない。わざとらしくて、いやらしくなつてしまふからだ。

だが自然に相手の気分をよくさせる術を心得ている若紳士は、とんでもないことを口にしたのだつた。

「次回こそは、拝見することが出来るのでしょうか？」

あの——モーツアルトの肖像画を。」

瞬間、ブロワイエの全身に緊張が走つた。酷薄な影を浮かべていた双眸は強烈な光を放ち、その光は、さらりと極秘事項を口にした収集家を射殺すかと思われた——ほんの一瞬ではあつたが。

「——失礼。私は、非常にモーツアルトを愛しておりまして、とあるモーツアルトの肖像画を長年追つて参りました。先日、やつと所在が掴め、持ち主に交渉したので

すが——その方が、今は貴方がお持ちだと仰つたので、こうしてお願いに上がったわけです。」

「お願い・・・というと、貴殿はあれをお望みか？」

先刻までより些か低い声のトーンで、伯爵は聞いた。

「では、あれが一体何かも、当然ご存じでしょうな？」

「はい。・・・モーツアルトの遺筆だ、と聞いております」

「・・・成程。」

ブロワイエは浮いた背中を再びソファに預け、失礼、と断つて葉巻に火をつけた。

落ち着かなくてはならなかつた。

このガブリエル・ウェーベルンとかいう収集家、実はオーストリア政府から派遣された警官なのではないか？

ことモーツアルトに関して、伯爵の神経は異常なほどに過敏であつた。三十年前の事件当時、ブロワイエにはオーストリア政府とフランス政府の要人に膨大な資金をばらまき、モーツアルトの盗難事件についての調査をうち切らせたという過去がある。表向きはスポンサーの顔を立てるためであつたが、伯爵の気前の良さに、伯爵本人に対して疑いを抱いた者も決して少なくなかつた。

一度は黙り込んだオーストリア政府が、世代交代のあたりを食らって、過去の傷をほじくり返そうとしているのではないか。

オーストリアの収集家と聞いて、真つ先に彼はそう思ったのである。

——だが・・・所詮、警察のすることだ。——

たつぷりと葉巻を半分吸って、ブロワイエはついに落ち着きを取り戻した。

そうだ。警察など、『彼ら』に比べれば何ほどのことでもない。

『彼ら』の一言で、罪状など右にも左にも転がるのだから。

「・・・貴殿は、大変素晴らしい情報収集能力をお持ちのようだ。では、今更隠しても仕方がないのでうち明けるが・・・実はあれは、内々に引き取り手が決まっておりますいな」

「それは・・・どなたでしょう？」

「残念ながら、さる高貴な方としか申し上げられません。プライバシーの問題でしてな・・・もう随分まえから、

お話をいただいておりますよ」

言外に、お前より身分が高くてお前より先客だ、と込めて、若い収集家を見返す。この世界では、これで引き下がるのが常識である。

だが、優しい面立ちの収集家は、引き下がるところかまたしても常識外れな台詞を口にしたのだつた。

「そうですか・・・しかし、内々だと言うことは、まだ契約は成立していないと言うことでもある。ご無理を承知でお願いします。どうか、私に譲って頂けませんか？

その方の倍額はお支払いしましょう。」

「——なんですと？」

一呼吸おいて目を剥いた伯爵に、ウェーベルンはにっこりと微笑みながら、同じ台詞を繰り返す。

「その方がどのような値をつけられてもかまいません。かならず、その倍額をお支払いします。オークションならば、私の勝ちのはずです。」

遠くで、正午の鐘が鳴った。伯爵の頭の中も、大小の鐘が煩く喚き立てているかのようであった。一体この男は正気なのか。それとも、払うつもりがないからはった

りを言っているのか。

「・・・ウエーベルン殿・・・貴殿も収集家ならばおわかりのはずだ。そのような口約束で、取引が出来ますか？」

「では、今すぐ私の経歴をお調べになって下さい。あなたの情報網があれば簡単なはずですよ。私は欲しいものを手に入れる時は、いつもこのように約束している。——はたして、一度でも支払いが滞ったことがあったかどうかを。」

二つ目の鐘が鳴った。伯爵は、真顔になって、若すぎた収集家を見つめた。

「・・・ここまで言い切るのなら、嘘ではないのかも知れない。」

或いは彼は、どこぞの金融王の息子か何かなのだろうか。

三つ目・・・

四つ目・・・

揺らぎかけた心の目に、本棚の上のタペストリーが映った。

ピラミッドの中に神の目。

フリーメーソンの象徴である。

モーツアルトを欲しがっているのは、第二十九階位の数人のフリーメーソンリーであった。彼らはモーツアルトの遺品を法外な値段で買い取る約束をした上、現在第十五階位のプロワイエを特別に二十五階位まで引き上げてやると言ったのである。

殆どが三段階の階位しか持たない大東社が主流のこのフランスに置いて、三十三階位の位階を設けたスコットランド儀礼のロッジにわざわざ加入した伯爵の、階位に対する執着は並々ではなかった。

「・・・そうだ。第一、彼らを裏切るなど、空恐ろしいことではないか。」

これまでやつと築き上げてきた人脈をぶち壊しにするようなものだ・・・

九つ目の鐘が鳴ったとき、伯爵はゆつくりと顔を上げ、葉巻の火をねじり消して言った。

「・・・情熱は大変よく判りました。貴殿がもし最初にわしの元へおいで下されば、わしは何があつても貴殿に

譲つただろう・・・しかし、わしは彼らに約束しました。男たるもの、一度した約束をやぶるわけにはいかんのです。どうかおわかり願いたい。」

ウエーベルンは、ただ黙って伯爵を見つめていた。——その双眸が、淡い鳶色から深い深緑へと変わりつつあることに、伯爵は気付いたのだろうか。

十一番目の鐘が鳴る。

「・・・判りました。——では、あなたが三十年前に手に入れた、『涙の日』の中の遺作をお譲り戴きたい。」

その瞬間、辺りを轟かす爆音が響き渡った。

「何事だ?!」

ターナーは、耳をつんぎく轟音に頭を庇いながら、辺りの様子を伺った。地面が揺れている。それも、地下の地面が、だ。

「おい・・・あの狸ジジイ、一体何人から恨まれてんだ?」

すかさず減らず口をたたいたのは、ターナーに救出されたばかりのミロである。脱臼した右肩は一応復帰させたが、痺れてまるで使いものになっていない。カミュが裏切ったのなんのと、不毛な押し問答をしているうちに現役第二部隊に見つかり、慌ててまた地下道に潜り込んだ矢先の出来事であった。

「まあ、俺達にとっちゃ好都合だが・・・ん?」

不意に、ミロは足を止めて鼻をひくつかせた。嫌な記憶を思い起こさせる匂いが、彼の鼻をかすめたのである。

「・・・これ・・・なんか、焼けてないか?」

カミュの家に戻ったときに嫌と言うほどかがされた、火の匂いと——

「・・・火薬か!」

ターナーの中で、一つの回路が繋がった。爆音は、まだ続いている。人為的に配置された、連鎖爆弾だ。

——メームリンク・・・!——

ぎりつと、奥歯が鳴った。彼の知る限り、こんな事をやってのける人物は一人しかいない。この複雑な伯爵家

の地下の構造など、殆ど誰も知りほしくない。

そこで、毎日働いている人間を除いては……！

——どうりで……！——

見張りが少なすぎると思ったのだ。おそらく、自分が来る前に、メモリンクは使用人を催眠にかけ、爆薬の準備をさせていたのだろう。

自分が地下に潜っていることは知っているだろうに。

一体、〈告知天使〉は何を考えているのか……?!

「……ターナー！ 何してる！」

ミロの呼び声ではつと我に返った。ミロは既に十メートルほど進んでいる。振り返ったその表情で、ターナーはミロの切羽詰まった様子の理由を悟った。

火がまわり始めているのだ。

「ミロ……！ そつちはちがう！」

「違つたつて……！ 戻れるのかよ！」

苛立つた声で畳みかけられて、ターナーはもう一度背後を振り返った。

駄目だ。戻れない。

「……塞がれた……」

残る道は——中央棟に続く道のみだ。

「な……これはなんだ……！」

プロワイエは、文字通りソファから飛び上がって、ギャラリーに飛び出した。燦々と午後の日の降り注ぐ二階の窓から、どす黒い煙を吐く東棟と西棟が見える。驚いた使用人達が続々と玄関の前に集まり、館を見上げたまま呆然としている。一階にまだそれほど火が回っていないところを見ると、爆発は地下で起こつたらしかつた。

「……地下だと……?!」

人為的なもの以外ではありえない。だが、伯爵が目を見張つたのは、そのことではない。

「わ……わしの美術品が……!!」

「モーツァルトの遺作も当然地下ですか？」

涼やかに、〈告知天使〉は訊ねた。その落ち着きはらつ

た態度にブロワイエは背筋が寒くなるのを感じ、息をつめてゆつくりと背後を振り返った。

まさか……。

「……おまえ……まさか……。」

目の前の微笑みは、初めと同じで揺らぎもしない。

「……あなたのお友達には残念なことになりましたね？
これではモーツアルトは手に入らない……きつとモーツアルトは大喜びでしょう。これで、自分の秘密を暴かれることも、穢れた取引の材料にされることもないのですから。」

「ぎざまあ——つつつ！！」

我を忘れて掴みかかった伯爵を、〈告知天使〉はひらりと避けた。つつかかる対象を失った伯爵は、よろけて手すりに激突し、そのままその場に座り込んだ。

流星にこれでわからないほど、伯爵は鈍感ではなかった。

長年、人を欺く生活をしていたためかも知れない。

こいつが。

虫も殺さない顔をして、一瞬で全てを奪っていつ

た……！

ぶるぶると全身で震えている伯爵の前の階段を、ゆつくりとした足取りで上ってくる者がある。長い、優しい金色の髪と、夕空の紫の瞳。

「メームリンク……！！！」

彼は、かつて自分が蹴り出した部下の姿を呆然と見つけた。役者は揃ったのだ。メームリンクがここにいるのなら、全ての謎は解ける。何故なら、ブロワイエはいつも、言うなりにならない相手の本拠地の爆破を、メームリンクに命じていたのだから。

「メームリンク……！ 貴様……！！！」

「〈告知天使〉様。任務終了致しました。使用人は全員屋外に退避。ミロ、カミュ、ターナーの生存は現在不明です」
メームリンクは、かつての主の横をすり抜け、優雅に《告知天使》の前に立った。まるで、足もとの塊など目に入っていないかのように。

「ご苦労だった、〈アリエス〉。君にはもう少し働いて貰うことになるが」

〈告知天使〉も、かるく頷く。その姿からは、先刻ま

での礼儀正しい若年収集家の雰囲気など微塵も感じられない。

「貴様！ 何者だ！！」

最後の気力を振り絞って怒鳴ったブロワイエに、〈告知天使〉はガブリエル・ウエーベルンの微笑みで答えた。

「貴方には、知る必要のないことですね。……ですが、一つだけお教えしましょう。先頃、グラント・ロッジの二十九位階の連中が、階位売買の疑いで「法廷」にかけられ処分を受けました。何でも、盗品の売買で便宜を計らった美術品オーナーに対して、望外な十階級特進を乱発したとか」

ひとつ、ブロワイエの喉が鳴った。「法廷」の決議を知る者は——「法廷」に参加できる者のみ。

それはすなわち……

「かれらは今、仲良く徒弟になって、ブルーロッジに通っています。貴方にも勿論、同じ境遇を味わっていただくですがその前に、大作曲家の遺作の在処をお教えいただきますでしょう。」

「もう……いい加減に止める……！ 死にたいのか……っ……！」

カミュは、壁につり下げられたまま叫んだ。部屋には既に、煙が侵入し始めている。だが、狂った画家は己の世界から外を見ようとはしなかった。パレットに滅茶苦茶な色彩の絵の具を絞り出し、練り合わせている。

「血だ……血……」

赤黒い、狂った夕日のような色の絵の具をナイフの先に取り、カミュの胸元に塗りつける。つと、冷たい痛みが走り、カミュは身を震わせた。使われているナイフは、梨と一緒に置かれていた果物ナイフだ。カミュの肌の上で、絵の具と血の色は不思議な効果で混じり合い、確かに幻惑的な世界を作り上げていた。

「聖者の血だ……!」

眩きながら、画家は繰り返す。露わになった胸元に、矢を突き立てる手足に。

本物よりも本物らしい血の痕を描いてから、矢を突き刺すのだ。

四肢を切り裂く刃物の感触に、カミュは何度も理性を失いそうになった。この男は、そのうち皮を剥ぎ始めるだろう。そして皮を剥かれた肉の上に、また絵の具のオヴジエを作り上げるのだ。そしてその次は、肉を剔り……生きながらに解剖されるくらいなら、焼け死ぬ方がまだましかも知れない。

からからに乾いた喉をならして、カミュは思った。

ミロは——無事だろうか。

この爆発で、逃げられたらいい。そのまま、後ろを振り返らないで。

——ミロ……!——

炎が、部屋に潜入してくる。荒縄に戒められた両手から、血が滲む。

ふと、赤く燃える光に、家を焼いた炎が重なった。

——大丈夫だろうか。

不意に、カミュの頭に理性が戻ってきた。この炎の中で、本当にミロは大丈夫だろうか。

大丈夫なはずがないのだ。

ミロが捕らわれているのは、おそらく拷問部屋なのだから……!

「ミロ……!」

熱風と煙とが、カミュの視界を覆い尽くす。

——カミュ……?!——

弾かれたように、ミロは顔を上げた。今、確かにカミュの声が聞こえたのだ。炎の中から。

「ミロ! こっちだ!」

ターナーが後ろを振り返った。既に使用人は皆退避し

たのか、人影はひとつも見あたらない。覚えのある道に出て、ターナーはまっすぐに地上を目指した。これ以上地下にとどまっているのは危険だ。

「ミロ！ 早く……！」

「待つてくれ！ 今、カミュの声が——」

立ち止まって辺りを見渡しているミロの襟首を掴み、無理矢理引き戻す。

「幻聴だ！ 捜すなら上に上がってからにしろ！」

ターナーはそのまま石段までミロを引きずり、階段を二段とぼして駆け上がった。ミロもその後が続く。

そうだ。カミュがここにいる訳がない。そのために、ミロはカミュにさえ遺筆の存在を知らせなかったのだから……！

地上に出ると、昼間の光がまっすぐに瞳孔に差し込んできた。暗い地下で這い回っていた瞳には、いささか強すぎる刺激だ。思わず目を閉じ、その場で立ちつくした。

地下からの火は、やっと少し地上に回り始めたばかりで、地獄の中から脱出してきた身には、あつけないほど穏やか見える。

ゆつくりと瞼を開いた。逆光の中に佇む二つの人影をみとめ、そつと目をこらした。

その先に見えたものは——

「……何であんた達が一緒にいるんだ……！」

自分たちが、追われ続けてきたもの。そして、時に、自分たちが身を寄せかけたもの。

二度とみたくない紫色の瞳と、常に第六感が危険を訴えていた鷲色の瞳。

その二人の組み合わせは、ミロの中では、今の今まで絶対であり得ないはずの組み合わせだったのだ。

呟く声が掠れる。

「……そうか……最初からあんたは、そいつの手先だったんだ……ニールセンを殺し、カミュをつけ回し……俺達の本当の敵は、あんたたちだったんだ！」

自分の迂闊さに対する怒りが、胃袋の底を業火に焼いた。何故気付かなかつた。あの狂ったイタリア人の男も言っていたではないか。

『あの絵を狙うのは伯爵ばかりではない』と。

「あのいかれたイタリア人も、結局あんたの手下だった

んだな?! それをよくもぬけぬけと……!」

「若干の誤解があるようですが」

メームリンクが、煮えたぎるミロの視線を受けてなお針の先ほどの同様も見せず、淡々と続けた。

「あなたを助けた、そこにいるへカプリコーン」も我々の仲間だということをお忘れなきように」

「く……っ……!」

痛点を突かれて、思わず歯ぎしりする。そうだ。結局、

自分たちは最初からこの〈告知天使〉などというふざけた男の手中で踊らされていたのだ。あのドナウの河岸で感じた危機感の理由を、ミロは今はずきりと確信した。

この男からは、血の匂いがする。

目的のためには手段を選ばない、狂人の血の匂いだ。

「丁度良かった。依頼人が不在なのでね。君を選んで貰おう」

〈告知天使〉は、部下と画家の青年のやりとりを黙って聞いていたが、ミロが怒りを震えているのを見ると、

涼しげな笑みを口の端に上らせてミロの方へと歩み寄った。

「私はカミュ・フロベール氏から、モーツアルトに関する一切を買収した。君が持っている小さな紙片に記された遺筆と、もう一つ、『涙の日』の頁に仕込まれていた本当の遺作をね。君たちの命の代償に……」

「……なんだって?!」
ターナーの言葉が頭をよぎった。『カミュは裏切った』と……

こういうことだったのか。

「彼の父君は、確かに人類の遺産に傷をつけるという大罪を犯した。だが伯爵は、モーツアルトが楽譜の間に隠し、永遠に封印した筈の遺作を暴き出すというそれ以上の最大の冒洗を行った……その罪を、フロベールら四人のグループになすりつけて、とあるフリーメーカーの高位階者に売りつけ、自らも法外な十位階特進を得ようとしていたのだ」

それから、〈告知天使〉は静かに言った。

『法廷』の決定は、関係者の社会的抹殺と、フリーメーカーが誇る大作曲家の名誉を守ることだ、と。

——『法廷』……!——

ミロならずとも、唾然としたに違いない。事実、ターナーもその場に凍り付いていたし、メームリンクでさえ、僅かに瞳を見開いたようであった。

フリーメーソンにおける『法廷』とは、スコットランド儀礼三十三位階のうち、三十一番目の〈大審問長官〉が集うロッジを示す。当然、〈告知天使〉もまた、三十一位階の称号の持ち主に違いなかった。最高位の三十三位階〈最高大総監〉が名誉称号であることを考えると、これは実質第二位に相当する。

ただの美術品収集家が、道楽で手にすることの出来る称号ではないのだ。

——よりによつて、こんな最大の黒幕に……!——
ミロが伯爵に捕らわれたことを知つて、思い余つて自ら助けを求めに行つたのか。

カミュを責めるわけにはいかないとはいえ、なんとも間抜けな結末である。

「だが、まだ伯爵は位階売買に応じた訳ではない……彼が十位階特進へのこだわりを捨ててなら、精々称号剥奪程度の処分だとどめるつもりでいた。しかし、交渉は

決裂した。伯爵は、私の最大限の譲歩にも応じようとしなかつたのだ。今、私の手許にモーツアルトの遺作はない。当然、君たちの命の保証をする義務もないのだが」

そこで、ちらりと〈告知天使〉はメームリンクを一瞥した。もしターナーがメームリンクの瞳の色を見ることが出来る位置に居たならば、かつての部下が一瞬見せた訝しげな表情に気付くことが出来たであろうか。

「一度約束したことだ。最後の選択は、君に任せてもいい」
そうして、〈告知天使〉は何でもないことのように訊いた。
『カミュ・フロベールの命と、モーツアルトの遺作と、どっちをとるかね?』と。

「何だと……?!」
「おもわず声を震わせたミロに、〈告知天使〉はふと笑みを含んで続けた。

「カミュ・フロベールはこの屋敷の東棟に捕らわれているようだ。彼は君に、遺筆を伯爵に渡すよう説得に来たはずなのだが……どうやら、欲に捕らわれた伯爵が彼を狂つた画家に与えてしまったらしい」

はつと、ターナーが息を飲む。——さっきの哄笑は。

「東棟の地下だ・・・! 気違いじみた笑い声を聞いた!」

「馬鹿野郎! 何でもつと早く——!」

「だめだ! あそこへの入り口はもう燃えてる・・・」

「なんだって・・・!!」

「全身から、血の気が退いた。あのドナウの河岸で、行動力を蝕んだ一筋の刀傷。あれにやられていたら、この炎の中を自力で脱出などできない。」

いや、それ以前に、一体カミュはまだ無事なのか。

「私なら、抜け道を知っていますよ」

不意に、メームリンクが微笑んだ。

「東屋に通じる道があるのです。今ならまだ間に合うでしょう。」

「だったら——!」

「しかしその間に、西棟の金庫にしまわれている遺作のメモは焼けるでしょうがね」

「な・・・!!」

この男は何を言っているのか。一瞬、ミロは訳がわからなくなつて、不可解な笑みを浮かべる優しげな顔を見つめ、それからその主の顔を見た。

虫も殺さないような、優美な姿である。柔らかなウエーブを描く、琥珀色の髪。高貴な生まれを思わせる、上品な物腰。黙つていれば、誰しも騙されるであろう。

その、時折底知れない深みを増す、鳶色の瞳に気付かなければ。

「カミュは東棟に捕らわれている。だが、遺作は西棟の金庫にしまわれている・・・そこへの道を知っているのは、伯爵の記憶を読んだこのメームリンクだけだ。どちらかを取れば、その間にどちらかが焼かれるだろう。私なら、当然遺作を取るが・・・君たちの命も買うと約束したのでね。このような事態で、君は依頼人がどちらを選べと言うか、わかるかね?」

それから一呼吸置いて、午後の日差し色の色(天使)は、涼しげな笑みを浮かべたままとつてもない一言を結んだ。

「・・・メームリンクに案内させよう。君が、どちらでも好きな方を選びたまえ。」

ミロは、全身が震えるのを自覚した。——選べ、だと?! 人の命と紙切れとを、まるで肉の焼き加減を訊ね

るかのように？

四肢をほとぼしる血が泡立ち、一瞬、目の前が白くなった。今、この体にはちきれんばかりに溢れているのは、怒りか。こめかみを殴打するような頭痛が、絶え間なく押し寄せる。灼熱する精神の陰で、しかし、彼はそれだけでではないことを知っていた。

この男の前では絶対に認めたくないもの——恐怖。

そう、自分は迷っているのだ。紙切れ一枚——それがもし、万人の心に結晶する名作であつたら？ と。

最晩年にモーツァルトが書いた四十八小節の佳曲『アヴェ・ヴェルム・コルプス』のような、病める者に生きる希望をもたらす人類の至宝であつたら・・・？

一体自分は、その責任をとり切れるのだろうか？

血の気を失い、歯を食いしばって天を睨み付けている若き画家を、ターナーはある驚きを持つて見つめていた。彼には理解出来なかつた。ミロが何故このような問いに逡巡しているのかを。だが、ここで素直に答えを出せる魂の持ち主ではないからこそ、〈告知天使〉はこのような問いを課したのだろうか。

——結局、ゲームなのか・・・？——

主の真意がわからなくなる。何処までが遊びで、どこまでが本気なのか。本当に、カミュの命も、遺作も、どうなつてもいいのか。人の命と紙切れを比べるなら、自分分は当然命をとる。たとえ、命令に背くことになつても。ミロに、カミュを助けに行けと言つてやりたかつた。その間に、自分は遺作を炎から救うべく努力してみよう。それで、すべてが丸くおさまる。

だが、声は出なかつた。

ミロは、自分の存在をかけて、この問いに挑んでいるのだ。

——愚かな・・・——

だが、愚かしく見えるほどに純粹でなければ、どうして芸術家を名乗れようか。

長い、長い沈黙の時が過ぎたような気がした。時間にすれば、それはほんの数秒であつたかも知れない。だが、ミロには、永遠に近い無駄な時間を過ごしているように思われた。

答えは、既に出ている。カミュに出会うずっと以前か

ら、だ。

自分には、命よりも大切なものがある。ましてや、どれほど足掻き、血の叫びを上げて、モーツアルトの天才には遠く遙かに及ばないのなら――

長い人類の歴史の中になつた一瞬存在するちっぽけな人間の罪悪感など、永遠に近い時間を生きる芸術に比べれば、なにほどのものがあるうか。

それに、カミュだつて、とうの昔に脱出しているかも知れないのだ……

ミロは、顔を〈告知天使〉の方に向けた。踏み出した一歩が、空虚に、ギャラリーの空間に響いた。

ごくり、と唾を飲み下した。声は、かすれていた。

「……カミュを助けに行く。案内してくれ」

息を飲む音が聞こえた。誰のものだつたらうか。

〈告知天使〉は、ほんの少しだけ、その両の瞳を見開いた。どちらの答えを期待していたのか……いや、本当に、どちらでも良かったのかも知れない。

「……結構。ではすぐに行きたまえ。モーツアルトがこれ以上侮辱されることはあり得ない……私はロツジ

に戻る」

くると踵を返し、〈告知天使〉は外へと通じる扉を開けた。さつと冷たい風が舞い込み、炎で熱された空気を吹き払う。午後の光を燦々と浴びる階段のきざしはして、〈告知天使〉はふと後ろを振り返った。

「……楽しみにしているよ。これからの君の絵を。」

立ちこめる熱が、頬を焼く。

狭い地下道も、走り抜ける側から、猛火に焦がされて崩れ落ちて行く。

巧みに配置された排気口が、今は炎の勢いを煽つていた。焼かれた石壁は耐え難い熱を放ち、まるで地下全体が蒸し焼き釜のようだ。

やつと辿り着いた狂画家の部屋は、既に業火に包まれていた。

「カミュー何処にいる……」

心臓が、激しく波打つ。まだ、諦めたくない。諦めき

れない。

「返事をしろ……！」

僅かに残された空間を求めて、ミロは彷徨う。

モーツァルトになんか、叫ぶはずがないのだ。

焼けた遺作の代償など、描けるはずがない。

だが、それでも、己のありつたけをぶつけた絵を、カミュに見て欲しいと思った。そう思った自分に、驚愕した。

人の命と紙切れとを比べて、人の命を取ったからとて、一体誰が責めるだろう？

許さないのは、自分。責め立てるのは、自分。

代償を生み出すことすら出来ないくせに作品を見殺しにするのなら、芸術家を名乗る資格はないと、傲慢にも自惚れていた。

だが、如何に高尚な芸術精神を持っていようが、作品を生み出せないなら、その時点で画家ではないのだ。

誰かに見て貰うために、描いて、描いて、叫びながら死ぬ。一生へば画家でもかまわない。失ったものを後悔してもいい。

描きたいから描くのだ。

その絵を見てくれる相手に、ほんの僅かでも伝えたいから、描き続けるのだ。

過去の遺産を守りきったという、僅かな慰めと、深い劣等感を抱いて生きる代わりに。

「カミュ！カミュ……！」

叫ぶ声は、炎の立てる轟音にかき消される。ミロは汗のしたたる両手を握りしめた。……落ち着け。自分には、神か悪魔かに恵まれた勘がある。

目を閉じて、じつと耳を澄ませた。頭の奥で、水滴の滴り落ちる音が聞こえた。

——…水…？——

こんな灼熱地獄の中では、絶対に聞こえるはずのない音。

「そうか……あの部屋！」

自分が幽閉されていた部屋。今も床には、いくらかの水が残っているはずだ。

急に炎に向かって走り出したミロを、メームリンクは驚いたように追った。だが、彼は画家の青年を止めるこ

とをしなかった。彼には判っていたからだ。ミロの勘は、ただの勘ではないことが。

いくつもの炎の輪をくぐり抜け、間一髪でなだれ落ちる天井を避けながら、ミロはついに元居た部屋を発見した。その水の中に、真紅に染まったモスリン一枚を纏って呆然と立ちつくす人影と供に。

「カミュー!!」

水の中の人が、緩慢に振り返る。まるで、地響きを立てて崩れ落ちる館の悲鳴など聞こえないかのように。

「カミュー! 無事か?!」

「・・・ミロ・・・?」

呟きも、押し寄せる熱風のたてる音にかき消される。ミロは、神に感謝した。

まだ、自分は生きていいのだ。

生きて、描いて、描き続けていいのだ。

夢中で、カミュの元まで駆け寄った。赤い、赤い血の色——それが、本物の血ではないことを知り、ほつとする。

「この馬鹿! こんなところで何してる!」

手首を掴んで引こうとし、その紫色に腫れ上がった両手を見てぎよつと目を見開いた。無理矢理戒めを引きちぎったとしか思えない、白く骨の覗いた手首。

「・・・カミュ・・・あんた・・・?!」

幽閉されている自分を助けるために、無茶苦茶な脱出を果たしたのか。

自由になったのなら、さつさと逃げればよかったのに。炎の中に飛び込んで、対象を見失って——こんなところで茫然自失してるなんて、まったく間抜けもいいところだ。

襲いかかる煙が目にしみて、涙がにじんだ。

これだから、この育ちのよすぎる泥棒を放っておくわけにはいかなないのだ。

「ミロ! 急がないと退路を塞がれます!」

メームリンクの切迫した声が飛ぶ。我に返って、ミロはカミュの肩を叩いた。

「カミュ! 走れるか?!」

返事はない。ミロの声も、まるで遠くにきいているかのような。

「カミュ！」

無理矢理腕を掴んで引いた。二、三歩、何かに躓いたかのように、前へ歩み出す。それから、カミュはゆつくりとミロの腕の中に倒れ込んで意識を失った。小さな、うわごとのような言葉を残して。

「ミロ……無事で………」

chapter 8 事件の終わり

「まあ、あなたもお屋敷の火事です？ 大変でしたわね

え！」

中年の看護婦は、ときばきとミロの頭に包帯を巻きながら、息づく間もなく喋りつづけた。

「あたしの息子もね、あそこに勤めてましたのよ？ あ

そのお屋敷は大きいから、たくさんの方が勤めてましたでしょう？ 先の火事でみんなどこかしこ火傷を負って、大変だったんですよ！ うちはこんな小さい病院だから、ベッドの数も足りないし……あ、でも、何故か大怪我をした人は少なくて良かったんですけれどね」

ミロは、甲高いその声を遮る気力もなく、ただ黙って看護婦のお喋りを聞いている。——制止しても無駄なことは、この三日間で重々承知している。

ミロとしては、やつとこのことでカミュの傷から看護婦の興味がそれたようなので、余計な口を出してまた好奇心を持たれないようにおとなしく聞いているしかないというのが実状であった。

話を聞いているふりをしながら、そつと視線を窓の外に遣る。空は青々と快晴で、木々の梢には鳥たちの平和なさえずりがこだましていた。

あれから。たった三日しか経っていないというのが嘘のようである。

炎の中、気を失ったカミュを背負って無理矢理脱出した。無理矢理、というのがあまりにもびったりで泣けてくる。メームリンクは、本当にとんでもない奴だった。落ちかかる火の塊を念動力で吹き飛ばすこと数十回。あれじゃ、自分たちがかなうはずもない。

『あなただつて大したものですよ』

思わず敗北宣言をしたミロに、メームリンクは笑つて言つた。

『あなたは今、私が道を知っていると思つていて、でしようが……私の知る道は、とうの昔に焼け落ちましたよ』
 何でも、彼は今、ミロの頭に閃く道を読みとつて進んでいるのだという。

『……はあ？ それじゃ今俺たちは——』

『勿論、あなたの勘に従つて進んでいる、ということになりますね』

その力は立派な予言能力だと、メームリンクは言つた。実際に様々な超能力を持つ彼が言うのだから、おそらく間違ひはないのだろう。

なんとか、二人で尋常ならざる力を合わせて地上に出

ると、ターナーがじりじりしながら車を用意して待つていた。全く、敵ながら憎めないお人好しである。思わず吹き出しそうになつたのを無理矢理唇を下げてこらえていたら、横からこつそりメームリンクが呟いた。

ローザンナを守つたのは彼だ、と。

——意外に、お似合いかもな。——

少なくとも、自分よりは、彼女のことを大切にするんじゃないだろうか、という気がする。

カミュは、ターナーが手配してくれていたおかげで、すぐに治療室に運び込まれた。実のところ、この火事のおかげで町の診療所は溢れかえっており、ミロやターナーの火傷についてはまる一日経つてやつと診てもらえた、という具合だつたのだ。

医師は、カミュの傷の理由については全く触れずに、てきぱきと治療をしてくれた。

そんなところまで見越してこの病院を手配したのなら、やつぱりターナーは敵ながら天晴れな奴である。

「……ですからね。本当に……伯爵様だけが亡くなるなんて、なんと気の毒なことなのでしょうねえ……」

つらつらと、これまでの経過を思い出していると、不意に看護婦のお喋りが耳に飛び込んできて、ミロはぎよつとして我に返った。

「…伯爵が、亡くなった。今、看護婦はそう言わなかったか？」

「…おい、それって——」

「あら、ご存じなかつたんですか？」

目に見えて顔色を変えたミロの様子に、まずかつたかしら、とあわてて口を押さえる。

「うちの息子も知ってたから…てつきりご存じかと…」

「いや、まずくない。詳しく教えてくれ！」

急にくつてかかった患者に気圧されて、お喋りな看護婦は、さつきまでの勢いが嘘のようにしどろもどろに喋り始めた。

「その…何でも…ねえ？ 大事な美術品が燃えてしまつて、錯乱なかつたらしくて…」

錯乱。あり得るかも知れない。大事な資金源が燃えたのだ。あの、金の亡者なら。

「聞いた話ですけどね。…ご自分から、炎の中に投身なかつたらしいんですよ。」

「…結局、メモの中身を知る奴はいないってことか…」

オーストリア行き列車のコンパートメントから外を眺めながら、ミロは面白くなさそうに言った。

「あの強欲伯爵が、みすみすメモの内容を他人に口外するわけがない。あの世まで、秘密を持つて行つちまつた、つてことだろうな」

最後くらい世のため人のために貢献すりゃいいものを、と憤慨する姿を、笑つて見ている姿がある。両手にまだ包帯をまいたままのカミュだ。

全く同感だ、と言つてやりたいところだが、彼はミロよりも少し伯爵を知っていた。

「口外したくても出来なかったというのが実情だろうな……伯爵は、音痴で有名だ」

「……は？」

「メモの内容が曲だつたとしたら、たとえ伯爵が生きていたところで、正確に再現出来たとは思えない……。それだつたら、謎のままの方がモーツアルトの名誉だつたかも知れない」

さらりと言われて、なんとも言えない表情になったミロである。

事件から二週間経つて、カミュの傷はおおむね回復していた。結局、ひどかったのは荒縄を引きちぎった時に出来た手首の傷だけだつたのだ。『どうやってちぎつたんだ』と呆れたミロに、カミュは自分でもわからない、もう出来ないだろう、と笑つた。

やらなければならぬことは沢山ある。まず、燃えてしまった家の代わりの住居を探さなければならぬし、弁護士を呼んで火災保険の申請をしなくてはならない。売却の契約を済ませたのに、家と一緒に燃えてしまった絵画もある。だが、カミュが真つ先に手を着けたのは、

ミロが隠していた遺筆をオーストリアに返すことだつた。

『あれを返さなければ、事件は終わらない。』

そう呟いたカミュに、ミロは反対しなかつた。

かくして、二人は新しく住む場所も定まらないまま、列車に乗つたのである。

「腑に落ちないことが、いくつもあるんだよな」

段々と山がちになつていく景色を眺めながら、またミロがぼつりと呟いた。

「いちばんいけないのは、あの天使野郎だ。俺たちが知る必要もないことまでわざわざ教えて、余計に事件を混乱させやがつて。大体あの野郎、初めからメモの正体を知つてるような口振りだつたからな」

すべての事情に通じた今となつては、おそらく奴はメモの正体を知っているのだろう、とミロはふんでいる。へ告知天使の元には、とんでもなく有能な部下がごろごろとついている。詳しい中身まではわからなくとも、ど

ういう性質のものかを調べることはそう難しくはないはずだからだ。

問題は、何故、知らせる必要のないことまで自分たちに知らせたか、ということであつた。

「——どうも、遊ばれたようで気分が悪い。あいつ一体、何者だ？」

フリーメーソンの〈大審問長官〉の称号の持ち主で、なんでも狙つた獲物は必ず手に入れる財力も持ち合わせているらしい。そして、星座名のコードネームで呼ばれていた部下たち……

それだけ揃つてりやもつと目立ちそうなもんだが、と呟いたミロに、ふと、カミュは視線を投げた。

気になつていることがある。収集家ガブリエル・ウエーベルンを見るときに感じる、一瞬の奇妙な既視感——

「……カミュ？」

「……いや、何でもない。」
とらえどころのない感覚は、追おうとすると、霧のように消えてしまう。誰に似ているのか、とても思い出せそうにない。

「……ふ……ん……?」

コンパートメントの外で、がらりと扉が開く音がした。いやに陽気な車掌の声が、その後が続いた。

「失礼します。パスポートと切符を拝見します」

列車は、チューリヒからザンクトガレンを越え、リンダウに向かつている。もう数十分で、オーストリア国境だ。

カミュがチケットとパスポートを差し出すと、車掌は陽気な顔を更にくしゃくしゃにして笑つた。

「お客さん、ザルツブルグで降りるんですかい？ 今あそこは見物だよ！ モーツアルテム付属の博物館がもうすぐオープンになるからねえ」

「博物館……ですか？」

「建物が古くなつたんで改築したらいいんだが、そのついでに資料室を作つたらしくてね。お客さん、モーツアルトは好きですかい？」

思わず、二人は顔を見合わせる。とつさに、『もうたぐさんだ』と言いかけたミロの足を思い切りつねって、カミュは慌てて気のいい車掌に笑いかけた。

「——ええ。私たちも、それを見に行くんですよ。」

「・・・あんだ、身の危険にさらされてから、ちと凶暴になつたんじゃないか？」

ひりひりと痛む足をさすって歩きながら、ミロはぼそりと呟いた。山あいに近いこともあって、ザルツブルグはパリよりもひんやりと冷たい空気に包まれている。『ザルツブルグ』、とは『塩の城』の意味であるが、今日この町を支えているのは岩塩などではなく、モーツアルトとカトリック文化である。——なにしろ、一歩足を踏み入れれば、何から何までモーツアルトなのだから。

「モーツアルトの生まれた家に、モーツアルト広場。ここではカフェの名前まで『モーツアルト』とくれば、いい加減うんざりするよな。——大体、モーツアルトは大司教と喧嘩してこの町を飛び出したんじゃないか？」

「・・・ミロ。頼むからその台詞、この町の中では言ってくれないな。この人たちはモーツアルトに並ならぬ愛着を持つてるんだ」

それだけでなくも彼らはモーツアルティアンから恨みを買っているのだ。立場をわきまえてくれ、と言外に込めたつもりだったが、その実、ミロがそんなことを気にするような性格なら、初めから自分に手を貸したりしなかつただろう、ということもカミュには分かつている。

「言わねえよ・・・これ以上つねられるのはごめんだからな」

にやりと笑って返したミロに、カミュは小さく溜息をついた。

「・・・随分と根に持っているな・・・」

「別に？ おっと、着いたぜ？」

目的地についてみると、成程、確かに改築が終わったばかりなのであろう、真新しい建物が目前にそびえていた。無意識に全身を強張らせたカミュを見て、ミロはこっそりと息をついた。ここへ来るまで、たわいもない話をしながら、なるべくリラックス出来るように気を配って

きたつもりなのだが——根がまじめなこの泥棒は、どうにも敵陣討ち入りの心境から逃れられないらしい。

——今更、奴らがそう根に持つているとは思えないんだがな。——

既に、事件から三十年経っている。当時の怒りを温存している人間がいたとしたら、たいしたものだ。

受付嬢に面会を予約してある旨を告げると、最上階の客室にすぐに通された。大分前から、まぢかねていたものらしい。——程なくして入ってきたのは、丸く頭の禿げ上がった、随分と恰幅の良い中年の紳士であった。

「これはこれは。館長のミヒヤエル・ウインベルガーです。遠路はるばる、ようこそおいで下さいました」

「カミュ・フロベールです。・・・この度は、誠に申し訳なく——」

「ああ、堅苦しい挨拶はなしにしましょう。それよりも、早速、モーツアルトの遺筆を見せてくださいませんか」

まるでカミュの謝罪など聞いてもいないかのような、満面の笑みである。カミュはしばし呆気にとられ、それから慌てて鞆の中のプラスチックケースを探った。

ミロが遺筆を隠したタロットカードごと持ち出していたことに気づき、慌てて駅で買ったケースに綿を敷いておさめたものである。

「——これです。長い間油彩画の絵の具の中に隠されておりましたので、油がしみていなければよいのですが・・・」

「おお・・・！」

ウインベルガーは一瞬目を見張り、それからおそるおそるケースへと手を伸ばした。三十年前、一人のフランス人によつて奪い去られたモーツアルトの遺筆は、この瞬間、その息子の手によつてあるべき場所に還つたのだ。

彼は、そのプラスチックケースを、壊れ物を扱う手つきでそつと分厚い手のひらに置いた。目を近づけると、青黒いインクで記された『zu anfang』の文字がはつきりと見えた。

感極まつたような吐息が漏れる。

「・・・どんなにか、無念だったでしょうなあ・・・きつと、頭の中には全ての音楽が鳴り響いとつたに違いない。それを紙面に書き付けるだけで良かったのに、その時間

すらなかつたんですからなあ……」

独り言のような呟きだった。その人なつっこい両目に朱がさしているのを見たとき、カミュは一つの答えがごとりと音をたてて胸の奥底におさまったのを感じた……確かに、この遺筆はフランスにあるべきではなかった。この、誰よりもモーツアルトを愛する人たちの元にごそ、かの天才の遺産はふさわしい。

「そしてその弟子も……きつと、師匠の遺志を継ごうと、一生懸命になつたんでしようなあ……悲しいかな、弟子のジュスマイヤーとモーツアルトの才能はあまりにもかけ離れている。それを一番よく知っているのは弟子本人だつたらうに……師匠の頭の中に、完成品はあるのに……それを諦めて、自分が書き続けるのは一体どんな心境だつたでしょうなあ……」

自分は何を恐れていたのだろうか。——カミュは思う。彼はきつと、父と自分が犯した罪に怯えてきた。父が死んだときも。伯爵邸から、モーツアルトの肖像画を奪つたときも。自分たちの犯した罪を忘れまい、いつか必ず償わなければならない、と。

だが、罪悪感に怯え、命の危険に晒される日々の中で、いつしかモーツアルトを憎んではいなかつただろうか？ 最も神に愛され、最も不遇な最後を遂げた大作曲家の、血の滲むような最後の一言を手にしたがら、この目の前の人物のような思いに打たれたことがあつただろうか……？

初めて、心から申し訳ないと思った。父の罪を、自分のことのように。

「嬉しいことです……私が生きている内に拝むのは不可能だと思つたりしましたからなあ……まさか、息子さんの代になつて届けて下さるとは……」

「……その言葉を、父に聞かせてやりたかつた、と思います。父は気弱な人間で、自分の犯した罪に怯えて自首することも出来ず、死ぬまで後悔し続けていました……あなたのその言葉を、父が生前に聞くことが出来たら——」

きつと、その場で正しい道に立ち戻れたに違いない、音もなく、カミュの両目から光るものが流れ落ちた。

それは、彼が父を失って初めて流した、弔いの涙だった。

館長は、一瞬驚いたように目を見開いて——それから、何も言わずに、ただ黙って微笑んでいた。

透明な涙は、あとからあとから溢れて、つきることを知らない。

ミロは呆然として、その静かな横顔を見つめていた。

人の中に、これほどに美しい水の姿があつたのか、と。

それは、森の中に輝く湖の光と同じだ。——では、燦々と降り注ぐ太陽の光は？ 爽やかに木々を揺らす風の姿は？

人は自然から生まれ、彼の愛する自然の姿は、人の中にある。そんな簡単なことに、今まで気づかなかつた。

「……ご心配は無用ですよ、フロベールさん。」

やがて、しばらく経って、ウィンベルガーが優しく呟いた。罪人の息子を勇気づけるように。

「この度の事件、我らがアマデウスならばきつと陽気に笑い飛ばしたことでしょ。——本人が気にもしていないことを、その末裔が責め立てたりしては天国でモーツァルトに怒られますのでね。」

かくして、三十年前に端を発した盗難事件は、ようやく終わりを告げた。

人なつっこい館長は、オープン間近の博物館を自ら案内し、そのついでにとんでもない提案を口にした。

戻ってきた遺筆は、展示の目玉になる。どうせなら、遺筆が隠されていた肖像画も同時に展示したい、というのである。

「それは……勿論かまいませんが……」

あまりに唐突な申し出に、カミュはたつぷり五秒ほど躊躇してから言った。

アンドリュー・ニールセンが描いた肖像画は、あの火事の中、リンネが持ち帰っている。リンネさえ承諾すれば、別に問題はないのだが……

「……問題は、あれ、あんまりいい出来じゃないんだよね」カミュがいいあぐねていた言葉を、隣からミロが代弁

した。

「実のところ、あの野暮つたい薔薇がなくなれば、決して悪くはないんだが。でも、描き込んだしまったものはどうしようもないからなあ」

まあ、どうせ本人は亡くなっているのだし、遺族もないようだからかまわないんだが、と故人に恨まれそうな台詞を口にする。

「では、あなたに解説をお願いしますよ。．．．そういえば、遺筆は絵画の中に埋め込まれていた、とのことですが．．．発見されたのはあなたですか？」

先を立って歩くウインベルガーが、興味津々の表情で振り返った。

「．．．まあ．．．そういうことになるかな。実は、写真があつたので、その違いを見つけただけなんです」

「成程．．．それは面白い！」

「．．．は？」

悪い予感に硬直しているミロを後目に、ウインベルガーは両目を輝かせた。

「三十年も行方が分からなかった遺筆の所在はどのよう

に発見されたか！ そうだ、その種明かしも一緒に並べられたら、きつと楽しい展示になりますよ！ 肖像画がだめでも、それだけでも十分です。どうぞ、よろしくお願いします！」

「ちよ、ちよと待って——」

咄嗟に何を言っているのか分からずに混乱するミロの後ろで、ゆつくりとした足音が近づいてきた。カミュが笑いながら、その足音の方へ顔を向ける。と、その瞬間、カミュの全身が凍り付いた。

「．．．ミロ！」

切迫したカミュの声に、ミロが弾かれたように背後を振り返る。

そこに見たものは。

「こんにちは、館長殿。準備は順調なようだね？」

目の覚めるような青銀色の髪、底知れない深みを宿す

深緑の瞳——

だがその顔は、まぎれもなく〈告知天使〉のものではないか？！

「これはこれは、ヴァイッテルスバッハ殿、ご連絡下され

ばお迎えにあがりましたのに・・・」

「いや、かまわないよ。今日、遺筆が戻ってくると聞いて、是非一目拝みたくてね。仕事を抜け出して、執事にも黙って来ているんだ。是非内緒にしておいてくれたまえ」

それから、ヴィッテルスバッハと呼ばれた紳士は、凍り付いている二人の青年の方に向き直り、優雅に会釈して言った。

「——ようこそ、ザルトツブルグへ。私は、サガ・ガブリエル・ヴィッテルスバッハ——このモーツアルテム財団の総帥を任されている者です。」

「あんののやろおおおおおっつ！！ 絶対ゆるさねえ——っつ！！！！」

帰りの電車を待つプラットホームで、ミロは途中で買ったライ麦のバゲットを握りつぶしながら吼えた。

「へ告知天使」だあ?! ふざけやがって!! てめーなん

ぎアスタロトかベルゼブブで十分だ!!!」

結局。最初から最後まで、あの男の手の内だった。フリーの収集家とは、また大した隠れ蓑だ。ヨーロッパで最も由緒ある王家の子孫で、現在のモーツアルテム財団総帥。

「ガブリエル・ヴィッテルスバッハ・・・確実に、我々の落ち度だよ。彼は、ちゃんとガブリエル・Wと名乗っていた・・・君の言った通り、フリーメーソンの高位階の持ち主で、莫大な遺産をもつ人物などそう沢山は考えられない。その名前を聞いた時点で、気づかなければならなかったんだ・・・」

カミュの方は、呆然として怒る気力もない。どうりで、見覚えがあるはずだった。モーツアルテムの総帥の顔なら、テレビで何度か見ているからだ。

あの豪華な銀髪イメージが強すぎて、結びつかなかった。

髪の色と目の色など、かつらとコンタクトでどうにもなるというのに。

——どうにも、遊ばれたとしか思えないな・・・——

ミロに聞こえるともた怒りが爆発するのは目に見えて
いるので、カミュは心の中で呟いた。

「……彼は、ミロの芸術家らしいプライドを気に入って、
こんなちよつかいを出したのではないかと。」

無論、自分もゲームの対象であったには違いないのだ
が――

「……つてことは、どうせ、焼けたはずの遺作も、あ
いつの手の内なんだろうな」

不意に、さつきまでの激昂が嘘のように、ミロがぼつ
りと呟いた。

〈告知天使〉には、ゲームを楽しむ余裕があった。で
あれば、ミロがカミュを助けに行っている間に、自分で
遺作を救いに行くくらいのことは出来たに違いない。――
いや、それ以前に、ミロにあの問いを発した時点で、
既に手に入っていた可能性は十分にある。

「……ミロ？」

「……物笑いもいいところだ。たかが紙切れ一枚と、
人の命の重さを、真剣になって比べて――さぞかし、あ
いつは可笑しかっただろうよ。『これからの絵を楽しみ

にしている』とは、よく言ったもんだ」

カミュには、ミロの呟きの意味がわからない。だが、う
つむいて拳をふるわせながら嘯み殺しているものの正体
に気づいたとき、ふと、かの画家に起こった変化を悟つ
た。

確かに、これからの彼の絵は楽しみであるにちがいな
い、と。

列車が、甲高いベルの音とともに、プラットホームに
滑り込んできた。カミュは椅子に置いていた荷物を取り
上げると、まだ拳をふるわせているミロの肩を叩いて
笑った。

「――いいじゃないか。もうこれからは、君が間抜けな
泥棒の為に胃を痛めることも、私が大切な友人の為に無
茶をすることもなくなるのだから。」

epilogue 光を掴まえた肖像たち

三ヶ月が過ぎた。

ミロは、ヴェネチアへと向かう船の上で、絵筆を走らせていた。夏のヴェネチアは、殆ど観光客ばかりだ。船の中の人間も、アメリカ人や日本人が約半数を占めている。

ミロは、こういう雑多な空気が嫌いではなかった。イタリアでの『生活』は、ある種の翳りを思い起こさせる——それは華やかな外見とは裏腹に、知らず知らず

のうちに、精神の深みに食い込んでいく。

『観光地』としてのイタリアが好きだった。フランスから戻ってきた後も、ミロはずっと観光客のつもりでいる。

カミュとは、パリで別れた。大学も休学した。

まだ、何も描いていなかったから。何か、書き上がる日まで。

結局、陽気な館長に丸め込まれて、ミロは遺筆が発見された経緯の解説を書くことになった。

絵の提供を求められたリンネは随分と困っていたようだが、それでも、最終的には譲ることに決めたい。あれがどのように展示されるのか、想像するたび、ミロは笑いを禁じ得なかった。

へたくそな、しかし愛だけはこもった肖像画は、立派なガラスケースに飾られて、日の目を見ることになった。

カミュは、しばらく店を閉じることにしたようだった。

『今の私には、芸術を扱う資格がまだない』と。オー
ストリアで、何かしら、感じるところがあったらしい。

母校の美大に、もう一度入り直した、と手紙が来た。

くすり、と笑いが喉をついた。

死にそうな目に遭った。散々悩んだ。憤り、胃がおかしくなるほど心配した。

だが、なんと鮮やかな日々だったことだろう。

絵筆が進まないことに気付いて、ミロは、軽い音をたててスケッチブックを閉じた。その隙間から、はらりと一枚のカードがこぼれ落ちる。

『星』のカードだった。

ザルツブルグまで持っていたときにスケッチブックに挟んでおいたのを、すっかり忘れていた。隠した遺筆

を取り出したまま、修理もしていない。こんないい加減な有様だから、最近はずっともカードを練っていない。

拾おうとして指先を伸ばした瞬間、それは風に煽られて転がった。

「——おい！」

手を伸ばしたが届かず、立ち上がったて駆け出す。何故か、このカードを失ってはいけないような気がした。

甲板を走る。日傘を差したご婦人方が、目を丸くして道を明ける。

「待てよ！——こちら！」

カードは、甲板の端まで転がる。

あともうひと吹きで海、というところで、それは一人の観光客の靴に当たった。

すんなりした、デッサンのモデルにしたいような手が、それをつまみ上げる。

腰をかがめた身体が、まっすぐに向き直ってちよつとカードを確かめ、そのままその手を前に差し出した。

「危ないところでしたね。」

呆然と立ちつくして、声も出ずにいるミロの前に。

「……カミュ……?!」

涼しげな切れ長の目の中で、暁色の瞳が笑っている。

「……あんた……なんでこんなところに……!」

「何で……と言われても困るんだが……ヴェニスには、私の別荘があるんだ」

カミュは手の中のカードをもう一度眺めて、おもむろに差し出した手をひっこめた。

「……これ、修理した方がいいんじゃないか? 確か、カードには精霊が宿るんだろう? 現に君も水攻めに遭ったのだし……」

「やなこと思いださせるなよ……関係ないさ。第一、アクエリアスについてたのはあの時ばかりじゃないぜ?」

ほんと、あの事件に片足突っ込んでからは、何時カードを繰つてもかならずこいつが出てきて……」

絵を描きたいのに、水を辿っていくと必ず厄介に巻き込まれるんだ、と呟いて、ミロはその言葉に凍り付いた。

アクエリアスのカード。辿れば必ず出会ったのは……!」

「……なあ、カミュ。」

「何だ?」

その先を続けるのに、ほんの少し、躊躇する。あまりにばかばかしくて。

「……あんた、ひよつとして水瓶座……?」

カミュは、しばらく何が何だかわからない、というような表情でミロを見つめていたが、やがて、真面目に答えた。

「——二月七日生まれ……確かに水瓶座だが?」

ほんの数秒の間、ミロは、何とも不思議な表情をしていた。だが、ついに鳩尾に手をやると、そのまま周りの観光客が目を剥く大音声で爆笑した。

ばかばかしくて、涙が出た。

結局、カードは正しかったのだ。

ミロがこれから描くもの。いつも、変わらずそれを示していたのだ。

「……ミロ?」

「ハ……ハハハ……ごめん……! とまらなくて……」

何から何まで、ばかばかしい結末ばかりで——

こんなばかばかしさなら最高だと、ミロは思った。

「ミロ……何だか、かなり注目を浴びているんだが……」
「し……失礼……！」

無理矢理、笑いを納める。そうだ。この台詞ぐらい格好良く決めなければ、自分のプライドが許さない。

ミロは、まっすぐにカミュを見つめた。カミュが、少し驚いたように、目を見張る。

息を、深く吸い込んだ。その風は、潮の匂いがした。

「カミュ・フロベール殿。お時間を取らせて申し訳ないが、あなたの肖像画を描かせて頂けませんか？」

題名 「光を掴まえた肖像たち」

著者 祥曲 星祈 (sforzato)

1993～2000年にかけてサークルペーパー「Capriccioso Walts」に連載

2000年2月 完結編 発行

この作品の二次配布は、以下の条件を満たす場合に限り自由ですが、著作権は放棄していません。

- 1) 改変、抜き出し等いかなる形の変更も行わないこと
- 2) 著者名及び下記サイト URL を明記すること
- 3) 無償であること

引用等については下記サイトからお問い合わせ下さい。

サイト URL

<http://moo-and-mole.com/waltz/>